

小・中・高・大を連携し、すべての英語教育の"今"を知る。

英語情報

2018
冬号
WINTER

[特集] 小・中・高等学校における 学習評価のあり方を考える



熊本県 熊本市立楠小学校
清水 佳代 先生



福井県立藤島高等学校
三仙 真也 先生



佐賀県 吉野ヶ里町立三田川中学校
吉田 喜美子 先生



福島県 猪苗代町立東中学校
渡部 真喜子 先生

英検

公益財団法人 日本英語検定協会

小・中・高・大の英語教育の“今”を『英語情報』がお伝えします。

新学習指導要領の全面実施に向けて、

これまで以上に、児童生徒主体の言語活動を中心とした授業が求められ、

小・中・高・大をつないだ英語教育改革が進行しています。

『英語情報』では、国の動向から小・中・高の授業改善の取り組み、

大学の入試改革やグローバル化まで、英語教育の最新事情をお届けします。

明日からの授業づくりや指導にどうぞお役立てください。

Information

「英語で授業ができるか不安」「言語活動の具体例が知りたい」

そんな先生方のために

『英語情報 AR』アプリで誌面で紹介した授業の動画を視聴できます。

今号の動画は、発行日より3カ月間（予定）ご覧いただけます。



STEP 1

アプリをダウンロードします。(無料) (iOS/Android対応)

スマートフォンかタブレットを用意して、



または



から「英語情報 AR」と検索し、ダウンロードします。

STEP 2

アプリを起動し、画像をスキャンします。



本誌記事中の **AR** マークの付いた画像が **枠内に収まるようにスキャン** します。

STEP 3

動画が再生されます。

「スキャン完了」と表示されると、動画が始まります。

一度スキャンした動画は「履歴」をタップすれば、いつでも動画をご覧いただけます。

※ iPhone/iPad → iOS 7.0 以上、
Android → ver. 4.0 以上。

Android版は一部対応していない端末がございます。
インストール画面の動作確認端末をご確認ください。

※ カメラのピントが合わなかったり、光が反射したりすると、読み込みができない場合があります。
※ 読み込まない時は、カメラ位置を少し上下させて読み込み距離を調整してください。
※ 読み取りに時間がかかる場合はアプリを再起動し、再スキャンをしてください。
※ 動画の再生にはネットワーク環境が必要です。Wi-Fi、またはLTE環境を推奨しています。



04



16



34



38

02 最新情報

AR 02 NEWS & TOPICS

04 特集

04 「授業改善を考える」

小・中・高等学校における 学習評価のあり方を考える

明治大学 国際日本学部 教授 尾関 直子

10 特集事例 CLASS REPORT

(高等学校編)

AR 英語力のベースとなる「思考力」を
授業で育み、評価する

福井県立藤島高等学校 教諭 三仙 真也

(中学校編)

AR CAN-DOリストを活用した授業で、
生徒の学習意欲と英語力を高める

福島県 猪苗代町立東中学校 教諭 渡部 真喜子

(小学校編)

AR 「かかわり合い」の中で、
主体的に活動する児童を育てる

熊本県 熊本市立楠小学校 教諭 清水 佳代

16 授業改善

16 (連載) 安河内 哲也先生が聞く【第14回】

AR 明日から使える! 英語で授業 7つの鉄則

佐賀県 吉野ヶ里町立三田川中学校 教諭 吉田 喜美子

22 (連載) 新教育課程に向けて

(高等学校編)【最終回】

技能統合型授業におけるライティングの指導と評価

明治学院大学 文学部 准教授 杉田 由仁

(中学校編)【最終回】

表現力や発信力を高める授業づくり

信州大学 学術研究院 教育学系 教授 酒井 英樹

(小学校編)【最終回】

外国語教科化における文字指導のあり方

愛知県立大学 外国語学部 准教授 池田 周

28 Pick Up! 英語教育

AR 28 (EVENT REPORT)

第67回 全英連新潟大会レポート
「新潟から世界へ! 新潟から未来へ!」

34 (特別記事)

小・中学校や地域と連携し、
教育資源や人的資源を還元
～明海大学 高野 敬三 副学長に聞く～

38 (SPECIAL INTERVIEW)

「21世紀型スキル」の
習得を基軸に学校改革

“チャレンジ”を大切にする大阪府立箕面高等学校の教育
大阪府立箕面高等学校 校長 日野田 直彦

41 (REPORT)

第10回全国高等学校英語スピーチコンテスト入賞者
海外夏季短期留学報告

42 指導のヒント

42 (連載)「学習到達目標と指導、評価の一体化」を目指して【最終回】
琉球大学 教育学部 准教授 深澤 真

44 (連載) 英検4級・5級で広がる英語の世界【最終回】
鹿児島純心女子大学 国際人間学部 教授 川上 典子

46 (連載) 英検2級の「壁」を超えるための授業実践【最終回】
北海道札幌国際情報高等学校 教諭 木村 純一郎

48 大学入試・高大接続改革を見据えて

48 TEAP Hot News!

第8回 TEAP 連絡協議会レポート

50 TEAP 活用事例 第12回: 獨協大学

51 TEAP 活用事例 第13回: 同志社大学

52 教員研修

52 2016年度 英検協会 英語教員海外研修
帰国後の取り組み報告

●高等学校

静岡県立浜松北高等学校 教諭 久保田 愛

●中学校

新潟県 新潟市立新津第一中学校 教頭 小林 英男
(研修当時: 新潟市立山潟中学校 教諭)

●小学校

東京都 墨田区立二葉小学校 主任教諭 平澤 卓磨

54 わたしのオススメ本

NEWS & TOPICS

英語学習指導などに役立つ最新情報をお届けします

INFORMATION

実用英語技能検定 2018年度試験日程のご案内

学習指導要領においてコミュニケーション能力の育成が重視され、児童生徒主体の言語活動中心の授業への転換によって、小学校・中学校・高等学校では英語の4技能をバランスよく育む指導を行っています。また、高大接続改革により、大学入試においても英語4技能を評価する試験への転換が求められ、民間の英語資格・検定試験の活用が広がっています。

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）では、より多くの中学生・高校生に入試でもご活用いただけるように、2017年度より実用英語技能検定（英検）の二次試験の日程をA、Bの2日間設定し、受験機会を増やしてまいりました。前号にてお伝えした2018年度第3回検定の受付期間に一部変更がございましたので、改めてご紹介いたします。

■ 2018年度 実用英語技能検定 試験日程

試験日程		第1回検定	第2回検定	第3回検定
受付期間		3月9日(金)～5月11日(金) 〈書店締切:5月7日(月)〉	8月1日(水)～9月14日(金) 〈書店締切:9月7日(金)〉	11月30日(金)～12月26日(水) 〈書店締切:12月19日(水)〉
一次試験	本会場	6月3日(日)	10月7日(日)	2019年1月27日(日)
	準会場(全ての団体)	6月2日(土)、3日(日)	10月6日(土)、7日(日)	2019年1月26日(土)、27日(日)
	準会場(中学・高校のみ)	6月1日(金)	10月5日(金)	2019年1月25日(金)
二次試験	A日程	7月1日(日)	11月4日(日)	2019年2月24日(日)
	B日程	7月8日(日)	11月11日(日)	2019年3月3日(日)

※第3回検定の受付開始が、当初の11月22日(木)より、11月30日(金)に変更となりました。

詳細は英検ウェブサイトからご覧ください。<http://www.eiken.or.jp/eiken/>

INFORMATION

TEAP/TEAP CBT 2018年度試験日程のご案内

2018年度のTEAPおよびTEAP CBT試験日程が決定しましたので、お知らせいたします。申込期間につきましては、決まり次第、TEAPウェブサイトにてお伝えいたします。

■ TEAP 試験日程

	試験日
第1回	7月22日(日)
第2回	9月16日(日)
第3回	11月18日(日)

■ TEAP CBT 試験日程

	試験日
第1回	6月17日(日)
第2回	9月2日(日)
第3回	10月21日(日)

詳細はTEAPウェブサイトにてご確認ください。

<http://www.eiken.or.jp/teap/schedule/>

NEWS

英検 CBT を 2018年8月から毎月実施!

英検のコンピューター受験を可能にした英検 CBT。2018年8月より毎月1回実施することになりました。問題は通常の英検と同じ形式で、級の合格認定と技能別スコアも示されます。実施級は従来の2級・準2級に、新たに3級も加わりました。1日で4技能全てを受験でき、大学入試や高校入試でもご活用いただける試験です。ぜひ、英検と併せて受験いただき、ご活用ください。英検 CBT のポイントを解説した動画もご用意しています。詳しくは、ARからご視聴ください。



英検 CBT の
解説動画は
こちら

「英検」研究助成制度のご案内 ～第31回(2018年度)研究テーマ募集について～

「英検」研究助成制度は、全国の小学校・中学校・高等学校・高等専門学校の先生方、大学院の方から研究テーマを募集し、英語教育やテストの専門家による選考を経て、入選者に助成金を交付し、研究を支援する事業です。実用英語の普及・発展と英語能力検定試験の質的向上を目的に1987年に発足し、今回で31回目を迎えます。これまでの「英検」研究助成制度の応募総数は、累計で1,400点を超え、そのうち360点以上が選考されました。入選して研究期間後に提出された論文は、英検協会発行の研究報告書『EIKEN BULLETIN』および英検ウェブサイト等で広く公表され、教育現場をはじめ、関係者の間で活用されています。

■第31回(2018年度)研究テーマ募集要項

【募集テーマ】

- A 研究部門…英語能力テストに関する研究
- B 実践部門…英語能力向上を目指す教育実践
- C 調査部門…英語教育関連の調査・アンケートの実施と分析

【応募資格】

- 小学校・中学校・高等学校・高等専門学校で英語教育に携わる教員(共同研究も可)
- 英語教育に関わる研究を専攻する大学院に在籍する方
ただし、以下のいずれかの条件に該当する方は応募できません。
 - ・「研究」を主たる生業としている方(共同研究者の方も含む)
 - ・第29回および第30回の研究助成制度に入選された方
 - ・研究テーマ(企画内容)が、過去に発表したことがあるもの、または発表する予定のもの(ともに大学院等での修士論文も含みます)
 - ・他の団体等から委託されたもの、または委託される予定のもの

【研究助成金】

交付額 全部門で30万円以内

【応募期間】

2018年2月1日(木)～4月6日(金)

※詳細は英語教育研究センターウェブサイトにてご確認ください。
http://www.eiken.or.jp/center_for_research/

英検研究助成

検索

「今、知っておきたい 英語教育改革、大学入試改革」 英検協会の特設ウェブサイトを公開

2020年度に向けて、小学校・中学校・高等学校における英語教育改革、高等学校教育と大学入試、大学教育を一体とする高大接続改革が進んでいます。なぜ改革が必要なのか、どのような指導が必要なのか、また、大学入試や高校入試制度はどのように変わっていくのか、といった英語教育に携わる皆様の疑問や不安にお応えすべく、英検協会では国の動向や大学入試改革の現状などを分かりやすく解説する特設ウェブサイトを、2017年12月に公開いたしました。日本の英語教育界をリードしている有識者による解説動画ダイジェスト版もご視聴いただけます。なお、ダイジェスト版をご視聴いただいた方には、完全版(約60分)の視聴をご案内いたします。詳しくは、ARから、もしくは下記URLからウェブサイトをご覧ください。

<http://www.eiken.or.jp/exam-univ/>



大学入試
改革ダイジェスト
動画はこちら

2018年度 英語教員海外研修 参加者募集締切迫る!

英検協会は毎夏、小学校・中学校・高等学校で英語を教える先生方を対象に、海外研修を実施し、参加者を公募しております。2018年度は7月28日(土)～8月12日(日)に、オーストラリアのニューサウスウェールズ大学にて研修を行います。参加申込の締切は2月9日(金)必着です。募集詳細は、P.52-53および英検ウェブサイトにて紹介しておりますので、ご興味のある方はお早めにご応募ください。

<http://www.eiken.or.jp/eiken/group/info/#case69>

英語教育関連書籍2冊を 各1名様にプレゼント!

英語教育に関する書籍2冊を、抽選で各1名様に差し上げます。本誌に関するアンケートにお答えいただき、ご希望の書籍番号をご明記のうえ、『英語情報』編集部までご応募ください。詳細はP.54をご参照ください。



PRESENT!

TESTS

特集「授業改善を考える」

小・中・高等学校における

学習評価

のあり方を考える

ASSESSMENT

学習者の言語活動主体の授業へと転換し、コミュニケーション能力の育成、4技能のバランスの取れた指導が求められている。学習者が身に付けるべき能力を示した学習到達目標に基づく指導が行われるなか、評価はもちろん、身に付けるべき技能を適切に測る必要がある。新学習指導要領を見据えて、小・中・高等学校における学習評価とはいかにあるべきか。明治大学国際日本学部の尾関直子教授とともに、指導の改善につながる「学習評価のあり方」について考える。

TEACHING

尾関 直子 (おぜき・なおこ)

明治大学国際日本学部教授。専門は応用言語学・英語教育。研究テーマは、学習ストラテジーを取り入れた授業、CEFRと学習者の自律、外国語学習者のためのスピーキングモデル。主な著書に『統合的英語科教育法』（成美堂）、『高等学校新学習指導要領の展開』（明治図書）、『成長する英語学習者』（大修館書店）などがある。



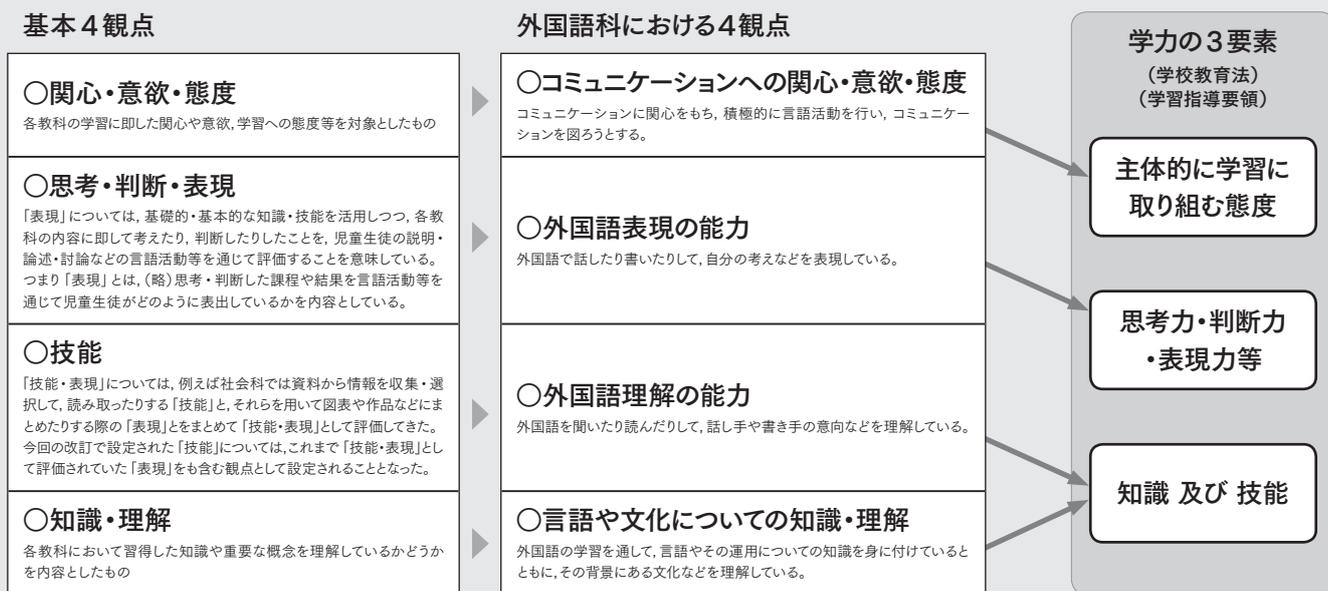
観点別評価とは何か

学校における教育活動に関し、学習者の学習状況を評価するのが「学習評価」です。評価について考えるにあたり、まず中学校や高等学校では、現在どのように評価が行われているのかを整理しましょう。

現行の学習指導要領のもとでは、どの教科においても「観点別学習状況の評価」が行われ、「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の「基本4観点」が設けられています。この評価の観点は評価者にとって、成績を付けるだけでなく、指導の改善に生かすという側面からも重要な役割を持ちます。

外国語科では、これらの基本4観点を「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」としています。評価者は外国語科における4観点到応じた目標を設定し、学習者が目標に対して、どれだけ実現できたかを分析し、学力の3要素を踏まえ、3段階で評価します(下図)。

なぜ、「観点別評価」を行うのか。その趣旨は、指導と評価の一体化を通じて、学習指導の改善や児童生徒に応じたきめ細かな指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することにあります。



文部科学省資料より作成

観点別評価のための多様な方法

皆さんの学校では、どのように「観点別評価」を行っていますか。おそらく、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」については、日々の授業で観察しているでしょう。「外国語表現の能力」については、ライティングやスピーキングでのパフォーマンス評価、学習者の学習過程や成果を集積したポートフォリオ評価があるでしょう。そして、「外国語理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」については、定期テストで評価しているのではないのでしょうか。

しかし、現行の学習指導要領に基づいた授業を通じて、学習者の学びがどれだけ深まっているのかを把握するためには、従

来のような定期テストだけで全てを評価することはできません。そのためにも、「パフォーマンス評価」「ルーブリック」「ポートフォリオ評価」といった多様な評価方法があります。

では、従来のように、定期テストだけで評価をしないのであれば、これらの評価をどのような割合で取り入れたらよいのでしょうか。

例えば、定期テスト50%：パフォーマンス評価25%：日々の授業25%といった割合が考えられるでしょう。評価の割合をどのように設定するかは、各学校の学習到達目標や指導と照らし合わせ、教員同士で連携し、検討する必要があります。

<p>◆ パフォーマンス評価 知識やスキルを使いこなす(活用・応用・統合する)ことを求める評価方法。スピーチやプレゼンテーションなどの実演によって評価する。</p> <p>◆ ルーブリック 成功の度合いを示す数レベルの尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した評価基準表。</p> <p>◆ ポートフォリオ評価 児童生徒の学習の過程や成果などの記録や作品を計画的にファイル等を集積。ファイルを活用して、児童生徒の学習状況を把握するとともに、児童生徒や保護者等に対し、その成長の過程や到達点、今後の課題等を示す。</p>
--

文部科学省資料より作成

定期テストのあり方とは

定期テスト、パフォーマンス評価、日々の授業における評価をどのように考えるべきでしょうか。まずは、定期テストのあり方について考えましょう。

定期テストの問題を作成するには、教員同士の連携が重要です。学習到達目標や授業計画に基づいて、どのような目的でテストを行うのか。また、どのようなテストが必要なのか。さらには、成績に占める定期テストの割合をどうするのか。このようなことを全て、教員同士で話し合っ決めて決めるのです。

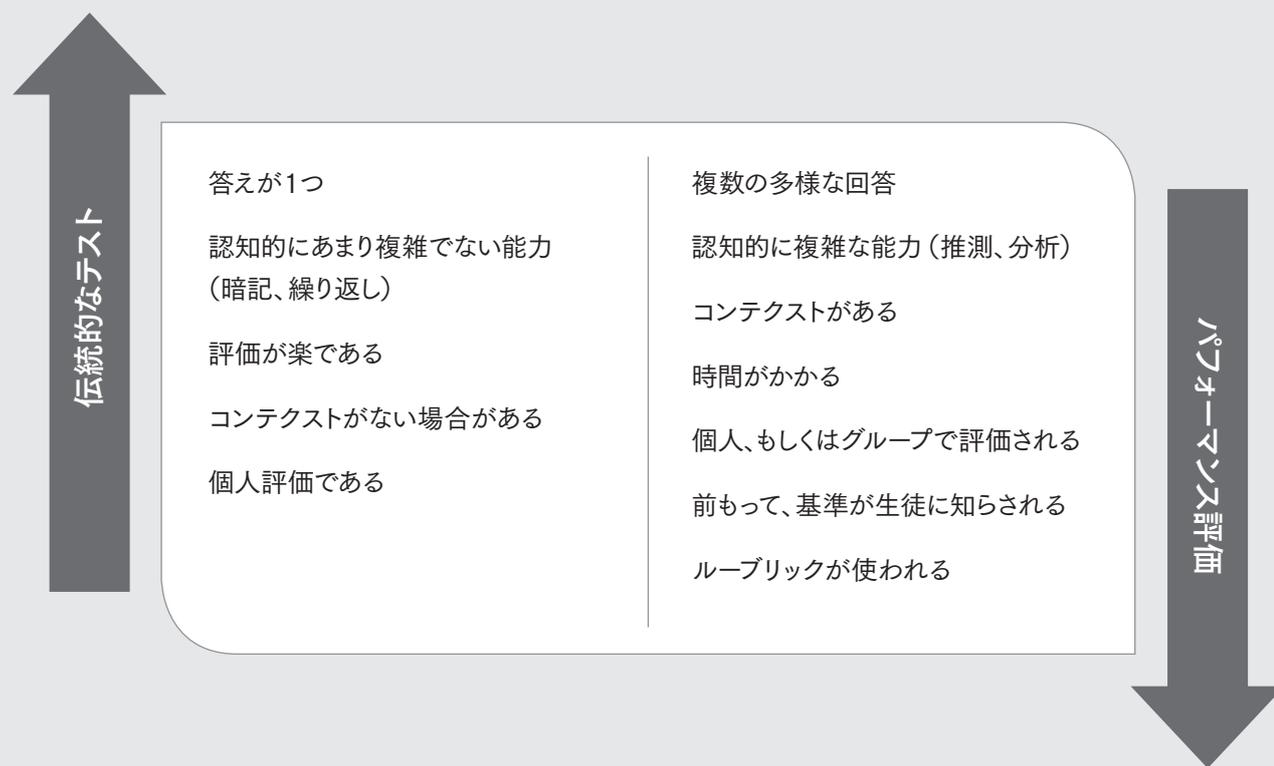
作問にあたっては、既習事項だけでなく、初出の内容をどの程度入れるのか。例えばリーディング問題であれば、2題は初出の問題を入れるべきでしょう。既習事項だけを問うのでは、

知識の有無や記憶を問うばかりで、生徒に求める力が本当に身に付き、使うことができるようになっているのかを測ることはできません。そのためにも、授業で本文を読んで、主題に線を引くといった活動をしたのであれば、定期テストでも同様に初出の英文を読んで、線を引くような問題で評価してもよいでしょう。また、教科書の内容だけでなく、ALTに協力してもらい、教科書本文に類似した問題を作成してもらうこともできます。音声聞いて、英文を正しい順番に並べ替えるといった問題も考えられるでしょう。

リーディングやリスニングの力を測るには、学んだ知識を活用して、応用力を測る出題をすることが必要なのです。

パフォーマンス評価とは何か

次に、パフォーマンス評価について考えます。パフォーマンス評価と伝統的なテストの違いを比べてみましょう（下図）。



伝統的なテストでは、知識の有無といった「記憶」を測ってきました。問いに対して、正解は1つです。認知心理学の観点から見ても、あまり複雑ではない能力を測ることになります。しかし、パフォーマンス評価では、正解は必ずしも1つとは限りません。複数の多様な回答があり、推測や分析の力を測るなど、複雑な能力を測ることになります。また、伝統的なテストではコンテキストがない場合がありますが、パフォーマンス評価ではそれが

重要です。さらに、伝統的なテストは、あくまで個人を評価しますが、パフォーマンス評価においては、個人またはグループで評価されることになります。パフォーマンス評価を行う際には、事前にルーブリックによる評価基準を生徒に示すことで、なぜ、そのような評価がされたのかを明確にします。

このように、伝統的なテストとパフォーマンス評価を比較すると、それぞれが持つ役割や目的が違うことが分かります。

タスクの達成度をパフォーマンス評価で測る

パフォーマンス評価では、具体的にどのようなタスクを設定すればよいのでしょうか。パフォーマンス評価では、スピーチやプレゼンテーションといった[発表]に目が向きがちですが、新学習指導要領で求められるような[やり取り]の力を測ることも重要です。

例えば、中学校ではお店で買い物をするという場面設定での学習があります。デパートの店員と客の会話を設定し、教員が店員役、生徒に客役をさせ、店員のセリフに生徒各自が自分の言葉で応答し、会話を作り上げるタスクに取り組みさせてはいかがでしょうか。



Dialogue Completion tasks

Salesperson **S** Customer **C**

In a department store

S: May I help you?

C: _____.

S: Okay, what size do you wear?

C: _____.

S: Hmmmm. How about this green sweater here?

C: _____.

S: How about this one?

C: _____.

S: Great!

C: _____.

S: It's on sale today for \$39.95.

C: _____.

Test-takers respond with appropriate lines,

- H. DOUGLAS BROWN (2010) *LANGUAGE ASSESSMENT*, Pearson Japan; p.150

次に挙げるのは、パフォーマンス評価でよく使われる指示例です。

Participate in a debate or discussion

Explain a picture or tell a story based on a picture

Write a letter, newspaper article, short story

Predict what will happen if

Keep a journal

Read a book and give a written or oral report on it.

Participate in a mock job interview.

Do an interview for a class project.

パフォーマンス評価では、ディベートやディスカッション、写真や絵の描写、手紙や物語を書くなど、主に話したり書いたりする力を測ることができます。また、その際には、教員や学習者同士でのやり取りを通して、聞いて話す、読んだり話したりしたことを書いてまとめるといった技能を統合したタスクに取り組みさせて評価をすることも必要です。



パフォーマンス評価にはルーブリックが必要

パフォーマンス評価を行う際には、ルーブリックによる評価基準を作成するとよいでしょう。ルーブリックには、「包括的なルーブリック」と「分析的なルーブリック」があります。

「包括的なルーブリック」とは、レストランやホテルなどの星評価のようなものです。表1のように、時間をかけずに評価を行うことができますが、評価基準が抽象的になりがちです。例

えば、Student 1はタスクを達成し理解もできているが、努力があまり見られないのでBの評価となり、Student 2はタスクは達成しながらも理解があまりできておらず、努力もあまり見られないので、B-の評価になります。しかし、なぜStudent 1はBで、Student 2がB-なのか、その評価基準が明白ではありません。

【表1】 包括的なルーブリック 達成度を包括的に見る

	Success	Understanding	Effort	Grade
Student 1	○	○	△	B
Student 2	○	△	△	B-
Student 3	△	△	△	C
Student 4	○	○	○	A
Student 5	×	×	×	D

(Brown, 2012)

一方の「分析的なルーブリック」は、言語使用をいくつかの部分に分けて、それぞれに基準を設けているため、評価がより具体的になり、明白です。表2のように、各項目について、基準がそれぞれ4段階で設けられ、その点数の合計が評価となり

ます。そのため、一人一人の言語使用について、項目に応じた達成度を評価することができます。包括的なルーブリックに比べると、評価するのに時間はかかりますが、評価基準がより明白になっています。

【表2】 分析的なルーブリック 言語使用をいくつかの部分に分けて、それぞれに基準を設ける

Task Completion	1	Minimal attempt to complete the task / or responses frequently inappropriate
	2	Partial completion of the task, responses mostly appropriate yet undeveloped
	3	Completion of the task, responses appropriately and developed
	4	Superior completion of the task, responds with elaboration
Comprehensibility	1	Responses barely comprehensible
	2	Responses mostly comprehensible, requiring interpretation by the listener
	3	Responses comprehensible, requiring minimal interpretation
	4	Responses readily comprehensible
Fluency	1	Speech halting and uneven with long pauses
	2	Speech slow and / or with frequent pauses
	3	Some hesitation but manages to continue and complete thoughts
	4	Speech continuous with little stumbling
Vocabulary	1	Inadequate and / or inaccurate use of vocabulary
	2	Somewhat inadequate and / or inaccurate use of vocabulary
	3	Adequate and accurate use of vocabulary
	4	Rich use of vocabulary with frequent attempts at elaboration

(Brown, 2012)

ルーブリックは、評価者と学習者の間で共有されるものであり、最終的な到達度だけではなく、現時点での到達度や伸びを測ることもできます。また、ルーブリックは、パフォーマンス評価をどのような目的で行い、どのような項目で、何を測るのかと

いうことを教員同士で話し合い、連携して作成する必要があるでしょう。そして、実際に使用してみて、改善すべき点があれば改善し、より良いものに作り直す必要があります。これはCAN-DOリストの作成にも同じことが言えます。

自律した学習者を育てるための自己評価

では、日々の授業では何を評価するのでしょうか。これは主に、学習者の「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」を見ることとなります。授業にどれだけ意欲的に参加し、積極的に発言したり質問したりしたのか。また、質問に対してどのような応答をしたのか。学習者自身に、授業をどのように受けたのかを「自己評価」させるとよいでしょう。意欲的に授業に参加し、活動した学習者ほど、自己評価が高くなります。もし学習者の自己評価と、評価者の評価に違いが生じた場合には、なぜそのような評価になったのか、学習者と話し合います。

自律した学習者を育てるためにも、自己評価は重要です。皆さんの学校でも、授業の終わりに「振り返り」の時間を設けているかもしれません。そこで、もっと自己評価を活用し、学習指導に生かしてみたいか、いかがでしょうか。自律した学習者は、自ら目標を定め、目標達成のための計画を立て、課題解決に取り組み、自己評価を行うとされています。つまり、学習者は自己評価によってモチベーションを高めて次の段階へ進み、学習を深めていくのです。

ライティング学習に有効なポートフォリオ評価

ポートフォリオ評価も取り入れてみましょう。ポートフォリオは、学習の過程や成果などの記録、作品を計画的にファイル等に集積していくもので、ライティング学習の評価には有効です。

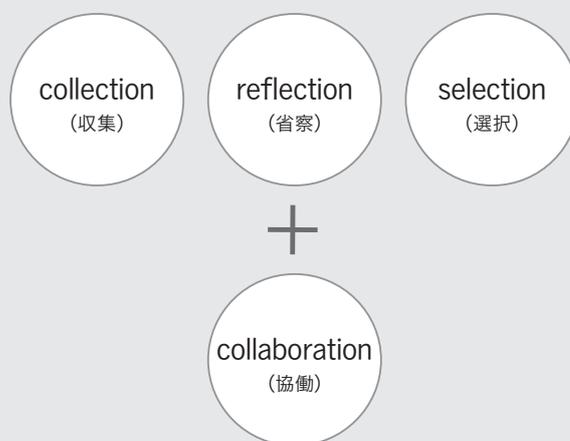
ポートフォリオ評価には、collection (収集)、reflection (省察)、selection (選択)、collaboration (協働) の4つの特徴があります (右図)。より良い原稿にまとめていくために、学習者は友達や教師のコメントに基づいて何度も書き直し、原稿やコメントのcollectionを行います。また、自分が書いたものを振り返り、評価することはreflectionにあたります。そして、ポートフォリオが完成したあとで、どの作品に自分が満足しているかを報告することは、selectionであり、友達や教員のコメントに基づいて原稿を校正することによって、collaborationが生まれます。

定期テストのように決められた時間内で書くこととは違い、学習者は書くことやテストへの不安を持たずに課題に取り組むことができます。また、原稿をポートフォリオに保管していくことで、学期の初めや最初に書いた原稿と最終的な原稿を比較して、上達を実感することができます。これは、学習者の自己効力感や動機付けを高めていくことにつながります。

ライティングの評価にあたっては、目的と身に付ける能力に応じて、文法などのエラーを指摘するか、内容を重視するかが違い

ます。日々のジャーナルのように、内容を重視する場合には、エラーを指摘するのではなく、論理的な展開になっているか、説得力がある文章構成か、事前のリサーチができていているかといったことを評価するのです。このようなポートフォリオ評価においては、CAN-DOリストと照らし合わせて、技能と身に付けたい力に対して、どの程度まで達成できているのかを測ることが大切です。

ポートフォリオ評価の4つの特徴

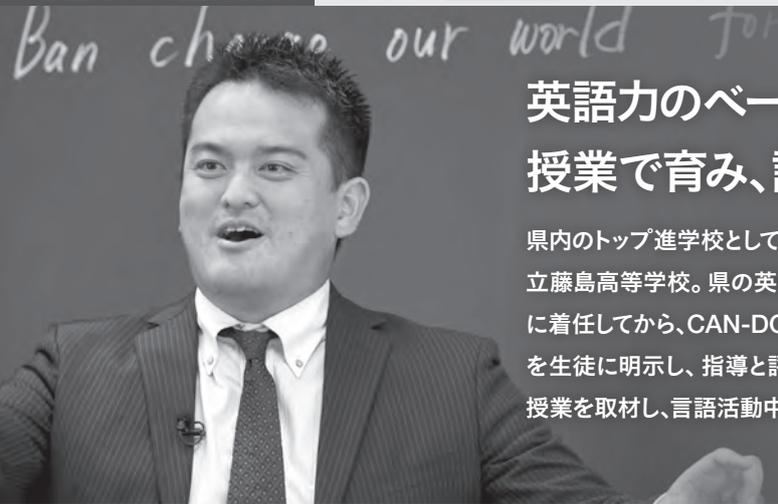


身に付けた能力を適切に測る評価を

最後に、評価を考えるうえでは何が重要でしょうか。それは、「評価の目的を明確にする」ということです。例えば、CAN-DOリストの「話すこと」において、「物語のあらすじを話すことができる力」を身に付けることが目標として設定されているなら、パフォーマンス評価を行い、実際に学習者にあらすじを話させて、その力を測ることが必要でしょう。スピーキングの能力は、パフォーマンス評価でしか測ることはできません。「話すこと」でも [やり取り]

を評価するには、実際に学習者同士や、評価者と学習者でやり取りをしなければ、その力が実際に身に付いて活用できているかを測ることはできません。

つまり、評価とは、目標で定めた能力を適切に測ることになります。「学習到達目標と指導、評価の一体化」が必要とされる際には、そのような理由があるのです。新年度に向けて、改めて評価のあり方やその方法について考えてみませんか。



英語力のベースとなる「思考力」を授業で育み、評価する

県内のトップ進学校として、スーパーサイエンスハイスクール (SSH) 指定も受けている福井県立藤島高等学校。県の英語ディベートチーフも務める英語科の三仙真也先生は、昨年度同校に着任してから、CAN-DO statementsを全面改訂し、「どの授業でどのような力が付いたか」を生徒に明示し、指導と評価の一体化を進めてきた。1年生の「コミュニケーション英語I」の授業を取材し、言語活動中心の授業を通じて、思考力・判断力・表現力を伸ばす秘訣を伺った。

【本時の目標】

ア「坂氏の世界を『より良く』する活動」について本文の内容を要約するとともに、自分の意見を持ち、本文や他の英文の内容に言及しながら伝えることができる。
イ「坂氏が考える『より良い』世界とはどのようなものか、またどのようにしてそれをつくることができるか」という問いについて、他者に説得力のある意見を伝えることができる。また、他者の意見を評価しながら、自分の意見に取り入れ、周囲に伝えることができる。

【教材名】

Lesson7 “Paper Architect”
『CROWN English Communication I』(三省堂)
全7時間中6時間目

2. Warm-Up & Summarizing

担当するセクションごとに分かれて、同じセクションの生徒同士でペアを組み、要約を伝え合う。続いて、自分が担当したセクションの要点をグループのメンバーに伝える。また、先生からの問いに対し、メンバーから聞いた内容をもとに考えをまとめた。



0min

1

2

3

三仙先生の授業の様子はこちら



1. Oral Introduction

黒板に示された問いについて各自が意見を述べるための準備をする。自宅で視聴してきた坂茂氏のスピーチ動画に関する問いについて、友達と意見交換をして自分の意見をまとめ、セクション1~4への理解を深めることが伝えられた。

「問い」を通じて、思考を深める

三仙先生の授業では、生徒が常に英語を使ってペアやグループで活動しており、教室には生徒の話す英語があふれている。だが、「活動あって学びなし」にはしたくないと考える三仙先生が大事にしているのは、沈黙の時間だ。英語力のベースは「思考力」にあるとし、生徒が個々で「思考する」時間を取ってから活動に入る。また、授業の終わりには必ず、生徒たちが考え、話した内容をまとめる時間を設ける。自分はどうに考えるのか、さまざまな活動を通じて友達の意見に触れ、さらにどのように考えたのか。思考を深め、互いの考えを伝え合って共有したうえで、ライティング活動に結び付けるのだ。

生徒たちが英語を使って、積極的に情報や考えを伝え合うための仕掛けは、学年共通で

使用する单元ごとのPre-Reading SheetとPost-Reading Sheet、さらには三仙先生が作成する深い理解を促すための推論発問を中心としたワークシートにある。そのワークシートには、家庭学習で取り組む課題と、授業中に活動を通じて答える、本文の内容に関する「問い」が記されている。生徒たちはそれらの「問い」に対して、自分の考えをまとめるため、教科書の題材を自分の目線で解釈し、思考し、友達との活動を通して自分の解釈を検討・修正しながら内容理解を深めていく。同時に、セクションごとのリテリング、True - False quizzes、Q&A活動にも取り組み、要約や意見交換をしながら、Post-Reading Sheetに示された問いに答えられるよう、思考を深めていく。場合によっては生徒自身が考え、ペアで深め合ったうえで全体の前で発表することもある。

学習到達目標と指導、評価は一体であるべき

昨年度末、三仙先生は同校のCAN-DO statementsを見直した。そして、今年度から新たなCAN-DO statementsに基づく学習到達目標や授業計画を立てた。生徒には3年間を見通して、授業におけるさまざまな活動により、单元ごとに身に付く力を明確に示し、チェックリストで自己内省を促した。

「目標が具体的にになれば、学びやすくなります。3年間の学習到達目標に向けて、今日の授業はどの段階にあり、自分はどの程度まで到達できているのかを、生徒自身がチェックリストで確認しながら学びを深めていくのです」

評価については、パフォーマンステストやエッセイライティングも取り入れ、授業で身に付けた力をさまざまな側面から評価する。定



前教科調査官が見る三仙先生の授業

敬愛大学 国際学部 国際学科 向後 秀明 教授 (前 文部科学省 初等中等教育局 教育課程課・国際教育課 教科調査官)

これまで何度か三仙先生の授業を拝見しましたが、前任教でも現任教でも生徒がリラックスしていて、教室が言語学習に適した明るい雰囲気になっています。おそらくこれは、三仙先生が授業内外における生徒との豊富なコミュニケーションを通して、確固たる人間関係を構築しているからだと思います。

全体として、①生徒の英語による言語活動が中心となっている、②教科書で学習したことを活用して話す技能統合型の構成になっている、③情報や考えのやり取りや質疑応答など、ディベートやディスカッションにつながる要素を入れているという特徴が見られます。また、次の点でも工夫が見られます。

・教科書の英文を単にコピーして話すのではなく、自分が使える範囲の表現を駆使して相手に伝えるように促している。

・活動の目的に応じて、教科書やワークシートから目を離させるようにしている。同時に、次のような点も検討していくとよいのではないかと思います。

・40人規模のクラスの中で各生徒のアウトプットの質を高めていくために、教師はどの場面でもどのように絡んでいくか(教師-生徒間のインタラクションや教師からのフィードバックのあり方)。

・相手の発話に対してどのような質問ができるようになることをめざし、そのための指導はいかにあるべきか。

・授業での活動を、初見の英文を使って行うにはどのようなサポートが必要か。

三仙先生、そして藤島高校全体の今後のさらなる「進化・深化」が大いに期待できる授業でした。

3. Pair Work~Group Work

“How does Ban change our world 'for the better'?”という問いについて、1分間で自分の考えをまとめ、ペアで伝え合う。ペアを代えて活動する際、一方の生徒はただ聞くだけではなく、相手の考えや表現を取り入れたり、比較・検討したりしながら批判的・積極的に聞くよう促す。さらにグループを組み、2名がSpeakerとListenerとして、ペア活動を経て得られた考えを発表し、その内容や様子をほかの2名が評価した。



5. Wrap-Up

全体でディスカッションした内容をまとめ、これまでの学習内容や本時の内容を振り返る。



50min

4

5



4. Discussion

坂氏の活動について、クラス全体でディスカッションを行う。発表した数名の生徒の意見に対して、さらにどのように考えるかを発表し合い、内容理解を深めていく。

期考査では、教科書本文をリライトした英文や初見の英文を出題し、教科書のメッセージから何を受け取ったのか、要約された英文の空所補充問題やエッセイライティングなどで評価する。ある考査では、リスニング問題にディベート要素を取り入れ、ALTが述べた立論を聞いて書き取り、Attackを聞いて分析したり、factとopinionのどちらがよりsupportiveであるかを考えさせたりするなど、論理的思考力を測る出題も行った。

「学習到達目標と指導、評価は一体化していただければなりません。授業を通じてどのような力を育むのか。授業ではそのための活動を取り入れ、評価では育みたい力を測るべきです」

良質なアウトプットは、潤沢なインプットから

進学校である同校では、生徒の目は大学

入試に向きがちだが、三仙先生は3年生になってからも言語活動中心の授業スタイルを変えることはない。三仙先生は、「入試に対応できる力を育てるには、教科書の英文だけでは圧倒的に英語に触れる量が不足している」と考える。良質なアウトプットのためには、潤沢なインプットが必要とし、1年生の段階から授業はもちろん、定期考査でもできる限り多くの、初見の英文に触れさせる。また、定期考査では教科書の本文(リライト済み)から受け取ったメッセージを自分の言葉で書かせるなど、授業で取り組んだ活動に即した出題をする。例えば、授業でリテリング活動をしたら、定期考査ではサマリーを書かせる。授業で意見のやり取りをしたら、個人的な経験を踏まえたエッセイを書かせるなど、授業と評価をリンクさせているのだ。

「生徒の英語力を高めるには、そのベースとなる思考力を育むことが大切です。英文を読む際には、深い思考を促し、そこで考えたことを自分の言葉で表現させます。次期学習指導要領では、言語活動としてディベートやディスカッションなどを取り入れることが示されていますが、これは生徒がディベートをして、形式を理解することが目的ではありません。ディベートを通じて、生徒がどのような議論をし、二項対立を超えて自分の意見を深め、論理的な思考力を培うことができると考えています」

生徒たちは、英語の得意・不得意に関わらず、意欲的に活動に参加している。教科書の題材を自分のこととして捉え、相手との対話を重ねながら、思考を深め、臆することなく自らの言葉で意見を表現しようとする力が育っているのが見てとれた。



CAN-DOリストを活用した授業で、生徒の学習意欲と英語力を高める

「学校にいる間はとかく『他者間比較』されがちな生徒たちを、せめて英語の授業だけでも、『自分はこのことができるようになった』と、昨日の自分と今日の自分を比べて肯定感を高められる『個人内比較』であってほしい」と、猪苗代町立東中学校の渡部真喜子先生は願っている。CAN-DOリストを活用して生徒の学ぶ意欲を引き出し、英語力が高まる生徒主体の授業づくりの秘訣を伺った。

【本時のねらい】

聞き手に効果的に伝わるようなスピーチにするために、スピーチ内容の向上に取り組むことができる。

【本時のめあて】

Make your speech better.
"Places that I want to go"

【単元名】

Lesson5「Places to Go, Things to Do」USE Speak
『NEW CROWN English Series 3』（三省堂）
全2時間中1時間目

2. 教科書の音読

教科書のスピーチ原稿からOpening～Body～Closingの構成を説明し、音読する。スピーカーとリスナーに求められることを生徒と一緒に考え、黒板に書き出す。そして、相手に分かるように伝えることの大切さを強調した。



0min

1

渡部先生の授業の様子はこちら



2

1. あいさつ～本時のめあて確認

渡部先生は生徒の様子を見取りながら、生徒が安心して英語を話すことができるように、簡単な質問を投げ、生徒との会話を広げる。続いて、本時のめあてを黒板に書き、生徒が理解できたかを確認しながら、何をすべきか伝える。

理解度を確認しながら「できた」を大切に

「Hello, everyone!」と誰より大きな声であいさつして授業を始める渡部先生。生徒の理解度を常に確認しながら、英語で進めるパワフルな授業展開に、生徒たちは笑顔でついていく。めあての「Make your speech better.」の通り、50分の授業時間内で、生徒のスピーチはみるみる「良い」ものへ仕上がりと、一人一人が自信を持って英語を話し、友達のスピーチを一生懸命聞いて、受け止めようとする、生徒同士の温かい関係性が育まれている。そこには、渡部先生が一人一人の様子を見取りながら、クラス全体に適切な指導を行い、それに応じようとする生徒たちとの親和関係が見える。

1学年1クラスの小規模校である東中学校。英語科教員は、国の英語教育推進リーダーでもある渡部先生1名だけだ。

「生徒が指示を理解できているかを確認しながら授業を進め、理解できていなければ、誤解のないように日本語を多少交えることもあります。生徒にとって分かりやすい、平易な英語で話す力が教員には求められていると思います」と渡部先生。この日も、本時のめあてを伝える場面や、スピーチをするうえで大切なポイントについて生徒と考え理解を促す場面では、ゆっくりと分かるように伝えていた。

生徒たちは意欲的に授業に参加し、英語を「話したい」「書きたい」という気持ちも育っている。「生徒には、相手に伝わる英語であれば、この教室では間違えてもいいと話しています。『できない』と感じさせるのではなく、『できた』という満足感を大切にしています」。その様子は、生徒の活動、振り返りの時間に記入するCAN-DO CHECK SHEETから見て取れる。

CAN-DOリストは感動リスト!?

同校は2012（平成24）年度から文部科学省の「英語力を強化する指導改善の取組」事業の拠点校として、「CAN-DOリストを活用した授業展開」について実践研究を進めてきた。当時はまだ国も「CAN-DOリスト作成の手引き」を示していない時期。渡部先生は「CAN-DOリストとは何か」から研究を始めた。どのような英語力を付けて卒業させるかをイメージし、学習到達目標から逆算して学年ごとに身に付ける英語力を具体的に落とし込んでいった。大切にしたのは、「生徒が使えるCAN-DOリスト」を作ることだ。抽象的な内容では、CAN-DOリストが形骸化してしまう。そこで、生徒が理解しやすいように、教科書のLessonと技能を関連付けた単元別CAN-DOリストと、各レッスンのCAN-DO CHECK SHEETも作成し、授業の終



視学官が見る渡部先生の授業

文部科学省 初等中等教育局 平木 裕 視学官 (文部科学省 初等中等教育局 教育課程課・国際教育課 教科調査官 併任)

渡部先生は、授業のなかで自信と余裕を持って英語を使っています。決して一方的に話すのではなく、生徒との「筋書き」のないやり取りを楽しんでおり、生徒の発話やその時々の様子に対して、実に表情豊かに反応するなど、生徒が話す内容に強い関心を持っておられます。決して生徒を否定せず、褒め言葉が表現・表情とも豊かに次々と発せられ、教室には素敵な親和関係が生まれています。当然、話すことに対する抵抗感が生徒にはありません。

「自分が行きたい場所とそこでしてみたいことについて、聞き手に効果的に伝わるように工夫してスピーチすることができる」を単元目標にした授業では、上述のような雰囲気なかで生徒同士の伝え合いが豊富に行われ、回を重ねるにつれて「効果的に伝わる」工夫が花咲き始めました。授業の終末では、「CAN-DO CHECK SHEET」で自らのパフォーマンスを振り返っていましたが、ほとんどの生徒が満足のいく自己評価をしたのではないのでしょうか。

3. Speech Practice

個人でスピーチの練習をする。生徒の様子から、渡部先生は大切なポイントができていないことを指摘し、再び個人で練習。相手に伝えようとする気持ちの感じられるスピーチに変わった。そのあとはペアで役割を交代して練習し、コメントを書き合った。



5. 本時のまとめ

東中学校のCAN-DOリストを提示し、本時の「話すこと【スピーチ】」の活動の卒業時までには到達すべき目標に、どこまで近付いているかを気付かせる。各自が単元別CAN-DOリストとCAN-DO CHECK SHEETに、自身ができるようになったことを記入した。



50min

3

4

5



4. 全体発表

原稿を見ずに、絵や写真を見せながら、「行きたい場所としたいこと」について、生徒数名が発表する。自分の言葉で伝えようとする生徒の思いを、ほかの生徒たちは笑顔で受け止め、スピーチした生徒をクラス全員で褒めたたえた。

わりに生徒各自が「できるようになったこと」を確認するようにした。渡部先生は毎年、CAN-DOリストを使いながら改善を重ね、現在は、CAN-DOリストの技能を「聞くこと」「話すこと【スピーチ】」「話すこと【やり取り】」「読むこと【音読】」「読むこと【内容理解】」「書くこと」に分類した。各学年の到達目標に照らし合わせ、単元別CAN-DOリストで授業での到達度合いを確認し、CAN-DO CHECK SHEETで何ができたかを振り返る。5段階での評価に加えて、“What more can you do?”の欄には、日付とできたことを自由に記述させるが、指示がなくても、I canを使って、英語で書く生徒も多い。

「生徒が書いた英語を添削することはしません。教師がチェックすることで、生徒は心情を吐露できなくなるからです。あくまで、生徒が自分の学習を振り返る位置付けです。『CAN-

DOリストは感動リスト』だと言った生徒もいるほど、生徒にとっては、3年間の学習成果を実感できるものなのです」と渡部先生は話す。

このように自由に英語を書くようになり、生徒のライティング能力も伸びた。実用英語技能検定(英検)3級をはじめ、外部検定試験でのライティングテストの得点率が高く、白紙で提出する生徒はいないという。

表現力を評価する定期テストで英語力向上

英語を書くことへの意欲の高さは、日頃の定期テストからも見受けられる。定期テストの作問にも工夫を施し、あるトピックに対して、自分の考えや気持ちを、経験を踏まえた理由を添えて書かせる問題を出題している。

渡部先生は「自由記述問題は表現の能力を評価するものとして、『多少のスペルミスやエラー

を気にせず、相手に伝えようという意欲が感じられる点、習った表現を最大限に生かして書こうとしている点などを評価しています」と生徒たちに評価基準を明示し、やる気を削がない採点・評価を心掛けています」と意図を説明した。「理解の能力」を評価する問題も、教科書本文から筆者が最も伝えたいことや、筆者について、などを生徒が推論して意見を書く出題で、生徒の思考を促し、理解力や表現力を測っている。3年間の授業を通じて、生徒の英語力は着実に伸び、英検3級合格者は、学年の半数以上、準2級や2級に合格する生徒もいるという。

「教員には卒業時の英語力を見据えて引き上げてだけでなく、生徒と目標を共有し、ともに歩んでいく共同体としての意識も必要」と考える渡部先生。着任して6年。意欲的に英語を使おうとする生徒が、毎年巣立っている。



「かかわり合い」の中で、主体的に活動する児童を育てる

熊本市立楠小学校では2017（平成29）年度の校内研究テーマを「かかわり合いの中で、主体的にいきいきと活動する児童の育成」と定め、高学年は外国語活動において研究実践を進めてきた。6年生の担任である清水佳代先生の外国語活動の授業を訪ね、児童が、コミュニケーション活動を通して自分のことを話し、相手のことを知ろうと、主体的に学ぶ意欲が育まれている様子取材した。

【本時の目標】

行きたい国についてインタビューしよう

【教材名】

Lesson 5「Let's go to Italy. (世界の国々 世界の生活)」Hi, friends! 2より全4時間中3時間目

2. Small Talk

“What () do you like?”について、色、動物、アイドル、アニメ、食べ物、国、歌…と、聞きたいことが児童から挙がる。質問に“I like ()”と答えるだけでなく、“Wow!”や“Me, too.”などの「お返し言葉」を添えて、ペアで活動した。



4. Chant

国旗が描かれた絵カードを黒板に貼り出し、まずは清水先生が指したカードの国名を、リズムに乗って発音する。続いて、先生は指したカードとは違う国名を言い、児童は惑わされないように、正しい国名を声に出した。



Omin

1

2

3

4

5

清水先生の授業の様子は
こちら



1. Greeting

全員で元気よくあいさつしたあと、隣の席の児童同士であいさつし、日付や曜日、天気を確認。この日が誕生日の友達をみんなで祝う。児童に選ばせた「今日のほめ言葉」がAmazing!に決まると、授業の流れを確認した。

話したい、相手を知りたいという気持ちを育む

この日は、前時まで触れた国の名前や“Where do you want to go?” “I want to go to ().”を使って、行きたい国やしたいことを友達と聞き合う活動に取り組んだ。会話を広げ、“I want to go to ().”の表現を使うための工夫として、“Why?”と質問することも加えた。清水先生は、ある児童が“Why?”とジェスチャーも交えて尋ねていた様子を見取り、クラス全体に共有した。すると、どの児童も感情を込めて発話し、やり取りを楽しむようになっていた。

清水先生は「相手が聞いてくれていると感じれば、話す側も伝えたいと考えます。話したい、相手を知りたいという気持ち、伝え合おうと

する意欲が高まっています」と話す。

清水先生が大切にしているのは、「英語を話せるようになること」ではなく、「英語をツールとして、やり取りできるようになること」だ。ゲームやインタビュー活動、ALTや中学校の先生との授業によって、児童が多くの英語に触れる機会を増やし、自ら「英語を話したい」「相手に伝えたい」と思う場面をつくりたいと考えている。

小学校から中学校へ学びをつなぐために

楠小学校は現在、校区内の小学校1校、中学校1校と連携し、小学校から中学校への「円滑な学びのつなぎ」のあり方を検討し、実践している。毎月1回、外国語教育担当の先



3. Today's Goal

最終目標の「おすすめ国を紹介しよう」に到達するために、以前にも使ったことのある“Where do you want to go?”の表現を使って、本時は「行きたい国についてインタビューしよう」を目標とすることが示された。

生同士で集まり、情報共有や意見交換を行うほか、中学校の先生による乗り入れ授業も始めた。清水先生は「中学校の先生が、子供たちに向けて『中学でもこのフレーズを使うよ』などと話してくださるので、子供たちも、中学校への期待がふくらみ、学ぶ意欲が高まりました」と、小・中連携の効果を述べる。

授業づくりにおいては、小学校でも、中学校での授業の流れを統一した。導入時のあいさつから3つの質問（日付・曜日・天気）、Small Talkの流れを取り入れたことで、児童が中学校でもスムーズに授業に入ることができる。また、中学校の指導にならい、提示するフレーズは動詞は赤、主語は青で書くようにした。



教科調査官が見る清水先生の授業

文部科学省 初等中等教育局 国際教育課 外国語教育推進室 直山 木綿子 教科調査官

清水先生の指導は、ぐいぐい子供を引っ張っていきつつも、子供に寄り添っているという印象を受けます。だからでしょうか、子供がとても意欲的に英語を口にしていきます。では、その秘訣を見てみましょう。まず、あいさつのあと、本時の流れを確認し、「行きたい国をインタビューする」というねらいを、子供と共有しています。子供が本時はどこに向かって進んでいけばいいのかを分かっていることが大切です。分かっているからこそ、なぜこの活動をしているのかを理解し、活動に意欲的に取り組むことができます。

また、何よりも学級経営が基盤であることが見て取れます。代表の子供が先生のデモンストレーションをし終わったら、ペアでやり取りをして、いい姿があれば、みんなで拍手をするなど、常に子供を褒め、褒めています。そして、先生が答えをすぐ提示するのではなく、常に「何が聞こえた?」「どういう?」と子供から答えを引き出すようにしています。さまざまな活動を進める際の指示を英語で行うことができれば、子供たちの英語を言ってみよう、という意欲がさらに増すことでしょう。

5. Game

グループ内で国旗の絵カードを配り、一人が“Where do you want to go?”と聞いたら、聞かれた児童は質問した児童が持つカードの中から“I want to go to Egypt.”のように、行きたい国を答えてカードをもらう。最後に先生が出したラッキーカードを持っていた児童が勝ちとなる。



6

7. Review

Today's Goalについて◎、○、△で振り返り、感想を書く。3名の児童が、「言い方が分からない時に友達が教えてくれてうれしかった」「友達の行きたい国や、したいことの聞き方が分かった」と発表し、新しい表現を知った喜びを共有した。



7

45min

8



6. Activity 1

行きたい国と、その国でしたいことについて、ペアで聞き合うインタビューゲームをする。Gameで使った表現に加え、音声教材とイラストから、新しい表現“I want to eat ()”を知り、その表現を引き出す“Why?”も使って会話をします。

外国語教育担当の森下蘭先生(写真下)は「ささいなことですが、学びをつなぐという面では大事なことです。小学校教員には、中学校での学びを見通して授業をつくり、指導する力が求められます」と話す。



外国語活動は高学年だけのものではない

同校では、低学年が道徳、中学年が特別活動、高学年が外国語活動を中心に校内研究に取り組んでいる。松永裕子校長(写真右上)は、実践を担当学年だけのものにはせず、学校全体で取り組めるようにしたいと考

える。そのため、職員研修や研究授業は全教員が参加し、意見交換をすることで、「外国語活動は高学年だけのもの」とせず、誰もが自分が実践するという意識を持てるようにしているという。



研究主題の「かかわり合い」の観点から、清水先生は「活動を通して、子供同士で主体的に話し、文字を書こうとする意欲が高まっています。また、相手が分からなければ教えてあげるなど、助け合う姿も見られます。子供同士が『かかわり合う』ことで、『相手のことを知ることができて良かった』と喜びを感じ、主体的に活動する意欲が芽生えていま



8. Greeting

「次の時間にはおすすめの国を紹介しよう」と告げられ、あいさつをして授業は終了した。

す」と述べた。また、活動の目的を児童に示すと、見通しを持って活動に取り組むようになったという。「単に『ゲームが楽しかった』で終わらず、『自分は何ができるようになった』『何が分かってうれしかった』という振り返りができています。それが、さらなるコミュニケーションへの意欲を生んでいます」と喜ぶ。

外国語科への移行にあたり、同校では文字の扱いや評価については、まだ検討段階だという。「教員各自が校外の研修で学んだことを持ち寄って共有したり、中学校の先生と一緒に検討したりしながら、楠小学校としての方向性を見出していきたい」と森下先生は述べた。

明日から
使える!

【第14回】

(連載)

安河内哲也先生が聞く

英語で授業



7つの鉄則

佐賀県 吉野ヶ里町立三田川中学校
吉田 喜美子 先生

安河内 哲也 (やすこうち・てつや)

一般財団法人実用英語推進機構代表理事、東進ハイスクール、東進ビジネススクール英語講師。文部科学省「英語教育の在り方に関する有識者会議」委員を務める。英語学習の楽しさを世に広めるべく、テレビ番組などでも大活躍中。英検1級など英語関連の多数の資格を持つことでも知られる。

吉田 喜美子 (よしだ・きみこ)

1985年より佐賀県の公立中学校で教鞭を執る。鳥栖市立田代中学校を振り出しに、鳥栖中学校などの勤務、佐賀県教育センター所員を経て、2011年度に吉野ヶ里町立三田川中学校へ着任。2008年には「佐賀県スーパーティーチャー」の認証を受け、県内の先生たちとともに「佐賀メソッド」を実践し、全英連大分大会をはじめ各地で実践研究報告を行っている。佐賀県中学校教育研究会英語部会アドバイザーも務める。中学校学習指導要領(外国語)作成協力者。



4技能を統合した言語活動により、 生徒の思考が活性化する授業

佐賀県東部地区に位置し、吉野ヶ里遺跡にもほど近い吉野ヶ里町立三田川中学校。佐賀県内の中学校で共通実践する「佐賀メソッド」を用いながら、隣接する三田川小学校と連携し、小・中6年間の単元計画表に基づいて、気軽に英語を使うことができる、英語が好きな生徒を育てています。吉田喜美子先生が池田恵巨先生、Trevor Alvero先生とチーム・ティーチングで行う中学1年生の授業を訪ね、授業づくりにおける7つの鉄則を伺いました。

「佐賀メソッド」とは

「自ら発信する力・人と関わり合う力」を培うために、学期ごとのプロジェクトゴールや、ゴールを達成するための単元ゴールを設定し、活動への意欲を高める手立てを取り入れながら、Small Output活動やOutput活動といった4技能を統合した言語活動に繰り返し取り組ませる指導方法。2011年度から全県下で全ての教員が取り組み、実践研究を行っている。

中学1年生の生徒たちが、英語を使って楽しみながら
自分の言葉で表現する様子を、ぜひご覧ください。



本日の授業

1年生

使用教科書：SUNSHINE ENGLISH COURSE 1 (開隆堂) / 単元名：Program 7 The Wonderful Ocean

吉田先生の
授業の様子は
こちら

導入

毎回の帯活動で英語を話す空気をつくる

授業では毎回、帯活動として、「辞書書写活動」「挨拶」「対話活動」「1 minute talk」「Song」「Chants」が導入時に組み込まれている。「辞書書写活動」は、各自が辞書の例文を正しく書き写しながら、より多くの例文に慣れていく始業前の活動だ。授業が始まると、元気なあいさつとともに、日付や天気などについて、Trevor先生からの問い掛けに生徒たちが答え、英語で話す空気がつくられる。その後、Q&Aシートを用いて、生徒たちはペアで互いに質問をしては答える対話活動に取り組んだ。続く1 minute talkでは、吉田先生とTrevor先生のデモンストレーションのあと、ペアで「Do you know (人物)?」「Yes, I know him / her. He / She is ...」という会話を1分間続ける。さらに、アメリカの10代に人気のドラマ『iCarly』の主題歌を全員で歌い、これまでに学んだhim / herをchantsで定着させる。



展開1

表現モデルを聞き、ペアで表現する練習をする

本時の学習目標「挿絵や写真を使って、本文の内容を説明しよう」を確認し、前時で学んだ本文の復習をする。まず、吉田先生とTrevor先生、池田先生の3名で音読したあと、生徒たちも続く。そして、挿絵や写真に記されたキーワードを手掛かりに、本文の内容を確認した。さらに、Trevor先生と池田先生が、自分の言葉で表現モデルを示して見せると、静かに耳を傾けていた生徒たちに向けて、吉田先生が「Can you do it by yourself?」と問い掛けた。30秒ほど各自で考えながら練習させ、生徒たちができそうな様子が見えたところで、ペアで考えた「連続性のある2文の表現」を言い合った。生徒たちは机間巡視する先生たちの前で発表するが、スクリーンに示された評価基準に基づき、独自性のある表現ができたかどうかで1~3点までの評価を受ける。その際、先生方は生徒それぞれの学習と発話の状態に応じて、発話できたことを褒めたり、recastしたりして個別に対応した。



展開2

一斉→個人→ペアの流れで Picture Describing 活動

本時の学習に移る。生徒たちは教科書を目で追いながら、Trevor先生が音読する内容を注意深く聞き取る。黒板に貼り出された写真を見ながら、Trevor先生からの質問に生徒たちが答えていく。そのあと、黒板に貼り出された写真を印刷した紙に、吉田先生が、生徒たちの答えたキーワードを書き込んでいく様子がスクリーンに映し出される。こうしてmappingができると、Trevor先生と池田先生による表現モデルが示され、自分の言葉で本文内容を説明する活動に入った。生徒たちは自分で考え、表現したのち、ペアでどのような表現をするかを話し合う。そして、再び先生たちの前で表現して見せ、評価を受けた。



まとめ

話したことを書く。書きたい意欲を引き出す工夫

この日に自分が発話した内容を、ワークシートに書き記す。生徒たちが「もっと書きたい」という気持ちになったところで、吉田先生から今日の宿題として、復習した内容と今日学んだ内容について、それぞれ5文ずつ書いてくるように告げられた。そして、先生たちから今日の授業について、「みんな、よく本文から情報をキャッチできた」「たくさん文を作ることができた」「みんなのスピーキングが良くなっている」などと評価があり、授業は終了した。



鉄則その1

表現活動の前にはモデルを示す

表現活動は、生徒たちにとってハードルの高い活動の1つです。少しでもそのハードルを下げて自分たちの言葉で表現できるようにするため、モデルをたくさん示すようにしています。教科書の内容をできるだけ易しく、かみ砕いて、1年生のレベルに合わせてゆっくりと発音をして生徒たちに示し

ています。本校では、日本人の教員2名、ALTの先生1名の3名体制で授業を行い、3名の教員それぞれが生徒の前でモデル表現を示します。ノンネイティブとネイティブ両方の英語を聞くことで、生徒たちはいろいろな英語があることを知り、自分たちの英語にも自信を持つことができます。



鉄則その2

なるべく教師の説明を減らす

生徒たちが話したことを聞き取って教員がrecastすれば、生徒たちは、小学校からの指導の流れで、自然と言い直します。そうすることで、説明を減らして、生徒たちはたくさんの英語を聞いたり言ったりすることができます。また、oralからwritingの一連の流れを大事にしている、一度話したことはすぐ

書かせるようにしています。言わせたり書かせたりしないと、生徒たちは実際にその英語を使えるようにならないからです。そして、授業の流れと目標を黒板の左端に書いておくことで、生徒たちは常に授業の流れを把握することができます。評価基準やクリアしてほしいこともできるだけ書いて示し、目標を

明確にすることが大切だと思います。



鉄則その3

その場でフィードバックを行う

生徒たちが何か発話すると、3名の教員が随時コメントをしたりrecastしたりするようにしています。生徒一人一人の性格も把握したうえで、適切なフィードバックを行うので、生徒たちのモチベーションを高めることができます。フィードバックに関しては、教科書の文章の再現（リプロダクション）で1

点、ペアワークで片方の生徒が文章を再現し、もう片方がオリジナルの文章で2点、2名ともオリジナルの文章が言えて3点という風に点数方式にしています。点数に応じて各自がシールを教科書や辞書に貼っていくシステムを取り、生徒たちの意欲を高めています。中には、長い文を話して4点もらう生徒

もいて、良い刺激を受けています。



鉄則その4

気軽に表現活動を行う

授業冒頭では1 minute talkのように、好きな食べ物や歌手、タレントなど、さまざまなトピックに対して、生徒が1分間話す時間を設けています。トピックを与えて、モデルのひな型に当てはめていくので、生徒たちも楽しくリラックスして話しています。Trevor先生は学校内外で生徒と会った時は、友達

のように世間話をしたり、日本語と英語半々で話したりするなど、生徒たちがリラックスして話せるように心掛けています。生徒自身も自分の言葉で表現することに喜びを感じることができ、それが英語を習得していく過程で非常に重要だと思います。最終的には、3年生では自分の家族や夢について、自分

の言葉で語るができるようになって卒業していくことが目標です。



鉄則その5

受け取り手を意識した課題設定をする

各授業のプログラムやユニットの最後には、プログラムのゴールを設定し、プレゼンテーションをさせるようにしています。今日は海洋生物のオルカについて勉強しましたが、最後にプレゼンテーションをして、絶滅の危機に瀕している海の生物について発信しようという課題を設定しています。プレ

ゼンテーションのあとは、Q&Aタイムを設けて、その内容について生徒同士でやり取りができるような時間をつくっています。準備段階では、発表する生徒になるべく全員が分かる単語や文章を使うように指導して、Q&Aタイムが円滑に進むようにしています。ペアやグループでのプレゼンテーション

をすることで、生徒たちはより自信を持って話すことができます。



鉄則その6

授業と家庭学習をつなぐ

本校では、家庭学習について2つの宿題を出しています。1つは、学校で統一しているルーティンの宿題で、週に1回の音読や、単語の書き取り、文章の書き取りなどの宿題です。もう1つは、授業で行った内容の復習や予習ができるような宿題を出しています。自宅に帰って教科書やプリントを開いて、授

業のことを思い出しながら学んだ内容と結び付けることができるようにしています。今日の授業で生徒たちが話したオルカの話は、学校では少しだけ書かせてやり方を示し、あとは自宅で全部書いてくるように指導して、家庭学習につなげています。書いてきたものは、次の授業で生徒同士で読み合わせを

し、教師が朱書きを入れて生徒に清書させて正確さを身に付けながら、授業と連動できるように心掛けています。



鉄則その7

個人とペアを意識する

本校では、縦、横、斜めで組み換えをしたペアワークを取り入れています。個人→ペア→グループ→個人という流れで、まず自分で考える時間を持ちます。次にペアになってお互いに感じたことを話して打ち合わせをし、練習をして先生に見てもらい、最後は自分が言ったことを書くというスタイルを取っ

ています。いろいろな人の意見を聞いて客観的に考えて、最後に自分の意見を構築していくという手順を踏んでいます。個人ではなかなか考えられなかったことも、ペアで話すことにより、互いに教え合い、発表することができます。先生から教わるだけでなく、友達から教わったことも生徒たちにとっ

てはとても大事な経験になります。



学校内や地区内の教員がチームで取り組む英語教育

発信力が育ち、英検合格者も増えた

安河内 授業を拝見し、大変勉強になりました。生徒たちが楽しんで英語を使って活動している姿が印象的でした。

吉田 ありがとうございます。いつも生徒たちは互いに教え合い、学んでいます。

池田 一人では考えられない生徒でも、ペアで活動して友達と教え合い、発表することで、「自分で言えた」という自信を持てるようになっていきます。

安河内 1クラス27名ですと、生徒一人一人に目が行き届きますね。

池田 教員3名で指導しているので、なおさらです。授業中にそれぞれが教室を回り、生徒の発話にはその場でフィードバックすることができます。それにより生徒たちの意欲を高めています。

安河内 恵まれた環境だと思います。

吉田 海外で研修を受けると、教員1名に生徒数は10～15名程度ですよね。

安河内 そうですね。現在、日本では、生徒の言語活動中心の授業を進めていますから、生徒同士でペアワークやグループワークをするには、1クラス30名以下だと教えやすいですね。Trevor先生、もし、一人きりで30名以上の生徒を指導するとしたら、どうですか。

Trevor 生徒たちから文法事項について質問されても、私にとっては、英語の文法を日本語で説明するのは難しいことです。その場合は日本人の先生に説明をお願いするでしょうね。

池田 日本人教員、ネイティブ教員、それぞれの持ち味があります。本校では、定期考査で生徒の表現力を測る英作文問題を出題しますが、その採点はTrevor先生が担当しています。

Trevor 生徒たちはよく書いてきます。160語も書いてくる生徒がいますよ。

安河内 160語も!?

池田 書きたいことがたくさんあって、欄外まで使って書く生徒もいますよ。

安河内 日々の授業で発信力が身に付

いているのですね。実用英語技能検定(英検)で導入されたライティング問題も、生徒たちは難なく解答しそうですね。

池田 はい。生徒たちの合格率の高さにこちらが驚きました。

吉田 本校は全員受験とし、3年生で3級、2年生で4級、1年生で5級という目標設定をしています。

安河内 英検は合否だけでなく、スコア表示されるようになり、生徒にとっても学習の成果が見えやすくなりましたね。

吉田 最近では、準2級を受験する生徒が増え、今年度の3年生は学年全75名中20名ほどが受験しました。それだけの生徒が準2級にチャレンジする意欲を持ってたことが素晴らしいと思っています。

安河内 英検は何度でも挑戦できますし、成績表にはバンドで表示されるので、準2級合格まで、どのぐらい距離があるかを知ることができますね。

吉田 本校の生徒たちは、英検を日頃の学習成果を測る指標と捉えています。

安河内 大学入試が外部検定試験を活用する方向へ移行していますが、今後は高校入試でも活用が進むでしょう。高校入試のあり方も大きく変わりますね。福岡県や佐賀県の入試問題はリーディング中心で、一部リスニングがあり、ライティングはあまり出題されていません。それが4技能試験になったら、三田川中学校の生徒にとっては有利でしょう。学校としても合格実績が上がりますね。

吉田 上がるといういですね。本校では

授業中に、生徒たちが話す・書く活動に繰り返し取り組んでいますので、他校に比べるとコミュニケーション能力が伸びているのではないかと思います。

小中連携、教員間連携がカギ

安河内 ところで、地域の小・中学校との連携はいかがですか。

吉田 佐賀県内の全中学校で英語科教員全員が地区内の先生方と情報交換を頻繁に行い、勉強会を開いて、「佐賀メソッド」による授業実践に取り組んでいます。隣接する三田川小学校とは文部科学省の研究開発学校として共同研究を進めてきたこともあり、円滑な連携ができています。

池田 小学校で実践していた歌やチャンツを中学校でも取り入れたり、小学校で使ったことのある表現を使って言語活動をさせたりすることで、小学校から中学校への緩やかな移行ができています。

吉田 中学入学当初の授業で、「Do you ...? や Can you ...? を使って先生に質問しよう!」と投げ掛けると、生徒たちは、「Do you like ...?」や「Can you play tennis?」など、自分が知る限りの言葉を使って質問します。入学当初からそのような活動ができるのは、小学校での活動内容とその様子をシェアしたうえで、中学校の授業を組み立てる、などの連携ができてからでしょうね。

Trevor Alvero 先生

池田 恵巨 先生



安河内 この地区ではそれが当たり前かもしれませんが、全国的に見たら、小中連携が取れている地域は少ないでしょう。同じ中学校内でも先生同士の連携が取れていない学校もあります。形式的に連携があったとしても、教授法について話し合う機会などなく、校内でも定期試験や教材の共有もしていない。ほかの先生がどのような授業をしているのかを参観したことがない。だから、先生によって授業のやり方が全然違い、講義型で文法訳読をしている先生もいれば、言語活動中心の先生もいます。

吉田 「佐賀メソッド」を開発するきっかけになったのは、前任校の鳥栖市立鳥栖中学校での取り組みでした。当時はよく職員室で、英語科の教員同士が話していたので、ほかの先生に「英語科はうるさい」と言われたものです。「次のユニットではどのような活動で進める?」「私は Picture Describing をするよ」などと、お互いの授業について情報交換し、指導法を共有することが日常的でした。

池田 この地区には中学校が5校ほどありますが、地区内では夏休みなどに指導法改善の学習会をしています。新採の先生には「佐賀メソッド」を理解してもらうために、ほかの教員が生徒役になって授業をしてもらい、実践的に学ぶという学習会を開いています。

安河内 そうした教員間や学校間の連携が当たり前であってほしいと思います。意外とそうではないのです。スター教師といわれる先生の授業は素晴らしくても、ほかの教室ではまったく違う授業が展開されているということはよく聞

く話です。

吉田 それは驚きました。教員同士が連携せずに、授業を考えることはできません。安河内先生は、全国の英語教育の実態を見ていらっしゃるのですね。

安河内 はい。全国各地で先進的な授業を参観したり、授業改善のための教員研修をさせていただいたりしています。本業の予備校講師としても、最近では受験対策の授業から、言語活動中心の授業にがりやと変えました。予備校でそのような授業が受け入れられるかと不安でしたが、いざ実践してみると、生徒たちは英語を話したがっているのが分かり、実際に英語力が伸びて、合格実績も上がったのです。最近では予備校も少しずつですが、アクティブ・ラーニング方式の授業へと変わりつつありますよ。

英語を使う体験が 英語力を伸ばす

池田 ご自身でも、言語活動中心の授業を実践していらっしゃるのですね。

安河内 私が現在行っている授業の原点は、自分が通った予備校での授業にあるかもしれません。私は大学受験で思うような結果が出ずに浪人しましたが、通った北九州の予備校に、当時では珍しい教え方をする英語の先生がいました。授業は先生が話した英語をリピートするという、基本的に音声中心の指導なのです。ほかの生徒は皆、それが受験勉強の何に役立つのかと疑問に思っていたようですが、私にはそれが面白くて。帰宅してからも、その日の授業を思い出して

は、繰り返し発話していたほどです。それを毎日繰り返すことで、英語の耳と口が鍛えられ、英語力が一気に上がったように思います。

Trevor なるほど。その授業を受けるまでに、海外滞在経験はありましたか?

安河内 留学するには学費も滞在費もかかりますし、海外に行ったことも住んだこともありませんでした。大学入学後は、長期休暇中にアメリカやカナダに出かけたものです。現在では仕事で世界各国へ行く機会が増えました。2週間前にはフィリピンのセブ島へ行きましたし、夏前にはロサンゼルスやメキシコへも行きました。

吉田 それは仕事ですか?

安河内 仕事が多いですが、友達に会うこともあります。ロサンゼルスには私が手掛けているテスト開発のメンバーがいます。セブ島には国際協力ボランティア団体 (DAREDEMO HERO) の代表を務める友人がいます。彼の活動は貧困家庭に育った学生を選抜して奨学金を支給し、より良い教育を受けさせることによって、将来、国を背負って立つような人材を育てることを目的としています。私も里親としてそのうちの一人を援助していますが、彼女は日々勉強をがんばり、将来は医師になることをめざしています。

吉田 日本の子供たちにも知らせたい素晴らしい活動ですね。世界には自分とは違う境遇の子供たちがいることを知り、自分の親がそのような子供の里親になったとしたら、違う国に自分の兄弟姉妹がいるような関係を築くことができる。自分の親がそのような支援活動をするのは、子供にとっても良い教育になると思います。

安河内 フィリピンでは英語を話しますから、英語をツールに世界とつながり、英語は世界の言葉だと体感できます。さて、最後に一言ずつ、読者の皆さんや僕たちにメッセージをお願いします。

吉田 みんなで英語の授業を楽しみましょう! Be Creative!

池田 何より楽しむことが大事です。Let's enjoy English!

Trevor Be confident. Don't be shy! Don't be afraid of mistakes!

(文中敬称略)

吉田 喜美子 先生

安河内 哲也 先生



技能統合型授業における ライティングの指導と評価

(連載) 最終回

ライティングの評価とテスト

明治学院大学 文学部 准教授 杉田 由仁

最終回では、高等学校での思考力・判断力・表現力を育む技能統合型授業の
ライティングの評価とテストについて具体的に考えてみたいと思います。

ライティングによる

発信力・自己表現力の評価

ライティングによる発信力・自己表現力の測定・評価を行うためには、エッセイ・ライティングなどのように実際に書くことを伴う直接テスト方式によることを前提とする必要があります。しかし、生徒が書いたまとまりのある英文を、どのような規準・基準によって評価・採点を行うかについて、悩んだ経験のある先生は非常に多いと思います。そこで本稿では、高等学校の定期テストにおいて、実際に「書く」形式のテスト Writing performance test (以下 WPT) を出題し、測定・評価を行うまでのポイントを、具体例を通して解説することにします。

WPT 作成の基本的手順

定期テストに出題する具体的な WPT を作成する方法としては、Bachman & Palmer (1996) が提案したテスト開発プロセスの「操作化 (operationalization)」

が参考になります。操作化における作業の中心は「細目表」の作成です。テスト課題の細目表には通常、テスト課題の目的、測定すべき構成概念の定義、課題に対する答え方や受験上の注意、採点法などが含まれます。WPT による測定・評価のポイントとは、まさに「この細目表の作成にこそある」ということができます。

それでは実際に、高校 2 年生を対象とした定期試験問題の細目表の例を見てみましょう。特に重要な項目については【解説】をつけています。

「アイルランド」について学習した

単元を出題範囲とする定期試験問題

1. テスト課題の目的

高校 2 年生の定期試験問題であり、テスト結果は学期末の成績、能力別クラスへの振り分け、学年末の進級可否判定に用いる。また、教師の指導方法の改善や授業計画の検討を行うためにも活用する。

2. 構成概念の定義

- (1) アイルランドに関する情報のメモ書きを見て、的確な内容の英文を書くことができる。
- (2) 正しいスペル、句読法で英文を書くことができる。
- (3) アイルランドについて 150 語程度の文章を書くことができる。

【解説】テストによって測定しようとする能力を「構成概念 (construct)」とよび、対象となるライティング能力の構成要素を定義します。技能統合型授業の定期試験 (= 到達度テスト) の場合には、試験範囲となる単元の到達目標に含まれる、思考力・判断力・表現力の観点や語彙、ライティングに関する知識を、測定可能なものになるように具体的に記述します。採点法 (scoring method) はこの記述内容を段階化したものとなります。

3. 課題に対する答え方・受験上の注意

- (1) 受験上の注意

Yoshihito SUGITA



杉田 由仁 (すぎた・よしひと)

山梨県公立中学校教諭、山梨県立看護大学専任講師、山梨県立大学看護学部准教授を経て現在明治学院大学文学部英文学科准教授。博士（教育学）。主な著書に『日本人英語学習者のためのタスクによるライティング評価法』（大学教育出版）、『パラグラフ・ライティング基礎演習』『ジャンル別パラグラフ・ライティング』（成美堂）、『ライティングで学ぶ英語プレゼンテーションの基礎』『英語で英語を教える授業ハンドブック』（南雲堂）などがある。

①これからあなたの英文を書く能力に関してテストを行います。

②下記の「指示」をよく読みなさい。

③解答記入欄の1行に1文ずつ書きなさい。

④他の問題も含め、50分間で完成しなさい。

(2) 指示

①状況と役割：あなたは、アイルランドについて英語で書くことを求められています。

②目的：「アイルランド」というテーマで150語程度の英文を書きなさい。

③読み手：採点を行う教員

④文章構成：アイルランドに関する情報のメモ書きを見て、150～200語で英文を書きなさい。“I am going to write about Ireland.”を書き出しの文としなさい。ただし、この文は150～200語には含まれません。次のメモ書きの内容に基づき、的確な情報を伝える正確な英文を書きなさい。

⑤言語：ややあらたまった表現で、正しい英文を書くことを意識しなさい。

⑥採点：あなたが書いた英文は「内容的確さ（情報量・語数）」と「英文の正確さ（語彙・文法・句読法）」の観点から10点満点で採点されます。

【解説】 答え方・受験上の諸注意として「テストの目的」「測定される言語能力」「テストの構成と配点」「受験者への指示（課題文・指示文）」「採点法」について伝えます。これらのうち、「指示（prompt）」とは受験者が実際にライティングにより回答を行う課題内容です。この指示を明確に与えることにより、テスト作成者が意図する応答を受験者から引き出すことが可能となります。

アイルランドに関するメモ

キーワード	キーワードの説明
アイルランド	別名 エメラルド島 / 島国
人口	約4,500,000人
面積	70,300 km ² / 日本の北海道とほぼ同じ大きさ
文化	豊かな文化 / 音楽は世界的に有名 / ノーベル文学賞受賞者を輩出
言語	もともとの言語はアイルランド語 / すべての小学校で教えられている / 国民の大多数が英語を話す

(VISTA English Communication II, pp.15-16を参考に作表)

4. 採点法

ライティング評価のためのルーブリック例

評価規準 (観点)	評価基準 (到達の度合い)		
	A	B	C
内容的確さ	4つ以上のキーワードに関する的確な情報が150～200語で書かれている (6点)	3つのキーワードに関する的確な情報が100～149語で書かれている (4点)	2つ以下のキーワードに関する情報が100語未満で書かれている (2点)
英文の正確さ	文法や単語のスペル、句読法にほとんど誤りがない (4点)	法や単語のスペル、句読法に誤りがある (3点)	文法や単語のスペル、句読法に誤りが多い (2点)

【解説】 採点の信頼性を高めるために、評価のルーブリックを作成することをお勧めします。この例では「構成概念」として定義した「内容的確さ」と「英文の正確さ」が評価の観点になっています。それぞれの観点の重要度にしたがって、前者を6点、後者を4点に重み付けしています。内容に関しては、測定可能な「情報量」と「語数」により3段階評価を行う例となっています。

まとめ —WPT 作成のポイント—

1. 構成概念は、評価の観点となるライティング能力の構成要素を測定可能なものとして定義する。
2. 指示は、評価の観点となる構成要素を受験者から適切に引き出すことができるように、課題内容を明確に記述する。
3. ルーブリックは事前に作成し、カテ

ゴリーごとの記述を行いながら、構成概念が測定可能なものとして定義できているかどうかを再確認する。

この例のように細目表の作成を通して、構成概念と指示、そして採点法の整合性を図ることがWPT作成の最重要ポイントといえます。今後のご参考になれば幸いです。

新教育課程 に向けて

中学校編

表現力や発信力を 高める授業づくり

(連載) 最終回

次期学習指導要領で、 中学校の英語教育に求められること

信州大学 学術研究院 教育学系 教授 酒井 英樹

本連載では、中学校の英語教育に求められることとして、
即興的な言語使用の指導、言語活動の工夫を取り上げてきました。
最終回は、“英語で授業を行うこと”を基本とすることに焦点を当てます。

1. 英語で授業を行うことの重要性

中学校学習指導要領において、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」ことが明記されました。ここでは英語で授業を行うことの意味を、英語に触れる機会と英語を用いたコミュニケーションの機会を増やすためとしています。生徒自身が英語を使う言語活動の工夫について前回まで紹介してきましたが、今回は教師が用いる英語に焦点を当てます。

英語で授業を行うことの意味として、第二言語習得のためであることを付け加えたいと思います。多種多様なインプットをたくさん聞かせることは、第二言語習得を促進する要因となります。第二言語習得を促すために、次の点に

気を付けて英語で生徒に語り掛けることが重要です。

- 語句や文構造の例文を示すために英語を使用するのではなく、メッセージに焦点が当てられている。
- ある語句や文構造を多用して不自然に話すのではなく、多種多様な語句や文構造を自然に用いる。
- 語句や文構造の指し示す意味・内容(メッセージ)を、生徒が理解することのできる手掛かりを与えるようにする。

次節では、理解のための手掛かりの与え方について紹介します。

2. 手掛かりを与えるタイミング

第二言語習得を促すインプットは、次の3種類に分けられます。

① 簡略されたインプット simplified input

難しい語句や文構造の使用を避け、すでに習得している言語材料を用いて語ることです。例えば“I have been to Hokkaido twice.”と言う時、twice という語の意味や現在完了形の意味が分からないと予測したとします。その際、生徒が理解できる過去形を用いたり、two という語を用いたりして、“I went to Hokkaido two times.”と言います。これが簡略化されたインプットです。

習得の初期には有効なインプットですが、いつまでも簡略されたインプットしか与えられないと、新たな語句や文構造(北海道の例でいうと、twice という語や現在完了形)を習得する機会

Hideki SAKAI

酒井 英樹 (さかい・ひでき)

信州大学学術研究院教育学系教授。専門は英語教育、第二言語習得。主な著書に『小学校外国語活動 基本の「き」』(大修館書店)、『はじめての英語教育研究』(共著、研究社)、『新しい英語教育の展開』(共著、玉川大学出版部)、『小中連携を意識した中学校英語の改善』(共著、三省堂)、中学校検定教科書『NEW CROWN ENGLISH SERIES 1・2・3』(共著、三省堂)がある。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会外国語ワーキンググループ及び言語能力の向上に関する特別チームの委員を務めた。



を失わせてしまうことになります。

② 予め修正されたインプット premodified input

学習者にとって難しい語句や文構造があると予測される時、非言語情報を用いたり、言い換えたりして説明を加えることです。例えば次の文のように、元の表現に加えて表現を言い換えたり、具体例を示したり、地図やイラストを示したりして、北海道に2度行ったことを理解させる方法です。

“I have been to Hokkaido twice. For the first time, I went to Sapporo in 2006. Second, I visited Hakodate last year.”

この方法は、まだ習得していない語句や文構造に触れさせながら、その意味や内容を理解させることができます。しかし、多くの生徒がいて、英語力もさまざまな場合には、インプットの調整が難しくなります。ある生徒にとっては理解しやすくなりますが、別の生徒にとっては冗長的なインプットになってしまいます。また、ある生徒にとっては、調整した部分とは異なる箇所の理解につまずいている場合もあります。

③ 学習者の理解に応じた修正 interactively modified input

学習者が不理解や誤解を示したと

きに説明を加える方法です。例えば“I have been to Hokkaido twice.”と言った時、生徒が“Twice?”とつぶやいたとします。教師は生徒がtwiceの意味を理解していないと判断したら、“Yes. Twice. Two times. I went to Hokkaido in 2006 and last year.”というようにtwiceの説明をします。生徒の質問、つぶやき、表情などをよく観察することがポイントになります。

3. 手掛かりの方法

理解可能なインプットの与え方として、MERRIER Approach (メリアー・アプローチ)を紹介します(渡邊・高梨・齋藤・酒井, 2013; 酒井, 2014)。MERRIERは次の7つの指針の頭文字です。

Model/Mime

ジェスチャー、実物、イラストや写真などの非言語情報を用います。

Example

抽象の階段を上り下りします。

Redundancy

同じことを別の視点で言い換えます。

Repetition

大切な情報を繰り返します。

Interaction

一方通行にならないように、生徒に質

問を投げ掛けながらインプットすることで、生徒の注意を引いたり、理解を促したりします。

Expansion

生徒の発話や行動に基づいて、英語で「拡大して(つまり、言い換えて)」インプットします。いわゆる「リキャスト」というフィードバックのことです。生徒が日本語で発話した場合には、簡単な英語の語句で言い換えます。生徒が単語で発話した場合には、句にします。句で発話した場合には、文にします。文で発話した場合には、より適切な表現にして言い換えると良いでしょう。生徒の英語力に応じたExpansionをすることが重要です。

Reward

生徒の応答に対して褒めることです。生徒の理解が適切であれば褒め、生徒が誤解している時には、誤解していることを示してあげることが重要です。

4. おわりに

教師が英語を話し、生徒とやり取りをすることによって、聞くことや話すこと[やり取り]の言語活動を増やすことにつながります。その際、第二言語習得を促すような英語使用になるように心掛けたいものです。

新教育課程 に向けて

小学校編

外国語教科化における 文字指導のあり方

(連載) 最終回

新学習指導要領の実施に向けて 今からすべきこと

愛知県立大学 外国語学部 准教授 池田 周

新学習指導要領に対応した文部科学省作成の高学年用新教材『We Can!』が公表されてから、「外国語科」における文字や、「読むこと」「書くこと」の領域の扱い方について、イメージが次第に具体的になってきました。ここまで2020年度の新学習指導要領全面実施後の文字指導のあり方について考えてきましたが、最終回は、移行期間を含めてどのような準備が必要かについて考えます。

移行期間の文字指導

「活字体の大文字、小文字」が小学校外国語科の学習内容となることを踏まえ、中学校との接続の観点から、文字に関して、移行期間に扱っておきたい活動があります。それは外国語活動の「大文字と小文字の形の識別と読み方への慣れ親しみ」を超え、「文字を

見て読み方を発音する」「活字体で4線の上に正確に書く」を含めた活動です。しかし、中学年で大文字と小文字の形と読み方に慣れ親しんでいない高学年児童に対して、これらを一度に定着させようとするのは無理があります。

移行期間1年目(2018年度)はまず、5年生は『Hi, friends! 1』で大文

字、6年生は『Hi, friends! 2』で小文字に出合ったら、文字の形の識別や読み方に慣れ親しむ活動を継続して十分に行うようにします。さらに、「外国語科」の新教材も部分的に導入するため、「文字を見て読み方を発音する」「大文字と小文字を活字体で正確に書く」「基本的な語句や表現を書き写す」と



We Can! ② Unit 5 (6年生)

【Let's Read and Watch】
これまでに聞いたり言ったりして音声で十分に慣れ親しんだ表現が書かれたものを読んで、その内容を捉える。

読むことに関する言語活動
動名詞を含む基本的な表現を活用

(Sounds and Letters) r : rice, river
ページ下部に、活字体の小文字とその文字で始まったり、含んだりする語のイラストを掲載している(a~z)。それぞれ文字の音と、その音から始まる英語に慣れ親しむ。

日本語と英語の音声の違い

【Activity】
本単元で学習した表現や既習の表現などを使って、友達と自分の思いや考えを伝え合ってコミュニケーションする。

聞くこと、話すこと
の言語活動



【Let's Read and Write】
ワークシートに、語順を意識しながら、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写したり、友達が書いた文を読んだりする。

読むこと、書くこと
の言語活動

We Can! ② Unit 5 (6年生)

<児童の発話例>
A : I went to the department store. I enjoyed shopping. I ate ice cream. It was delicious.
B : I went to the mountains. I enjoyed hiking. I ate a rice ball. It was fun.

【STORY TIME】
英語の自然な音声を繰り返し聞き、その意味を絵を手掛かりに推測したり、文字と結び付けたり、単語や文、語順などの認識を深めたりする。また、同じ韻を踏む単語を続けて聞くことで、文字と発音の関係に気付く。

文字や単語などの認識
読むことに慣れ親しむ

「小学校の新学習指導要領に対応した新教材説明会」(平成29年9月21日)配付資料より抜粋

Chika IKEDA



池田 周 (いけだ・ちか)

愛知県立大学外国語学部准教授。英国ウォーリック大学博士課程修了。博士（英語教育・応用言語学）。小学校英語教育学会愛知支部理事、「愛知県義務教育問題研究協議会専門部会」委員、文部科学省「小学校の新たな外国語教育における補助教材の検証及び新教材の開発に関する検討委員会」委員などを務める。外国語としての英語リテラシー習得について、小・中・高等学校を通じた指導のあり方、および国語科と外国語科の連携に関心を持つ。

いった活動も少しずつ取り入れて慣れさせます。中学年では新教材を用いて、通常の外国語活動に与えられた年間35時間に追加された15時間のなかで、3年生は大文字、4年生は小文字を加えて「読み方を聞いて形を識別する」活動を行っておきます。こうすることで、移行期間2年目（2019年度）には、高学年はいずれの児童も、1年目で文字に触れていることとなります。年度当初から新教材のワークシートやデジタル教材を活用して、継続して形の識別と読み方、活字体の書き方の定着をめざすとともに、文字の「音」への気付きまで発展させることもできます。

『We Can!』における文字や読み書きの活動

高学年用新教材『We Can!』では、「書くこと」「読むこと」の2領域に対応したコーナーとして「Let's Read and Watch」「Let's Read and Write」「STORY TIME」が設けられています（P.26 下図参照）。文字に関しては、誌面には掲載されていませんが「Sounds and Letters」もあり、デジタル教材を活用したアルファベットクイズや、文字の読み方を聞いて対応する文字カードを選ぶ活動などを行います。

さらに、文字の音に気付く活動も含まれています。『We Can! 1, 2』の多くの見開きページでは、図のように、左ページ下に小文字（またはch, th, whなどの文字の組み合わせ）、右ページ下にその文字で始まる語のイラストが2つ載っています。右下のイラストの語を発音す

ることで、いずれも同じ音から始まり、左下の文字がその音を表すものだと分かる仕掛けになっています。その後、「ペアで、その音から始まる別の語を制限時間内に言い合う」活動などを行って、既習語の中にも同じ音（文字）から始まるものが数多くあることに気付かせます。

これからまず何をすべきか

■ 研修で指導案を読み解く力を養い
児童の立場に立った授業を考える

毎時間の指導案を見て、授業のイメージを持つ力が重要です。言語活動の目的を確認しながら具体的な流れを理解し、指導で用いるClassroom Englishを練習します。また、授業を児童の視点から考えることにより、どこで、どのような足場掛けが必要かに気付くことができます。例えば、英語の語や文を久しぶりに4線の上に書いてみると、どの部分の運筆が児童にとって難しいかなど具体的な留意点に分かります。英語学習初期の読み書きの再体験が役立ちます。

■ 基本的な知識を身に付け
個々の音単位で発音を練習する

個々の音の発音の仕方を、口の形や舌の位置などを含めて、どのように明示的に説明できるかを考えながら、実際に声を出して練習してみましょう。文部科学省作成の『小学校外国語活動・外国語科 研修ハンドブック』には、「実習編」として、指導者のための「スピーキング・トレーニング」「発音トレーニング」のセクションがあり、音素の発音方法の解

説もあります。動画配信サイトYouTubeの文部科学省公式チャンネル (<http://jp.youtube.com/mextchannel>)も参照しながら活用してください。英語の発音が不安な先生方も、具体的に音の出し方を学ぶことで自信がつかます。

アルファベットの音について教員の理解が深まれば、3年生のローマ字指導においても活用できます。「k (/kɛɪ/)とa (/éi/)を組み合わせてka（「か」）」という説明を、「あいうえおの前にk (/k/)を付けると…」のように、子音の音で言い換えてみてはどうでしょうか。また /t/の音を導入すれば、訓令式のtiが「ち」ではなく「ティ」に聞こえることに気付き、ヘボン式でchiとつづる理由も分かりやすくなります。もちろん厳密には日本語と英語の音は異なりますが、仮名文字の音の子音と母音に区切って聞く経験が、ローマ字の仕組みの理解だけでなく、音素単位で文字と音が対応する英語の読み書きの習得を促します。

おわりに

文字指導自体が、外国語科における目標ではありません。「児童が文字を用いて何ができるようになることをめざすのか」を理解したうえで、それを実現するために行われるものです。文字の形や読み方、音を知識として詰め込ませるだけでは活用したことになりません。

「英語の文字を使って、書いて、読んで、こんなことができるようになったよ!」という児童の姿を思い描きながら、音声から文字へと段階を踏んで行う文字指導をめざしましょう。

第67回 全英連新潟大会レポート

「新潟から世界へ！新潟から未来へ！」

2020年度から実施される新学習指導要領や大学入学共通テストなど、英語教育改革や高大接続改革が進んでいる。

児童生徒の言語活動中心の授業を、どのようにつくっていけばよいのか。

2017年11月22～23日に新潟市内で開催された「第67回全国英語教育研究大会（全英連新潟大会）」に、そのヒントを探った。

新潟の英語教育の取り組みを 世界へ発信

全英連大会は毎年、各都道府県が持ち回りで開催している。今年度は新潟県で開催され、全国から1,200名を超える参加者が集まった。

企画構想段階から5年の歳月を経て、今大会は、実行委員会の小野島恵次実行委員長（新潟県立高田高等学校長）を中心に、「新潟から日本の英語教育を変えていく」という思いのもと、実行委員会メンバーや授業実演者、分科会発表者らが一丸となって準備を進めてきた。

今年の大会コンセプトは「新潟から世界へ！新潟から未来へ！～交流、喜び、成長あふれる英語教育の推進～」だった。小野島実行委員長によれば、記念講演の講師を務める名古屋外国語大学の太田光春教授も、前職の文部科学省初等中等教育局視学官であった5年前から、折りに触れ県内各校を視察し、授業改善への指導助言を行ってきたこともあり、現在、新潟県内では、雪国の厳しい寒さを吹き飛ばすほどの情熱あふれる授業が各校で展開されるようになってきた。今回は、そのような新潟の郷土愛を大切にしたい英語教育を、日本国内はもとより、世界へ、そして未来へ届けていくとの願いを込めた大会をめざしたという。数日前には雪もちらついたという新潟市だったが、大会当日は晴天に恵まれた。

英語教育改革が進む今、 教員は何をすべきか

初日の全体会は、りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館を会場に開かれた。

舞台を客席が囲むコンサートホールでの大会となり、参加者の視線が通常のホール以上に舞台へ集中する。これから始まる大会への期待感で、会場内は外の寒さを感じさせない熱気に包まれた。

開会に先立ち、新潟県立羽茂高等学校郷土芸能部の生徒たちが、相川音頭や佐渡おけさなどの佐渡民謡4曲を演奏、唄、踊りによって披露。全国高等学校総合文化祭の郷土芸能部門で最優秀賞・文部科学大臣賞を受賞したほどの実力を誇る生徒たちは、佐渡の文化をアピールした。

「雪国へようこそ！」との小野島実行委員長のあいさつで大会は幕を開け、「米どころ新潟の先生方一人一人の実践が、米一粒一粒であるなら、今大会ではそれを大きなおむすびのように1つに握り、全国の先生方と絆を結んでいきたい」と、開会を英語で宣言した。

続く全英連の栃倉和則会長は、まずイギリスのEU離脱やトランプ大統領によるアメリカ・メキシコ国境間への壁設置の主張、北朝鮮問題…など、国

際情勢を取り巻く諸問題について言及。「英語教育改革の流れは今、新しいフェーズに入った。英語は明るい未来を切り開く鍵であり、平和を築く鍵となる」と英語でメッセージを送った。

さらに、今年度より着任した、文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課の下山芳子教科調査官も英語で祝辞を送る。「日本の英語科教員以上に、生徒たちのために熱心になれる先生方はいない。素晴らしい仕事をなさっていることに誇りを持っていただきたい。現在は英語教育の大きな変革期にあり、教員中心の授業から児童生徒中心の授業へ転換が求められている。高等学校における英語授業の変化は著しく、7年前の調査では、わずか2.3%しか英語で授業が行われていなかったが、2016年度には52.6%にまで、その割合が高まってきた。また、小学校高学年での外国語教科化、中学年での外国語活動導入により、子供たちは高等学校卒業までに10年間かけて、英語を学ぶことになる。これからめざすべき



『英語情報』専用アプリで動画が見られます。
(アプリの詳細は表紙の裏面へ)

記念講演
名古屋外国語大学
太田 光春 教授
(前・文部科学省 初等中等
教育局 視学官)



は、児童生徒が英語をコミュニケーションツールとして安心して使い、活動することができる環境づくり。授業はよりコミュニケーションティブで実践的なものになることを願う。児童生徒には、英語を通して多様な意見、考え方をやり取りする経験をさせてほしい。今大会で得た学びをぜひ、地域や学校へ帰って共有して欲しい」と述べた。

自律した学習者を育てるために

記念講演は、「コミュニケーション能力の育成をめざして～自律した学習者を育てる～」を演題として、太田光春教授が英語で講演した。

講演の冒頭では、英語の授業をスキーに例え「①教室で、教科書と映像を通してスキーを学ぶ、②ゲレンデに行き、教師が滑るのをホテルの窓から見て学ぶ、③ゲレンデで教師の助言を得ながら、本人が実際に滑って学ぶ」の3つの学び方を示し、「皆さんはどの学び方を選びますか？ どの学び方をしたらスキーができるようになりますか？」と

会場に問い掛けた。そして、スクリーンに“The mediocre teacher tells. The good teacher explains. The superior teacher demonstrates. The great teacher inspires.”というウィリアム・アーサー・ワードの言葉を引用し、動機づけを意識した、生徒がプレーヤーとなる英語の授業の構築の必要性について述べた。また、アメリカの大学の学長の言葉を引用し、このようなパラダイムシフトに伴って、教師の役割を、“A sage on the stage.”から“A guide on the side.”に変える必要があると強調した。さらに、そのためにも教師は、学習者のロールモデルとして学ぶ後ろ姿を生徒に見せる必要があること、教えたことは生徒から‘elicit’するよう心掛けて、インタラクティブな授業をすること、生徒の理解の程度に応じた英語を使うこと、生徒が安心して英語で伝え合うことができるような親和関係を構築することを心掛けねばならないと説いた。

最後に、変化の激しい社会の中で、人生をたくましく切り拓いていくために

は、生徒が卒業してからも、学校で身に付けた知識や技能を自ら‘update’、‘upgrade’しながら学び続ける「自律した学習者」になる必要があり、そのためには、小・中・高等学校段階においては、学ぶことの意義を理解させ、学ぶ意欲や学習者としての自信を高め、正しい学び方をしっかりと教えておくことが不可欠であると述べて、講演を締めくくった。

発表者と参加者の活発な 意見交換の場面も

初日午後には、小・中・高等学校の教員による授業実演が行われ、2日目は分科会が実施された。会場を朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンターへ移した分科会は、2部構成で行われ、新潟県内をはじめ、茨城県や群馬県など隣県からも発表者を迎えた。いずれの分科会においても、小・中・高等学校それぞれの教育実践の事例や指導法などが紹介され、参加者たちは熱心に発表に聞き入るだけでなく、発表者との活発な意見交換をする場面も多く見受けられた。大会を通じて参加者たちは、地域を超えた教員同士の絆を深めながら、大きな変革期にある今、英語科教員としてのやりがいを実感し、日本全体で英語教育を支えていこうとの思いを強め、大会は幕を閉じた。

なお、第68回全英連大会は、「Be Active! ～児童・生徒が主体的に学ぶ英語教育～」をコンセプトとして、2018年11月16～17日に滋賀県で開催される。本誌でも随時、最新情報を紹介していく。

小学校 授業実演

Report

新潟市立上所小学校
村上 大樹先生

相手意識をもって、やり取りする児童の育成

授業実演のトップバッターとなる村上先生とともに、5年生の児童がステージに現れた。「新潟グルメを外国人留学生に紹介」することを念頭に置いて、児童たちは新潟のご当地メニューやその材料について、相手に分かりやすく伝えることを意識して、グループで発表し合う活動に取り組んだ。

村上先生の
実演の様子は
こちら



新潟グルメを留学生に紹介しよう

新潟市立上所小学校は児童数700名超の大規模校だ。2016年度に「外国語教育全体計画(上所プラン)」に基づく指導計画案を構想し、2017年度には短時間学習の授業構想を練り、英語指導力向上のため、職員研修を月1回実施している。

本単元は、「新潟の美味しいものを知りたい」という留学生からのリクエストに基づく学習だ。主菜、副菜、デザートของกลุ่มごとに、新潟グルメを調べ、留学生への分かりやすい説明を意識してやり取りの練習をする。授業では、留学生とのやり取りを想定した練習の場面を公開した。

【単元名】

「新潟のグルメ、何になさいますか?」(『Hi, friends! 1』Lesson 9より)

【本時のねらい】

自分たちが紹介する新潟グルメについて、相手に分かるように伝えたり、相手の質問を注意深く聞いて答えたりしようとする。

(全5時間中4時間目)

相手を意識して、話したり聞いたりする

児童たちはグループごとに、紹介者と留学生の役に分かれて活動する。その際、伝える相手が目上の相手であり、日本や新潟のことを知らない留学生であることを意識し、“What would you like?” “I would like ...”の丁寧な表現を使って、相手とやり取りすることの大切さを学ぶ。

紹介役の児童が写真を見せ、留学生役の児童が“What’s this?”と尋ねる。紹介役の児童は、自分が知らせたい新潟グルメについて、相手に分かりやすい言葉で紹介する。“It’s Kinpiradango.” “It’s chewing.”などと、写真を指さして食べ物の名前や材料を紹介しながら、ときには食感や味付けについて、ジェスチャーを交えながら説明した。それを聞いた留学生役の児童も、“I see.”や“Thank you.”のほか、“One more time, please.”といった相づちを打ちながら聞き、ときには質問も投げ掛ける。話す側、聞く側それぞれが、相手を意識してやり

取りすることが大切だと、実際に英語を使った活動をして学んでいた。

お互いのがんばりをたたえ合うクラス

グループで練習している間、村上先生は児童の発言に耳を傾け、ときには児童の表現を正しい表現に言い換えながら、児童の気付きを促そうとする。また、児童の発言を引き出すために、留学生役の児童と一緒に質問を投げるなどの配慮も見られた。中間評価の時間も設けられ、そのがんばりや良かったことをクラス全体で発表して共有した。例えば、「辛い」ことを伝えるのに、本当に辛そうな表情をしながら手で顔をあおぐようにして“it’s hot!”と言った児童を、1人の掛け声とともに“Good job!”などとクラス全員でたたえ合った。最後の「振り返り」の時間には、各自が振り返りカードに今日のがんばったことや次の授業でがんばりたいことなどを記入し、発表をして授業を終えた。



指導助言者より

担任が行う小学校英語授業への期待 文教大学 教育学部 金森 強 教授

緊張しながらも積極的に発話活動に取り組む子供たちの姿、加えて、普段通りのクラスの雰囲気が見られたことは、学級経営や授業実践を通して築かれた村上先生と児童との信頼関係を表していたと言えるだろう。村上先生は、伝える相手とその目的を、意識させることを大切にしている。単語やフレーズを無味乾燥に繰り返りリピートさせるだけの練習とは異なる指導である。また、児童が主体的に関わるために、自ら考え、工夫をして取り組むための手立てを講

じるように努めている。

児童の間違いから、語順・文構造への気付きを促す「振り返り活動」へと広げることができなかったのは残念であったが、英語での発信を堂々と楽しみながら取り組んでいる子供たちの姿は、中学校での本格的な英語学習への誘いとなる小学校英語の可能性を感じさせてくれるものであった。中学校において、小学校との接続がスムーズに行われるかどうか今後のポイントとなりそうである。

中学校 授業実演

Report

新潟市立小針中学校
中川 久幸先生

「やり取り」を通して、自分の考えを伝えることができる生徒の育成

中川先生とともにステージに上がったのは、日頃から、男女を問わず誰とでもペアワークができるほど仲が良い2年生の生徒たちだ。留学生の「日本の中学生の夢について、インタビューして生の情報を集めたい」という要望に応えるべく、留学生とのやり取りを想定し、ペアで自分の考えを伝える練習をした。

「やり取り」を通して、考えを伝え合う

新潟市立小針中学校は、生徒数900名を超える県下一の大規模校だ。学校で調査した学習アンケートによれば、生徒の80%が「英語が好き」と感じている。なかでも「話すこと」に興味・関心を示し、間違いを恐れずに積極的に英語を話そうとする姿勢が見られるという。

本単元では、最終時に新潟大学の留学生とのインタビュー活動で、生徒が自分の夢について自分の言葉で語り、双方向でのコミュニケーションによる「やり取り」ができたことへの成就感を体感させ、英語を「やり取り」して話す自信を付けさせたい、という目標を設定している。最終時の留学生とのインタビューからバックワードデザインで単元を構成しており、毎時の帯活動によるペアワークでは、生徒がメモをもとに、自分の考えを整理して相手に伝え、相手の考えを確認しながらレポートを書く力を養ってきた。

【単元名】

Lesson 6 My Dream (『NEW CROWN English Series 2』三省堂より)

【本時のねらい】

留学生からのインタビューのために、向上するためのポイントを理解して、仲間と練習することを通して、質問に正体して答え、つなぎ言葉などの必要な表現をしようとして「やり取り」することができる。

(全11時間中10時間目)

中川先生の
実演の様子は
こちら

インタビューを想定したやり取りの練習

授業ではまず、留学生からのビデオレターを見て、依頼内容を再確認した。留学生は、「日本の中学生の夢についてインタビューをしたい」と言う。生徒たちはその日に備えて、どうしたらインタビューでの「やり取り」をうまくできるようになるかを考え、3人1組のグループで練習する。

この日の目標は「留学生からのインタビューのために、仲間から多くの質問を受けて、+1の情報も付け加えながらしっかりと答えることができる」だった。各グループでは“What is your dream?”と聞いて、お互いの夢を答え合い、聞き取った内容をキーワードでメモする。その後、留学生とのやり取りを想定し、グループ内で留学生役と生徒役に分かれて、質問しては答え、役割を交代しながら練習した。生徒たちは単に夢を聞くだけに終わらず、“Why?”などのつなぎ言葉で会話を広げ、自分の夢を相手に分かりやすく伝えた。



自分の言葉で伝え、相手の言葉を聞く

続いて、留学生とのインタビューを想定したやり取りがスクリーンに映し出されると、中川先生は、留学生からどのような質問が投げ掛けられるかを生徒たちに考えさせた。そして、そのスクリプトを用いてペアでインタビューの練習をし、生徒と中川先生、生徒同士でインタビューを共有して見せた。生徒たちは“What is your dream?” “I want to be a ...” “Why?” “Because I like ...”といったやり取りを繰り返し、自分の言葉で相手に伝え、相手の言葉を聞き取って、さらに質問するという力を身に付けたようだった。

指導助言者より

「やり取り」の醍醐味を体験させることの大切さ

上智大学 外国語学部 和泉 伸一 教授

中川先生の授業実演では、生徒同士で質問リストから自由に質問を選んで即興で答えるという帯活動から始まり、それに続いて新潟大学の留学生からのビデオレターによる「あなたの夢は何?」というインタビュー依頼に答える形で、3名グループでローテーションしながら質問し合う活動が繰り返された。帯活動の試みから、留学生からの依頼として活動を仕掛けるなどさまざまな工夫が見られ、英語でのやり取りの多い授業が試みられた。これからの英語授業は、書いて覚

えて発表するといった形だけではなく、その前提となる「やり取り」ができることが重視されている。Interactional Competenceと呼べるものである。その観点から見た時、本授業では生徒の質問や答えが単調になりやすく、会話の発展や盛り上がりが見られなかったなど、今後の課題も浮き彫りとなった。やり取りの醍醐味はその即興性と話の展開や深まりにある。こういった点で、また次につながる指導へと発展させていただきたいと思う。

高等学校
授業実演

Report

新潟県立新発田高等学校
根立 望先生

opinion by using target phrases

~, I would V

been ~, I would n.p.

have Vp.p. /

have been adj.

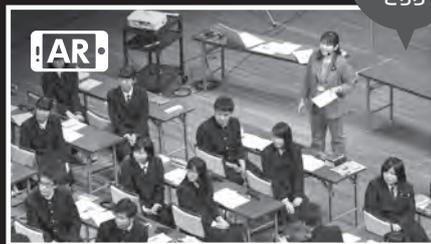
To be a ... your opinion ... erating

classmate

生徒が自己表現活動を楽しむ授業作りと教師の役割

根立先生との親和関係が築かれた、普通科2年生文系クラスの生徒たちが登壇した。スピーキングに苦手意識を持っていながらも、ペアワークやグループワークに慣れ親しむにつれ、お互いの意見を尊重し合い、意見の違いを楽しみ、課題解決のために協力できる学習集団に変化してきた姿が披露された。

根立先生の
実演の様子は
こちら



生徒が身近に感じる発問の工夫を大切に

創立121年の伝統校である新潟県立新発田高等学校。根立先生が4月から担当したこのクラスでは、まず生徒同士および生徒と教師の親和関係を構築することに重点を置き、「教室は英語を使う場所であること」「コミュニケーションの能力を育成するためには傾聴姿勢や、相手に伝える英語を話すことや、質問をすることが大切であること」を理解させ、言語活動中心の指導を実践してきた。また、教科書の題材を扱う際には、生徒の生活や経験と重なるような発問の工夫をし、自分の考えや意見を述べる活動を取り入れてきた。

人種差別の問題をグループで話し合う

授業では、1950年代のアメリカの公民権運動の時代に起きた、黒人生徒が白人生徒の通う高等学校に登校した日に起きた事件と、その後の「差別した側」と「差別された側」の困難や悩みを読み解いた。根立先生は生徒たちに、「もし、自分が黒人生徒の入学を反対して差別していた様子が新聞で報道されたら、どう感じるか」と問い掛ける。恥ずかしさ、怒り…と生徒たちから、さまざまな感情が発表される。根立先生は一人一人の発言に丁寧に受け答え、ときに言い換えながら、授業を進めた。グループディスカッションでは、司会・コメンテーター・英語使用を促す盛り上げ役・タイムキーパーの役割を分担し、各自が役割を果たし、グループに貢献するようにと根立先生は促す。“What is important to make a better society?”など4つの質問について、生徒たちは話し合い、メモを取って相手の意見を聞きながら、質問したり、

自分の考えを付け加えたりしながら、活発に意見交換をした。生徒たちはグループディスカッションに慣れた様子で、自分の役割を理解して活動に取り組んでいた。

話し合いから学んだことをクラスで共有

その後、各グループで話し合った内容をクラス全体で共有した。あるグループは、Q1の“What is important to make a better society?”に対して、“We think it is important to realize each other.”と意見を述べ、Q2の“What did/does the Little Rock Nine want to tell young people?”に対しては、“Never give up to change something.”といった意見を報告した。

さらに振り返りとして、1名の生徒が代表して、授業で学んだことを述べる。「黒人に対する白人からの人種差別を止めたい。私たちは人を肌の色で差別をしてはいけない」。生徒の力強いメッセージが会場を沸かせ、拍手に包まれて授業は終了した。



指導助言者より

生徒との親和関係を大切にした授業 名古屋外国語大学 外国語学部 太田 光春 教授

“Easier said than done.”インタラクションを基軸にして、生徒が輝く授業をしてください。これが私の根立先生に対する助言の1つでした。それを見事に実践してくれた根立先生は本当に素晴らしいと思います。助言者冥利に尽きます。日頃から、生徒との親和関係を大切に、信頼と敬意に基づいた授業づくりを心掛けてきた成果だと思います。授業には、生徒が安心して、しかも自発的に、英語で発言することができる雰囲気がありました。根立先生は、発言者に対して、一人一人に丁

寧に対応していました。生徒が言いよどむと、必要な手助けをして、生徒からより適切な言葉を引き出しました。難しい表現を含む発言には、ほかの生徒が理解しやすい言葉にさりげなく言い換えていました。また、教科書の内容を素材にして、生徒が情報や考え、気持ちを伝え合う活動をたくさん準備していました。発問の際には、考えたり表現したりすることが容易になるよう、表現の形式や発問の仕方を工夫していました。今回の授業は、皆さんの授業づくりに大いに役立つと確信しています。



県内の小・中・高等学校における実践事例を 分科会形式で発表

授業改善のヒントが 26の分科会にちりばめられている

大会2日目は分科会。朱鷺メッセ 新潟コンベンションセンターに会場を移し、新潟県内をはじめ、茨城県や群馬県など近隣県の小・中・高等学校の先生方が、自身の実践に基づく研究発表を行った。例年同様に2部構成となった分科会は、小学校4会場、中学校6会場、高等学校13会場、そして連携をテーマにした3会場で開かれた。

分科会で扱うテーマは多岐にわたる。小中高連携や技能統合型の言語活動、協働的な学び、学習意欲を高める指導、思考力や発信力を意識した指導、評価の取り組みなど、新学習指導要領を見据えた実践研究の報告も多く、どの分科会も満

席で熱気にあふれていた。なかでも前日に授業実演を行った小・中・高等学校の先生方の分科会には、どのようにして授業計画を立て、児童生徒との親和関係を築き、自身の指導力を高めてきたのか、その課題や今後の展望などを知らうと、多くの参加者が集まっていた。

発表した先生方はそれぞれ、自身や学校、地域が抱える課題を提示したうえで、どのようなテーマに基づいて研究を行い、課題解決のためにどのように取り組んできたか、その成果について言及した。研究発表を一通り聞いたあと、参加者が発表者に対して質問をしたり、自身の経験を交えて意見を述べたりする時間が設けられている。また、指導助言者が研究内容につ

いて解説したり、アドバイスを送ったりもする。参加者たちは、発表者が数年にわたって実践・研究してきた成果から、今後の授業改善のヒントを1つでも多く学び取ろうと、熱心に聞き入り、メモを取っていた。そして、ペアワークやグループディスカッションなどを通じて、お互いが取り組んでいる実践を紹介し、アドバイスをし合うような場面も見受けられ、どの会場も参加者同士のネットワークづくりにもつながっていたようだった。

全英連新潟大会はこうして、2日間の日程を終え、発表者にとっても参加者にとっても、小野島実行委員長がねらいとした「教員一人一人の実践が結ばれていく」実り多き大会となったようだった。

新潟から滋賀へつなぐバトン

2018年度は滋賀で開催します。
より多くの皆様のご参加をお待ちしています。

第68回 全英連滋賀大会

コンセプト：「Be Active! ～児童・生徒が主体的に学ぶ英語教育～」
開催日程：2018年11月16日（金）～17日（土）
会場：1日目 滋賀県立芸術劇場 びわ湖ホール（〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 15-1）
2日目 ビアザ淡海【滋賀県立県民交流センター】（〒520-0801 滋賀県大津市におの浜 1-1-20）
コラボしが21（〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 2-1）
記念講演講師：立教大学 グローバル教育センター長 松本 茂 教授
授業実演：大津市立晴嵐小学校、竜王町立竜王中学校、滋賀県立虎姫高等学校



第68回全英連滋賀大会 実行委員会の皆さん

特別
記事

小・中学校や地域と連携し、 教育資源や人的資源を還元

～明海大学 高野 敬三 副学長に聞く～

明海大学の「地域学校教育センター」は、浦安キャンパスが位置する千葉県浦安市をはじめ、千葉県内や東京都内の小・中・高等学校および教育委員会、地域社会と連携し、教育研究の成果を還元するため、2016年4月に設立された。2017年1月には、東京都足立区内の小・中学生の学力向上、英語力向上を目的とした連携協力協定を締結した。足立区をはじめとする地域連携のねらいや現状の取り組み、今後の展望について、高野敬三副学長にお話を伺った。



教育資源を還元して地域に貢献

「知」の拠点である大学では、さまざまな分野の教育研究が行われ、昨今では社会からの要請によるグローバル人材の育成という使命に応えるべく、国際化への取り組みが加速している。また、地域社会への貢献といった新たな動きも広がりを見せている。明海大学においても、地域に大学の教育資源を還元すべく、2016年4月、「地域学校教育センター」を設置し、千葉県内や東京都内の小・中・高等学校および教育委員会、地域社会との連携を進めている。

例えば、これまですでに、東京都立高校に在籍する外国籍生徒に対して、「日本語教育」の支援や同大留学生との交流会を開催したほか、千葉県浦安市の小学校で児童の学習支援や、英語および外国語活動に関する支援、都立高校英語補習寺子屋事業支援などを行ってきた。

地域学校教育センター長と教職課程センター長を兼務する高野副学長は、「本学の教職課程の教員や学生、そして留学生等が、各地域の子供たちの支援に動いています。本学における学びを、実際の現場に生かす取り組みと言えます。大学にとっては、教育資源の還元を通じて地域への貢献ができ、地域にとっては、大学の知見を生かして支援を受け、子供たちの学力が向上する、という双方にとって良い関係を築くことができます」と話す。

足立区からの要請に 明海大学が応じて実現

2017年1月には、東京都足立区と「連携協力に関する協定」が締結された。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催や小学校英語の必修化、教科化への対応を見据え、区内の児童生徒の英語基礎力の定着と向上、グローバル人材の育成に向けた、区の英語・外国語活動の施策・事業の充実を図ることを目的としている。

高野 啓三 (たかの・けいぞう)

明海大学副学長。同大地域学校教育センター長、教育課程センター長を兼務。東京都立高等学校で教鞭を執り、東京都教育委員会指導主事、都教育委員会高等学校指導課長を経て、東京都立飛鳥高等学校校長。その後、東京都教育委員会指導部長、都教育委員会理事、東京都教職員研修センター所長を歴任し、2013年より東京都教育監、2015年3月定年退職。2015年4月より明海大学外国語学部教授。2016年4月より現職。文部科学省「不登校に関する調査研究協力者会議」委員、「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討委員会」委員、中央教育審議会初等中等教育分科会教員養成部会委員を歴任。



今回の連携協定事業の背景について、高野副学長は「足立区の中学生の英語力は都内でもあまり高いとは言えず、学力調査でも、英語で目標点数を超える生徒の割合が、他教科に比べると低い傾向があるようです。そこで、区内の中学生の英語力向上を図りたい、との足立区からの要請を受けて、本学が大学改革を進めるうえで、足立区と連携することで、教育資源を地域に還元し、貢献することにつながると考えました」と説明する。そして、「足立区の子供たちが英語を好きになり、英語を学ぶことを楽しいと思えるような状況になるまで、本学の教員が各校を訪問して英語教育に携わり、授業改善に取り組む先生方を支援していきたいと考えています」と述べた。

連携協定事業は、「児童生徒の英語基礎力の向上」「小・中教員の授業力の向上」「区民の外国語学習活動支援」を柱とする。中学校への支援としては、重点支援校に指定された区内の5つの中学校に対し、同大の担当者が月2回訪問し、各校が定めたテーマに沿って、区教育委員会指導主事とともに、助言を行っている。また、2016年度に実施して評価の高かった、区内中学生と同大留学生による交流事業を継続して行っている。

「このような交流事業や学習支援事業は、本学の教職課程の学生にとっては、教育実習に加えて学校現場を体験する機会となり、足立区と本学の双方にとって有益であると言えます」と高野副学長は話す。

小学校に対しては、小中連携対象校、

足立区小学校教育研究会外国語活動部顧問校長校、校長会長校の全7校において、英語の授業をより充実させるための指導助言を継続的に行っている。

また、2017年度はこのような児童生徒や教員への支援に加え、区民の外国語学習活動の支援も徐々に広げており、「外国人おもてなし語学ボランティア・ブラッシュアップ講座」や「小・中学校の英語教材で学ぶ大人の初級英会話講座」「親子で学ぶ楽しい日本語講座」といった講座を開講してきた。

「留学生」という人材資源を 生かして貢献

このような事業を進めるなかで、2017年11月には、足立区の小学生約90名が同大を訪問し、留学生や教職課程の学生と英語で交流する「明海大学あけみ英語村～小学生異文化交流プロジェクト～」を開催した。これは、教室で学んだ英語を実際に活用することで、英語でコミュニケーションを図る喜びを体感し、異文化を体験することを目的としたものだ。

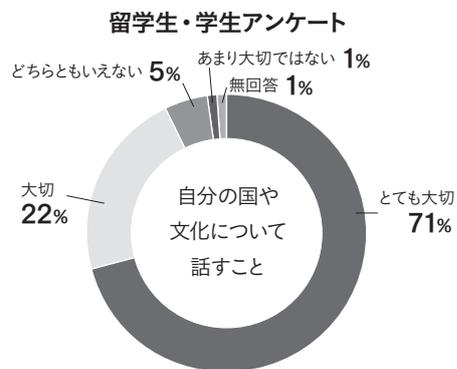
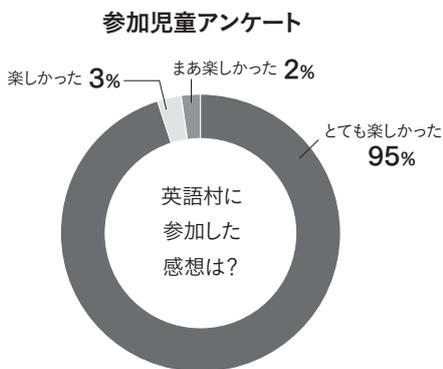
「子供たちは、欧米の英語圏だけではなく国々から来た留学生と接することができます。世界には多様な国籍の人がいて、英語は世界の人々と交流するための共通言語なのだとは知ることは、コミュニケーションの喜びを知り、英語や言語に対する意識を高めることにつながります」と話す高野副学長。そして、「本学には

4,000名の学生のうち、留学生が500名以上も在籍しています。その人的資源を有効に活用したいと考えています。子供たちにとっては、世界の人と接し、世界へ目を向けるきっかけになりますし、留学生にとっては、日本の子供たちと接して、自国の文化や言葉を紹介したり、日本の文化や言葉に触れたりする機会にもなります」と、双方向のコミュニケーションによる効果を述べた。

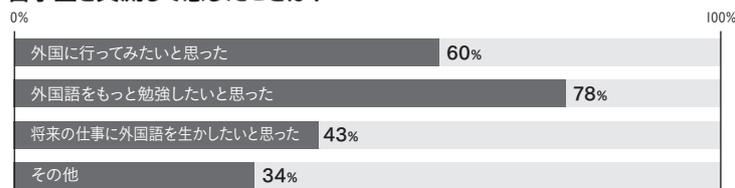
小学生も留学生、学生も満足した交流の機会

今回の英語村事業では、カナダやウズベキスタン、ベトナムなど16の国と地域からの留学生が参加した。また、教職課程の学生も小学生のサポートに入り、自らの教育観を育む機会となった。開催に向けて同大では、留学生と学生、教職員が一丸となって準備を進め、当日のプログラムは同大と区教育委員会、小学校の三者で事前協議を繰り返し、練り上げてきたという。当日は、留学生、学生、教職員が笑顔で小学生を迎え入れ、体育館や芝生広場、教室など学内のさまざまな施設で交流を深めた。

高野副学長は「子供たちとの交流には『遊び』が必要とのことから、遊びを通して英語を話す空気づくりをしようと、ランチタイムには芝生広場で昼食をとり、小学生が用意してきた遊びを取り入れながら交流を深めてもらいました。芝生広場という開放的な空間だったこともあって、子供たちもリラックスして英語を使って交流していました。プログラムが



留学生と交流して感じたことは?



終了して、バスに乗り込む際には、子供たちも満足した笑顔を見せ、学生や教職員とハイタッチして帰っていく姿も見られました」と喜ぶ。

実際に、参加した小学生へのアンケートからは、「とても楽しかった」「楽しかった」が98%と、ほぼ全員が肯定的な感想を寄せ、「外国に行ってみたいと思った」「外国語をもっと勉強したいと思った」「将来の仕事に外国語を生かしたいと思った」などの声が挙がっている。事業のねらいの通り、小学生は今回の体験を通じて、英語への意識と英語学習への意欲を高めていたことが分かる。

また、留学生や教職課程の学生へのアンケートでは、「小学生にとって自分の国や文化について人に話すことは、大切なことだと思う」という回答が9割を超えていた。また、「小学校の教員免許を取ること視野に入れたい」といった声も寄せられている。

このアンケート結果について、高野副学長は「小学生にとっても、本学の留学生や学生にとっても、今回の英語村事業を意義深く感じてもらえたようです。双方にとって、他国の文化や歴史、良さに気づき、自分とは異なる文化を受け入れ、尊重することの大切さを体感できる機会になりました。こうした事業は今後も継続的に行っていきたいと考えています」と述べた。

2020年以降も継続するレガシーとして

「明海大学あけみ英語村」の事業については、今後、対象学年に応じたプログラムを開発することや、留学生や教職課程の学生の人数をいかに確保するか、開催曜日を日曜にする方が参加者を確保できるか、などの検討すべき課題はまだある。また、今回ほど大きい規模ではなくとも、夏休みなどに簡易に開催できる交流会形式にするなどの要望もあるという。さらに、会場を同大とはせず、各小学校へ留学生が出向いて交流会を開くことも考えられる。

同大はこれからも、足立区との連携協定事業のさらなる発展を図る。小・中学生の英語力向上のための取り組みや、教員の指導力向上のための助言、区内中学生への学習実態調査などを行い、双方にとって効果的な方法を見出したと考える高野副学長。2020年からの新学習指導要領実施、東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて動き出した足立区とともに、同大は歩み続ける。「連携協定事業はまだ始まったばかりですが、2020年がゴールではなく、2020年以降も“レガシー”として継続していく事業として、教職員と学生が一丸となって取り組んでいきます」と力強く語った。



EVENT REPORT

「明海大学あけみ英語村 小学生異文化交流プロジェクト」が開催

昨年度より始まった、明海大学と足立区の連携協定事業。今年度は小学生を対象にした「英語村」で、各国からの留学生と児童が英語を使って楽しみながら交流した。



2017年11月2日。明海大学新浦安キャンパスを足立区立西新井小学校の5年生87名が訪れ、同大学の外国人留学生と英語で交流する「明海大学あけみ英語村 小学生異文化交流プロジェクト」に参加した。

開村式では、明海大学の安井利一学長が「明海大学には世界各国からの留学生が500名以上いる。彼らと一緒に楽しい一日を過ごし、学んでほしい」とあいさつ。緊張で固まっていた子供たちだが、アイスブレイクでは、外国人留学生と日本人学生約80名とともに「Rock, Paper, Scissors, One Two Three!」と「じゃんけん列車」を楽しんだ。少人数のグループに分かれたあとは、英語で自己紹介。「Hello! My name is ...」 「Nice to meet you!」 「I like ...」さらに、それぞれの国の言葉であいさつをし、お互いの名前を英語で言い合うなどして、子供たちは徐々に強張りを解いていった。

グループごとにキャンパス内の芝生の広場で昼食を取ったあとは、鬼ごっこやだるまさんがころんだ、バドミントン、剣道など、遊びを通じた交流がなされた。留学生や日本人学生たちが会話をリードし、子供たちも遊びやゲームの解説をするなど、相互にコミュニケーションを図りながら打ち解けた様子が見られた。

「学んだ英語で伝えたい、話したいと思っても、なかなか普段、動機付けの場がないので、このような機会はあるがありがたい」と5年生の担任の轟木陽子先生は話す。

午後は、アクティビティ・スタート・セレモニーから開始。足立区の石川義夫副区長が「楽しく学び、遊んだ体験を足立区に持ち帰って、これからの学習に役立ててほしい」とあいさつした。

子供たちは「ネイティブ授業」「各国遊び」「読み聞かせ&アクトアウト」の3つのアクティビティを体験。「ネイティブ授業」では、ネイティブの教師が英語で授業を展開した。英語でのあいさつと自己紹介のあと、アメリカとカナダの伝統行事であるサンクスギビングを紹介。児童は色や形を英語で復唱しながら、真剣な表情で七面鳥のペーパークラフトを作っていた。

「各国遊び」では、留学生たちの母国の遊びを体験。体育館に足を踏み入れると、子供たちの笑い声と笑顔が弾ける。ベトナムの「ダーカウ」は、重りの付いた羽根を足で蹴り渡していく、日本の蹴鞠にも似た遊びだ。サッカーを習っている男児はリフティングの要領で、器用に羽根を受け止めていた。ほかにも、マレーシアの足踏みゲーム「ペプシコーラ」、韓国の「投壺」、パキスタンの「サッチェ・ラブレ」、ウズベキ

タンのサイコロゲームなど、大人でも初めて見る遊びばかり。子供たちもまずはルールの理解が必要だったが、すぐになじみ、世界の遊びを身体で感じていた。

「読み聞かせ&アクトアウト」では、留学生2名と日本人学生1名のチームで、「浦島太郎」「3匹の子豚」「赤ずきん」など子供たちになじみのある絵本を英語で読み聞かせる。擬音やあいさつなど、それぞれの国の言葉で実演。例えば、「Splash!」は日本語では「ポチャン」、ネパール語では「チョブラーン」、ベトナムでは「トン」といった具合に、国による表現の違いを楽しんだ。

一日を終え、すっかりリラックスした雰囲気の子供たちは「最初は緊張したけれど、いろいろな国の遊びでほぐれた。英語は全然できなかったけれど楽しかった」「留学生にいろいろと教えてもらい、英語の勉強にもなった。英語で好きな剣道のことなどを話した」と口々に感想を述べていた。

西新井小学校の柴良之校長は「留学生との交流を通して、その背後にある『世界』を意識し、心に留め、自分のなかで深めていけるといい。将来、英語を使った仕事に就くなど、今日のことが人生の大きな転機となる人がいるかもしれない」と子供たちに語り掛けた。



「21世紀型スキル」の 習得を基軸に学校改革

“チャレンジ”を大切にす大阪府立箕面高等学校の教育

2014年4月、大阪府立箕面高等学校に公募等校長として日野田直彦校長が着任し、学校改革が始まった。それからわずか4年、同校には教員にも生徒にも“チャレンジ”する土壌が築かれた。生徒たちは今、自分がやりたいことに果敢に挑戦し、可能性を広げ、夢に向かって大きく羽ばたこうとしている。変革の背景には何があるのか。日野田校長のめざす教育について、お話を伺った。

日野田 直彦(ひのだ・なおひこ)

1977年大阪生まれ。帰国子女。帰国後、同志社国際中学校・高等学校に入学し、当時の日本の一般的な教育とは一線を画した教育を受ける。同志社大学卒業後、2000年馬淵教室に入社。2008年奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校の立ち上げに携わる。2014年大阪府の公募等校長制度に応じ、大阪府立箕面高等学校の校長に就任。全国の公立学校で現役最年少の校長。

日野田先生の講演を収録したDVD「明日の教室」第51弾 日野田直彦
http://www.sogogakushu.gr.jp/asunokyoshitsu/dvd_051.htm

教員も生徒も安心して 挑戦できる場をつくる

4年前の着任当時、36歳だったという日野田校長。全国の公立学校で現役最年少校長として注目を集めた。一方で、当時の箕面高等学校の教員の平均年齢は52歳。教員たちからの“若い”校長へのネガティブな反応は、少なからずあった。

そこで、日野田校長は、トップダウン式ではなく、ボトムアップ式で、教員たちとの信頼関係を築くことから始めた。「まずは、先生がやりたいことをヒアリングしました」。だが、誰もがすぐに新しいことに取り組むことは難しい。日野田校長は、「責任は全て私が取る。だから、安心してやりたいことに挑戦してほしい。働き方も変えて、先生方が元気で笑顔になれるようにしたい」と、教員の意識改善を促した。

生徒と教員が一緒に“チャレンジ”できる学校。めざしたのは、そのような学校づくりだった。海外で育った日野田校長は帰国後に教室で生徒全員が正面を向き、講義を黙って聞いてノートを取ることが良しとされる、日本の学校教育に衝撃を受けたという。「これではまったく世界で通用しません。日本では先

生も生徒も、学校はこうあるべきという固定概念に捉われがちです。しかし、新しい社会をつくっていくためには、柔軟な思考が必要なのです」と述べる。

教員同士、教員と生徒、生徒同士、会議の場でも授業でも「もっとこうの方が良い」ということがあれば、自分なりの改善策を提案し、意見を交換しながら新しい方法を生み出していく。教員や生徒の発想を大切にし、チャレンジできる土壌をつくっていった。

授業はインタラクティブであるべき

同校は、2014年度に大阪府教育委員会より「骨太の英語力養成事業」の指定を受けた。これは、指定の府立高校17校に対し、SET (Super English Teacher) を配置し、海外進学に必要な英語力を測るテストをカリキュラムに組み込んだ授業を導入することで、生徒の英語4技能を、海外の大学に進学できるレベルにまで引き上げることをめざす事業だ。

日野田校長は、テストのスコアを上げるための対策に取り組むのではなく、海外の大学で学ぶためのスキルを修得させる必要があると考え、まず授業スタ

イルを見直した。そこで、従来の日本の学校教育で行われてきた「受動的な学習スタイル」から、生徒たちがディスカッションをするなどの「能動的な学習スタイル」へと転換し、さらに「21世紀型スキル」の習得を基軸に据えた。特に、クリティカルシンキングやロジカルシンキングなどの思考スキルに加え、チームビルディング、プレゼンテーション、ノートテイキングといったスキルも習得することを目標とした。そして「スキルを習得するには、授業はインタラクティブであることが必要」だとし、生徒には受験偏差値ではない真の学力、変化の激しい時代を生き抜くためのスキル、世界で本当に通用する力を身に付けてほしいと考えている。

「主体的で、対話的で、深い学び」を まさに実践

着任当初の2014年度には、国際教養科(現・グローバル科)の1年生80名のうち、希望者40名を対象とする「土曜講座」を1回2時間、年間13~15時間開講した。「外部の英語学校と提携して、単なるテスト対策ではないマインドセットを中心としたプログラムを共同

開発しました。講師を英語学校から派遣してもらい、本校の英語科を中心に全ての教員から有志を募り、思考方法やアカデミックマナーの修得に始まり、徐々に英語力も高めていくことをめざして、ワークショップスタイルの授業を行いました」と話す。母語でしっかりと力を付けることも大切なため、授業は日本語・英語を問わず、また、幅広いトピックにも対応する力を育むため、英語科の教員だけではなく、さまざまな教科の教員が参加し、教科横断型で行った。授業スタイルの教室も改装し、壁一面をホワイトボード化し、生徒が自由に意見を書き込みながら、ディスカッションができるような環境も整えた。図書室は、床に座って自由に発言したり、学習したり、発表したりと目的に応じて自由にレイアウトできるスペースを確保した。

2015年度には、SETとして高木草太先生が着任し、クリティカルシンキングやロジカルシンキングなどの育成に重点を置いた授業を、1年生と2年生に対して同内容で行った。そして、2016年度からは同校の教員のみで土曜講座を運営するようになり、1年生でアカデミックスキルを身に付け、2年生はそれらを生かして、チームで年間4つのプロジェクト学習に取り組むことにした。

「例えば、自動車の運転中、前方にヘルメットをかぶってオートバイを運転している人と、かぶらずに運転している人がいるとします。どちらかの方向に避けなければならない場合、どちらにハンドルを切りますか。さらに、それをAIが選ぶ場合のプログラミングをどのように行いますか。これは、プロジェクトで実際に生徒が取り組んだ倫理観を問うテー

マです。ヘルメットをかぶっていれば命を守るからと、かぶっている人の方へハンドルを切るという考え方もできます。しかしもう一方では、ヘルメットをかぶっていないことは違法なのだから、命を落としても仕方がないと考えることもできるわけです。特に、AIの場合、プログラミングの判断は普遍的でなければなりませんから、さらに問題は難しくなります」と語る日野田校長。同校では、このような問題について、生徒自らが考え、「意思決定」や「合意形成」、「価値判断」をしながら、まさに「主体的で、対話的で、深い学び」を実践している。

一流のマインドに触れ、 世界とつながる機会を持つ

生徒が海外経験を積む機会も広がった。同校の短期留学は語学研修ではない。マサチューセッツ工科大学 (MIT) のアントレプレナーセンターを訪れ、生徒自身がプロジェクト学習に取り組み、世界を変革している起業家たちを招いてプレゼンテーションを行うワークショップ形式だ。MITの卒業生が立ち上げた企業が運営するアントレプレナー育成プログラムを、同校の生徒向けに編成したもので、生徒が課題意識を持ち、解決のためのアクションを起こすための思考力・行動力を育成することを目的とする。アントレプレナー教育の第一人者や3Dプリンターの開発チームメンバー、MITやハーバード大学卒業生などが講師を務めている。

「一流の起業家たちの『自分たちが世界を変える』というマインドに触れたことで、生徒たちは、この人たちとともに自分も世界を変えたいという気持ちになって、学ぶ意欲を高めています」と、日

野田校長は生徒たちの目の輝きを間近に見てきた。

また、海外へ行きたいという興味はありながらも、部活動や経済的な事情などから短期留学に参加できない生徒の要望に応じて、ハーバード大学の学生を日本へ招き、同校で3日間のワークショップを開く機会も設けた。

日野田校長は「このような機会を通して、生徒たちには社会課題を他人事にせず、自分のこととして捉え、課題解決の方法を考える力を持ってほしい」と話す。そして、「グローバルな視点を持ち、海外とつながることで、世界の人のネットワークが広がり、日本にいただけでは得られないチャンスを手にすることができるものです。世界へ出て行くということは、そうしたメリットがあるのです。生徒たちには、チャレンジ (Challenge)、勇気 (Courage)、貢献 (Contribution) の心を大切に、人生選択の舵を自らの手で切ってほしいと願っています。そのためにも、学校はどの子にとっても安心できる居心地のよい場所であるべきではないでしょうか」と投げ掛けた。

枠を外せば、ワクワクする

このような学びの環境が整うなかで、生徒たちは、意欲的に学校生活を送るようになり、なかには課外でプレゼンテーションコンテストに出場するような生徒も現れた。自ら行動を起こし、チャレンジし始めたのだ。

さらに、自らの興味関心を伸ばす最良の学びの場を求め、海外の大学への進学をめざす生徒も年々増えている。2017年度は、オーストラリアのメルボル



図書室を改装し、床に座って学習し、自由に発言したり、発表をしたりできるスタイルで授業を展開できるようにした。



希望者を対象とした、MITのアントレプレナーセンターでのワークショップ形式の研修では、世界を変革している一流の起業家たちと触れ合う。

ン大学、シドニー大学、クイーンズランド大学をはじめ、全米ランキング9位のウェズリアン大学や、キャンパスを持たず授業をオンラインで行い、世界最難関の大学として注目を集めるミネルバ大学などに合格者を出したという。

4年間のさまざまな挑戦により、学校が変わり、生徒も変わった。そして、生徒たちの夢を支える先生方も変わろうとしている。

日野田校長は「最近では、評価のあり方も検討しています。まだ検討段階ではありますが、英語科の先生方は、定

期考査を廃止しようと考えています。定期考査では、定期考査で測る学力しか測ることができません。また、4技能のうち、スピーキングやリスニングの力を測るためにも、定期考査以外の評価があってもよいと思います」と話す。さらに、定期考査がなければ、採点にかかる時間が不要となり、教員の負担軽減にもつながるといふ。「オンライン英会話を導入したのにも、生徒の英語を話したいという意欲を高め、語彙や表現の不足を感じて、学習意欲を引き出すことが目的ですが、教員の授業時間を減

らして余裕時間をつくることも目的の一つです。教員が日々の忙しさから開放されることで、生徒たちと向き合う時間が増えます。教員が笑顔になれば、生徒も笑顔になれば、学校に活気が出るのです」と述べた。

当初は3年間の任期だった日野田校長は、今年度、任期を1年延長して、教員や生徒たちとともに、学校改革をさらに進めてきた。「枠を外せば、ワクワクします。これからも教員や生徒たちと一緒に、ワクワクしていきます」。箕面高等学校の“チャレンジ”は続く。

SET (Super English Teacher) 高木 草太 先生の実践

海外経験に基づく教育実践で、生徒のスキルを磨く

海外の大学で修学できる力へと引き上げていく

私が担当しているのは、グローバル科の学校設定科目である「骨太英語」(全学年対象、各学年2単位)と、「創造英語」(2年生対象、2単位)の2科目です。「骨太英語」は、1年生の土曜講座で行ってきた内容で、「創造英語」は2年生が行っていたプロジェクト型学習をベースとしています。土曜講座は一部の生徒だけが受講していましたが、グローバル科全体に枠を広げ、授業として行うことになりました。

「骨太英語」は、海外の大学で修学するために必要な、クリティカルシンキング、ロジカルシンキング、ノートテイキングといったスキルを身に付けます。また、さまざまな問題を他人事とせず、自分のこととして捉えて、積極的に解決しようとするマインドを持つことを目的としています。また英語力向上のためには、Skypeを使った英語ネイティブの講師とのオンライン英会話によって、実践的な英語力を磨きます。日本の生徒たちが苦手とするライティングとスピーキングの力を高めることを中心に授業を行っています。

1年生では、「チャレンジする姿勢を育

む」ことを重視し、間違いを恐れずに英語を話し続ける力を身に付けます。2年生では、アカデミックなスキルも身に付けることができるよう、リーディングやリスニングでインプットした内容を要約する力を育てていきます。そして、3年生は1、2年生で身に付けた力を実践する場とし、原稿を見ないで自分の経験を話す力を育てます。生徒は学びが深まり知識も増えてきていますから、知識を活用して、エビデンスを持って論じることや、抽象的な概念までも自分の言葉で話すことができることをめざします。海外の大学へ進学する際には、エッセイライティングなどで自分のことを語れる力が求められますので、3年生の段階までにそこまで引き上げていくのです。

社会で求められるスキルを育むために

私自身は海外で教育を受けてきた経験が長く、国際バカロレア (IB) のディプロマ・プログラムを修了しています。そこで、IBの教育理念を取り入れながら、生徒たちには世界で通用する力を育てるための指導を取り入れて授業を行ってきました。生徒たちは授業のねらいを理解すると、何をすべきかが分かり、積極

的に授業に参加しています。高校生活は、生徒にとって大きな変化のある3年間だと思います。私は授業を通じて、生徒たちが社会に出たときに必要となる、コミュニケーション能力や思考力、課題解決能力などのスキルをこの3年間で身に付けられるような機会をつくり、生徒たちには自信を持って、自分の選んだ道を歩んでいってほしいと願っています。

この3年間で実践してきたことは、少しずつ本校の先生方の間にも広がり、グローバル科での取り組みを普通科でも取り入れてくださるようになってきました。まだ試行錯誤をしながら進めていますが、少しでも、これからの社会で生徒たちが求められる力を育むことにつながっていければと思います。



高木 草太 (たかぎ・そうた)

大阪府立箕面高等学校にSET (Super English Teacher)として勤務。英語の4技能+ Critical Thinkingを養う授業「骨太英語」「創造英語」の指導を担当。幼少期より、ベルギー、マレーシア、オーストラリア等に滞在。国際バカロレアのディプロマ・プログラムに進学し修了。自らの経験を活かす場所として日本の英語教育に興味を持つ。3年の任期で2015年より現職に就いた。

第10回全国高等学校英語スピーチコンテスト入賞者

海外夏季短期留学報告

全国英語教育研究団体連合会（全英連）は毎年、「全国高等学校英語スピーチコンテスト」を開催している。このコンテストは9つのブロックで開催される地方大会から選出された高校生18名が、オリジナル原稿による英語スピーチを披露するものだ。上位入賞者には、副賞として、海外夏季短期留学への参加機会が与えられる。2017年2月の第10回コンテストで第2部1位に輝いた、東海北陸ブロック代表で静岡県立静岡高等学校2年生の一居 成さんの、オーストラリア短期留学の体験記をご紹介します（記事は全英連会誌2017 第55号より転載）。

第2部第1位 東海北陸ブロック代表 静岡県立静岡高等学校 2年 一居 成

I had taken the first place in the 10th National English Speech Contest in the Second group, and was given the opportunity to study for two weeks in Australia. I didn't know much about Australia when I first chose it for my wish for the homestay, but I just wanted to go to the southern hemisphere for the first time in my life.

I had lived in the U.K. for 9 years, so I wasn't really scared of the full-English environment, but what made me worried was the fact that I was going abroad with no one around me who I know. Fortunately, my host family welcomed me as if I was one of the family members. They even said to me to think of them as my parents in Australia. They were really nice people and I loved them.

In my home stay, I went to a place called Cairns. The town I stayed, Kamerunga, was a place with a lot of nature around houses and the houses were massive compared to the average houses in Japan. The house I stayed even had a pool to swim in. Unlike Japan, where houses are all cuddled up, the houses of Kamerunga had big gardens and big spaces between houses.

I went to a local school for the weekdays, and I had a lot of fun there. Students there were very open minded. Many people there came to me welcoming me to Australia, and shook my hand. This was a surprise to me as there is not much of a culture of shaking hands to a newcomer in Japan. I felt really welcomed when they shook my hand. The classes there were quite different to Japan. Students had to move from class to class and every student had their own different timetable of classes. It was hard for me at first, remembering the places of the classes, but I enjoyed discovering new places in the school while I was remembering where they were. I was surprised again that students could change which classes they take. If they didn't like a class, they could decide to take a different class, as long as they get the academic credit. So the school was basically like a college in Japan. It was an interesting experience.

The two weeks I spent in Australia became a very important part of my life. I cannot thank enough to Zen Eiren, Eiken Foundation of Japan, and Queensland Government Japan Office for this wonderful experience and I want to thank my "parents in Australia" for everything they've done for me. I will not forget this experience and one day in the future, I will make use of it.



第11回全国高等学校英語スピーチコンテストが開催されます！

全英連は2018年2月11日、東京都渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟大ホールにて、「第11回全国高等学校英語スピーチコンテスト」を開催します。地方大会で選ばれた地区代表18名による英語でのスピーチをぜひ、ご覧ください。

日時：2018年2月11日（日） 午前9時30分～
 場所：国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟大ホール
 〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1
 詳しくは、全英連ホームページをご覧ください。http://www.zen-ei-ren.com/



連載

「学習到達目標と指導、

最終回

「学習到達目標と指導、評価の一体化」のための 英語科教員同士の連携の大切さ

ワーキング・グループで

「縦の連携」を取る

CAN-DOリストの作成には、各学年での教員の作業に加え、学年を超えた教員同士の協力が必要になります。この「縦の連携」を円滑にするのがワーキング・グループ(以下WG)です。特に、大規模校や高等学校などで英語科教員が多い場合は、各学年よりCAN-DOリストを担当する教員を選び、WGをつくります。WGでは、生徒の卒業時、および各学年の到達目標のたたき台を作成します(詳しくは2017夏号参照)。英語科全体で検討する前に、WGで学年間の縦の連携を取ることで、より円滑に作成を進めることができます。

近年では、各教科書でCAN-DOリストがあらかじめ作られていますので、教員がCAN-DOリストを作成する負担はだいぶ少なくなりました。しかし、各学校の学習到達目標やコミュニケーション活動は、必ずしも既製のCAN-DOリストと一致しているとは限りません。勤務校の実情に合うように修正して活用することが求められます。

英語科教員同士で連携してCAN-DOリストを作成するプロセスを経ることで、以下のようなメリットが生まれます。

- ①学習到達目標が英語教員の中に内在化・共有化される
- ②1~3年生まで、3年間を見据えた指導をすることができる
- ③英語科として自信を持って生徒・保護者に提示することができる

CAN-DOリストの公開は文部科学省の「平成27年英語教育実施状況調査」によると中学校7.8%、高等学校22.0%であり、③はその課題への対応とすることができます。

科目リーダーの活用で

「横の連携」を取る

高等学校では英語の科目が複数あります。CAN-DOリストをもとに、学年のWG担当者以外の教員が各科目のリーダーとなりシラバスを作成します。作成されたシラバスは学年の教員全員で検討し、CAN-DOリストに即した現実的な年間指導計画を作成します。科目リーダーは、後述する教材の共有や評価でも、中心的な役割を担います。

学年内でのシラバス検討ののち、英語科全体で検討とシェアを行います。「横の連携」と「縦の連携」を、「英語科

全体の連携」に変えていくのです。このプロセスを通して、1年生の活動を2、3年生でも継続・発展させるなど、卒業まで教育活動の継続性や一貫性、さらには発展性を構築していくのです。

英語科全体での教科書選定

「学習到達目標と指導、評価の一体化」をしていく教員同士の連携のなかで重要なのが、英語科としての教科書選定です。教科書はCAN-DOリスト作成、シラバスの作成、授業、評価の全てに関わるからです。高等学校の場合、教科書を学校単位で選ぶことができます。そこで提案したいのが、複数年の使用を前提とした英語科全体での教科書選定です。担当学年に関わらず、英語科全員で教科書を検討することで、3年生までの目標や指導を意識した教科書の選択ができ、教科書採用後は、作成したCAN-DOリストや教材などを、一定の期間継続して活用することが可能となります。これは教員負担を大きく軽減するとともに、学校として一貫した指導を行うことにも寄与します。さらに、修正点を次年度に生かすことも容易になるため、教育の質の向上にもつながるのです。



評価の「一体化」を目指して

『CAN-DOリスト』の形で学習到達目標（以下CAN-DOリスト）を指導、評価と一体化させていくには、少なからぬ労力と時間、そして教員間の共通認識が必要です。そこで最終回は、英語科教員の連携の大切さについて考えてみます。

教材と指導方法の共有

英語科としてのCAN-DOリストやシラバスができたら、各学年で指導方法を共有します。ある先生は文法中心の授業を行い、別の先生はコミュニケーション中心の授業をしたのでは、育成する技能や知識も異なりますし、学習到達目標の達成も難しくなります。クラス間での不公平が生じるなど、生徒の不利益につながることもなかりかねません。

指導方法を共有するために効果的なのが、科目リーダーが中心となり、ハンドアウトなどの自作の教材や、授業で使用するパワーポイントなどを共有することです。もちろん作成段階で、学習到達目標に即した教材や指導方法となっているか、学年の担当教員で相互にチェックを行い、授業の進め方を検討します。教材の共有は、均質かつ質の高い授業を、全てのクラスに展開する最初のステップとなるのです。

評価における教員同士の協力

授業での連携ばかりでなく、評価においても協力が必要です。学習到達目標を共有し、統一された教材と指導方法で授業を展開すれば、当然学年で統一した評価方法が求められます。それは筆記テストばかりでなく、スピーキングやライティングなどのパフォーマンステストでも同じです。

しかし、パフォーマンステストにおいて、同じタスクと評価基準を使い、同じような厳しさ（または易しさ）で評価することは容易ではありません。そこで、科目リーダーを中心に、パフォーマンステストのタスクの検討やループリックの作成・共有を行い、ALTも含めた学年の英語教員で協力して評価を行います。さらに、学年間で連携することにより、前年度のノウハウを生かすこともできます。

パフォーマンス評価の必要性は、今後ますます高まると考えられます。負担を分担・軽減しながら、より信頼性が高く、生徒にとって公平な評価としましょう。

次年度へバトンタッチ！

各学年で到達目標の達成状況の検討を行い、必要に応じてCAN-DOリストの点検を行います。大切なことはそれを英語科としてシェアし、次年度につなげることです。学年の進行とともに英語担当者の担当学年も持ち上がるのが少なくありません。達成状況を参考にしながら、CAN-DOリストを修正し、それを英語科として共有したうえで、次の学年に引き継ぐようにします。それにより、CAN-DOリストの完成度が毎年高まり、作成の負担も大きく減少します。使用した教材やハンドアウトなどの学年間の引き継ぎも、同様のメリットがあります。

CAN-DOリストの設定状況は、全国的にも進んできています。せっかく作った学習到達目標を絵に描いた餅にせず、教員が連携して指導・評価と一体化させて活用することで、生徒にとって実りある英語教育に結びつけていきましょう。



深澤 真（ふかざわ・まこと）

琉球大学 教育学部 准教授。茨城県生まれ。中央大学文学部卒業。米国 Saint Michael's College 大学院修士課程、筑波大学大学院修士課程修了。茨城県立竹園高等学校教諭、茨城大学人文学部 准教授を経て、2015年より現職。専門は主に英語教育学・評価論。



英検4級・5級で広がる

英語の世界

中学校卒業程度とされる 英検3級へと導くための指導とは

2020年度から、小学校では3、4年生に活動型の「外国語活動」が移動し、5、6年生に「外国語」という今まで誰も経験したことのない新しい教科が新設され、世間の注目を集めています。中学校でもその連動で大きな変革を迫られています。小学校の「外国語」教科化に伴う中学校英語の授業づくりをどのように行い、中学校卒業程度といわれる実用英語技能検定（英検）3級相当の実力を身に付けるように導いていけばよいのか。最終回では中学校の英語の授業のあり方について、具体的に考えてみましょう。

身につけた文法知識をどのように使って活動させるか？

2017年3月に公示された中学校の新学習指導要領には「授業は英語で行うことを基本とする」という文言が明記されました。週4時間の時数は現行の学習指導要領で定められた時数と変わりませんが、4技能のうちの1つの「話すこと」が[発表]と[やり取り]に分けられ、これらの5領域について、それぞれ目標が掲げられました。

語彙数は、現行の1,200語程度から「2,200～2,500語」（小学校での600～700語を含む）に増加し、新しい文法事項もいくつか入ってきます。小学校での時数が70時間から210時間に増えるのですから、中学校での表現の幅の

広がりには当然といえます。しかし、語彙の増加や文法事項の広がり、指導者にとっては、それらをいかに理解させ、定着させていくかが悩ましいところです。そして、何よりも、小学校での「外国語」としっかりつながる授業に変えていく必要があります。

そのためには、小学校の「外国語」の内容や指導の実際を把握することが大切なのです。これまで、文法の知識の習得に重点を置いてきた中学校教師は、その知識を生徒にどのように使わせるかを考え、学習到達目標に向けた言語活動が組み込まれた授業づくりへと変えていく必要があります。

英検3級が求める英語力とは？

2013年に閣議決定した「第2期教育振興基本計画」（平成25～29年度）では「グローバル人材育成」が目標の1つとして掲げられ、英語教育の強化につながる事業が複数進められるなか、総務省はその評価として、生徒・教員の英語力の目標達成を「極めて困難」としています。文部科学省の「英語教育実施状況調査」によれば、2016年度の中学生の英検3級程度相当の達成率は36.1%で、目標値の50%には及んでおらず、現状は厳しいといえます。

英検3級は、一次試験がリーディングとライティングの筆

記50分とリスニング25分です。それに合格すると二次試験として、面接形式のスピーキングテストがあります。そこでは30語程度のパッセージを読み、音読し、その文章とイラストについての英問英答があります。最後に自分のことについての質問があり、音読の力とやり取りのなかでのスピーキング力を測ることになります。

つまり、これは4技能を測るテストであり、日頃から4技能の充実した言語活動を取り入れた授業をしていれば十分対応できるはずなのです。

Teacher Talk で、長い会話を聞く力を付けましょう。

具体的には、毎回授業の初めに教師がTeacher Talkで既習事項の入った身近な話題を語ることで、まとまった英語を集中して聞く力を付けさせましょう。こうした積み重ねが既習事項の定着にもつながります。生徒に教師が話す英語を聞かせ、その話題について反応し、生徒同士で会話をするように習慣付けていくと、語のコロケーション（単語と単語のつながり）を意識した単語、文構造、相づちや文のつながりを意識した自己表現の英語を使う場面が与えられるのです。生徒同士では正確性に欠ける場合もありますが、お互いに確

認したり教え合ったりして、英語を使うなかで気付いた疑問を教師に確認することもできます。

複数の生徒を相手に練習したあと、何かが全員の前で発表すると、英語表現や内容の共有ができます。また、発表した生徒は自信が付き、学習意欲の向上へとつながることでしょう。こうした言語活動の積み重ねがスピーキングの[やり取り]の力になっていきます。Teacher Talkは小学校の「外国語」の指導計画表にも入っており、生徒にとっては小学校から慣れ親しんだ活動になっていくはずで

いろいろな文章に触れさせ、読解力を付けましょう。

2017年度英検3級第1回検定では、リーディングについて、1文における空所補充と、会話文の空所に適切な語句や文を補うものの2種類がありました。そして、読解問題には、短い文章と、メールのやり取り、長めの文章の3種類の英文を読む出題があります。日頃からいろいろな文章に触れ、どのような種類の文章かを判断できると読解が早くなります。文章の種類によって目的や形式が違うので、形式で種類が見極められると、そこから得るべき情報がおのずと見えてくるからです。

読解力を付けるためには、ALTにも協力してもらい、中学生にも分かる広告、メールや手紙、メニュー表など実物や写真を持ってきてもらうとよいでしょう。例えば、レストランの

メニューには店を出される料理名と値段が書かれているため、それを見ながら注文することができます。お店の広告文なら、お店の名前、アピールしている点、場所や開店時間などを、イベントの案内なら、いつ、どこで、何があるのか、誰を対象とした、どのようなイベントなのかを読み取ります。メールは件名から用件がすぐに分かるので、手紙と同様に、誰から誰へどのような内容を伝えたいのかを読み取ります。また、日頃から長めの文章にも触れる必要があります。単元の文章を授業でセクションごとに読むだけでなく、全体を一気に読んでその概要をつかむような読みも必要です。常に辞書に頼るのでなく、未知語は意味を推測することも大切です。

ライティングの練習で正確さを強化しましょう。

英検3級のライティングは、質問についての答えとその理由を書くもので、語数の目安は25～35語程度です。日ごろから、まとまった英文を2、3文書く練習をしておく必要があります。小学校では、自分の行きたい国を言うときに、なぜ行きたいのかと、理由を述べる練習をしています。中学校でも、理由付けのある意見を言う練習を継続すべきでしょう。

4技能をバランスよく学習することは、各技能を強化し合うこととなります。リスニングで聞いた音声を読むことによって、文字で確認でき、語彙力や文法力の強化になります。スピーキングで何かを話すためには、瞬時に単語を選び、正しく並べ音声化することになりますが、ライティングはそれを文字で書くので、紙に残り、つづりや文法ルールが正しいかどうかを、自分で確認することができます。スピーキングでは滑

らかに言おうとすると流暢さは増しますが、それに気を取られ、正確さが落ちることがあります。正確さを強化するためには、ライティングを取り入れることが重要です。

子供たちは、小学校での「inputしてからoutputする」という指導の流れによって、表現力はかなり付いているはずで

す。中学校では、マンネリ化を避ける意味で、逆もありではないでしょうか。outputに挑戦し、言えなかった単語や表現を意識してからinputすることで学習意欲を刺激して、積極的なinputにつながるかもしれません。中学校では学習意欲を維持させるための手立てを考える必要がありますが、生徒にとって、英検3級の受験は大きな挑戦となるだけに、効果が期待できるのではないかと思います。



川上 典子 (かわかみ・のりこ)

鹿児島純心女子大学 国際人間学部 教授。専門は応用言語学、英語教育。2001年度より小学校英語活動に関わる。小学校英語関連の授業科目としては「児童英語」「児童英語演習」「児童英語教育実習」「教材開発演習」等を担当し、外国語活動を指導できる人材育成に取り組んでいる。小学校教員向け小学校英語セミナーを毎年開いている。



〔連載〕

英検2級の「壁」を

超えるための授業実践

最終回：考える力を付ける

生徒に「経験」の不足があってはならない

前回は、教員が日々の授業をデザインするにあたって陥りやすい「失敗」について考えました。今回は、実用英語技能検定（英検）2級の「壁」を生徒が超えていけるようにするための「力」を付ける指導のあり方を考えていきます。

「釣り」を例に挙げると、釣りは「釣った魚の数だけ上手くなる」といわれています。釣りの本を熟読して知識を増やしても、

釣りの「経験」が増えない限り、釣りが上手になることはありません。英語学習にも当然、同じことがいえます。教員は授業を通じて生徒により多く良質な経験をさせる必要があります。「力」は経験によって培われます。生徒に英語で「読む」「聴く」「書く」「話す」、そして「考える」経験の不足があってはならないのです。

全ての活動に「考える」要素を取り込む

教員が英検2級合格を日々の授業の「仮目的」として、その壁を超えようとする生徒をサポートするなら、受験時に求められる「力」を養う活動を、授業に不足なく取り入れなければなりません。「読む」「聴く」「書く」「話す」の4技能を養う活動をバランスよく取り入れることはもちろん、言語活動が本当に受験時に求められる「力」を養うものになっているかを考える必要があります。その活動が「目的」に合った「手段」であることを常に意識すべきです。スポーツでいえば、試合で求められる「力」を養わない練習には意味がないのです。

英検受験時には、初見の文を読んだり、提示されたトピックに対してその場で自分の意見を書いたり、話したりと、常に「考えること」が求められます。そこで、全ての活動に「考える」要素を織り込んでみましょう。言語はコミュニケーションのための道具であり、コミュニケーションには常に「考えること」が伴います。私たちは考えて「読む」「聴く」ことで、新たな情報を取り入れることができ、考えて「書く」「話す」ことで、相手に自分の意見や意志を伝えることができるのです。コミュニケーションの力を付けることは、「考える力」を付けることにほかなりません。

考えて「読む」「聴く」力を鍛える

英検受験時に、生徒は初めて目にする文の内容を速く、的確に把握しなくてはなりません。授業のなかの「読む」活動にもその力を養う要素を取り入れるべきです。教科書を精読するだけでなく、初見の文章を読ませる頻度を上げましょう。速読力を養うためには、週に1回程度、英検の長文問題のような英文を読ませるとよいでしょう。この際に大切なのは、「文章の難易度を下げ、時間的な負荷をかけること」です。英検2級合格をめざす

生徒であれば、英検3級の長文問題などが適切だと思います。

英検のリスニングでは、文を聴いてその内容を「理解・把握する」ことが求められます。そのためには、授業のなかで「聴いて」情報を取り入れる訓練をするとよいでしょう。教科書本文などを読ませる前に、まず音声聴かせて内容を理解・把握させる工夫も有効です。「英語で授業を行うこと」が、この力を伸ばす最良の方法であることは言うまでもありません。

技能統合的な「考える」活動を

多くの教員が「書く」「話す」活動を、どのように取り入れるべきか、授業をデザインすることの難しさを感じているのではないのでしょうか？

「書く」「話す」能力は、「発信」であるがゆえに、その理由を設定しなくてはならないからです。つまり、「考える」要素を取り入れ、「仕掛け」をしなければならないのです。これらを別々に行うと授業時間が足りなくなってしまう。そこで、発想を変えて、リスニングの場合と同じように、教科書本文と関連付けて「書

く」「話す」活動を同時に行うのも1つの方法でしょう。

例えば、教科書で絶滅危惧種の動物について学んだ場合、自分の住む地域の絶滅危惧動物についての簡単なレポートを週末の課題などとして書かせ、授業ではその内容を口頭で発表させるなどの技能統合的な活動も有効だと思います。ここで教員が意識しなくてはならないのは、生徒の「間違い」を指摘・修正し過ぎないようにすることです。「発信」の活動において間違いを指摘し過ぎると、生徒の「発信」への意欲を削ぐことになりかねません。

考える活動

- Miniature Mock Debate

ここで、「考える」ことに焦点を当てた活動を紹介していきます。これは私がMiniature Mock Debateと呼んでいる活動です。提示されたトピックについて生徒がペアで助け合って台本を作り、それを発表します。議論を組み立てるときは、競技ディベートの基礎の部分だけをテンプレートにしたもの(右図)を使わせます。

この活動は、教科書の題材に合わせてトピックを変えなどして、さまざまな用途や難易度で行うことができます。この方法を用いれば、生徒は無理なく「考えて」英語を使うことができます。同時に「議論すること」の楽しさもまた学ぶことができます。応用編として、一歩踏み込んで、準備なし、打ち合わせなしで取り組ませると即興ディベートのような即時性を養う活動にもなります。

Miniature Mock Debate

A: I believe, Hokkaido is a good place to live in
because _____.

B: You said _____,
but
a) that is not (always) true,
b) that is not special, [that is not just in Hokkaido,]
c) that is not important, [so what?]
d) that is not a good thing but a bad thing,
because _____.

I believe, Hokkaido is not a good place to live in
because _____.

A: You said _____,
but
a) that is not (always) true,
b) that is not special, [that is not just in Hokkaido,]
c) that is not important, [so what?]
d) that is not a bad thing but a good thing,
because _____.

「英語で考える」力が付けば、2級の壁を超えられる

生徒が英検2級の壁を超えていくために、あるいはさらに上の級を取得するために求められるのは、いわば「英語で考える」力を付けることではないのでしょうか？「英語で考える」ことができれば、英語での「やり取り」が可能になります。言い換えれば、英検2級レベルの力を身に付けることは、英語である程度コミュニケーションができるようになることを意味しているといえます。スポーツでいえば、やっと試合が楽しめるようになる段階です。英検2級は多くの受験者にとっての「壁」でも

ありますが、力を付けて「壁」を超えた者には新たなステージが開けます。語学であれ、スポーツであれ、チャレンジングな「壁」を超えることは、生徒たちを大きく成長させ「強い心」を育みます。それこそ、「内向き」と言われる今の中高生が必要としている経験ではないでしょうか。英語教育もまた人間教育です。私たち教員は、生徒たちが壁を超えていくのを伴走者としてよく見守り、励ますことを、自らの喜び、自らのチャレンジとしたいものです。

「壁」を超える言葉

Joys impregnate. Sorrows bring forth.

17世紀イギリスの詩人ウィリアム・ブレイクの言葉です。人間の学びには、常に喜びと悲しみが伴います。

木村 純一郎(きむら・じゅんいちろう)

北海道札幌国際情報高等学校 教諭。北海道足寄町出身。東洋大学文学部英米文学科卒業。1992年～93年にかけて文部省海外教育施設日本語教員派遣事業(REXプログラム 第3期)に参加。カナダ・アルバータ州カルガリーのWilliam Aberhart High Schoolに勤務。2002年度より北海道札幌国際情報高等学校に勤務。全国高校英語ディベート連盟(HEnDA)北海道ブロック代表。北海道高等学校文化連盟国際交流専門部専門委員長。



第8回TEAP連絡協議会レポート

パネルディスカッション

「2020年度大学入学共通テスト実施までのロードマップ」より

大学入試における英語外部検定試験の活用が広がるなか、2020年度から大学入試センター試験に代わって実施される「大学入学共通テスト」における、英語4技能評価のあり方に注目が集まっている。2017年12月に立教大学で開催された「第8回TEAP連絡協議会」には、全国から200名もの参加があり、大学入試の最新動向に対する関心の高さがうかがえた。当日のプログラムより、パネルディスカッションの模様をレポートする（文中敬称略）。

4技能試験の活用の メリットと課題点

松本 大学入試センター試験は、2020年度から「大学入学共通テスト（共通テスト）」となり、従来のようなマークシートの英語試験が2023年度まで存続します。国立大学協会（国大協）は2017年11月、国立大学は、受験生に4技能の外部検定試験とマークシートの試験の両方の受験を課すことを発表しました。受験者の負担が増えてしまうのではないのでしょうか。

山田 経済的かつ時間的負担があるというご指摘もあり、何らかの対応策が必要だと思っています。マークシートの試験については、2018年2月に実施する英語の試行調査（プレテスト）を通じて、一定の方針を示していく予定です。基本的には、「質の高い知識を持って判断し、表現することができる」という力を測ることを重視し、知識の記憶を確認するといった従来型の試験から一歩踏み出したいと思っています。

松本 現在のマークシート試験とは違う問題形式になるということですか。

山田 そうです。まだ準備段階ではありますが、スピーキングやライティングの能力を、どのように測るかという課題にも取り組んでいきます。

松本 国大協の方針について、金沢大学の見解はいかがですか。

坂本 4技能だけでよいのではないかと、いう考えもある一方で、多様な外部検定試験の結果をどのように評価するか、という問題があります。2023年度まではデータをためておいて、共通テストがなくなっても、外部検定試験でも評価することができる体制を整えておきたいと思っています。

松本 2024年度には、大学入試センターが作成する英語試験はなくなると考えてよいのでしょうか。

山田 その通りです。もともと2017年5月の段階では、共通テストの英語試験については、A案とB案を示していました。A案は、共通テストは実施せず、外部の資格・検定試験を活用し、2020年度から外部検定試験を活用するという案で、B案は共通テストは2023年度まで継続して実施。各大学は共通テストと検定試験のいずれか、または双方を大学の判断で選択可能としていました。しかし7月には、「英語の外部検定試験を活用し、『読む』『聞く』『話す』『書く』の4技能を評価」「共通テストの英語試験は、認定試験の実施・活用状況等を検証しつつ、2023年度までは継続して実施」となりました。

松本 金沢大学が、導入当初の「みなし満点方式」から「みなし得点方式」に変えた理由をお聞かせください。

坂本 国際学類では外部検定試験で高得点であれば、センター試験を満点とみなしてきたのですが、結局のところ、その恩恵を受けることができる受験生は少数でした。そこで、高校在学中に受験した外部検定試験を利用できるようにすれ

ば、英語能力の高い受験生を獲得できると思え、みなし得点方式に変えた結果、恩恵を受けることのできる受験生はかなり増えました。

松本 4技能をしっかり学んできた高校生を獲得したいということですね。

坂本 その通りです。

松本 では、早稲田大学の文化構想学部と文学部が「基準点方式」に落ち着いた理由を教えてください。

安藤 私どもとしては、基準となる点数を取れていれば、あとは私たちが引き受けて、到達目標まで伸ばしていけるのではないかと、という判断がありました。一方、英語が得意な生徒には、逆にそれを生かすことができない、という高校側からの意見もあります。私どもは、他の科目もしかるべき勉強をしてほしいと考えていますので、得意な英語で得点を稼いで合格した、という形は望ましくないと、「基準点方式」を採用しました。

松本 英語の場合は、大学が示す3つのポリシー（アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー）に照らし合わせ、基準となる英語力があれば、入学後に英語で行う授業についていける、留学がしやすいなどの観点で見極めることが重要なのではないかと思います。

安藤 発信力を持った学生を生かしていく、ということだと思います。そこには、交換留学やダブル・ディグリーなどを視野に入れ、そのような場に参加できる学生を増やす要件として、高校卒業までに4技能の力をバランスよく身に付けた学生に入学してほしい、という気持ちがあります。

松本 安藤先生のご講演では、一般入試





モデレーター

立教大学 経営学部 教授
グローバル教育センター長
松本 茂 氏



パネリスト

文部科学省 高等教育局
大学振興課 大学入試室長
山田 泰造 氏



パネリスト

金沢大学 機械工学系 教授
学長補佐 (入試・入試改革担当)
坂本 二郎 氏



パネリスト

早稲田大学
文学学術院 教授
安藤 文人 氏



パネリスト

東京都立立川国際中等教育学校
副校長
宮田 明子 氏

(英語4技能テスト利用型)で入学した学生の英語の成績が良いとのことでした。

安藤 はい。1年次の英語の成績を分析したところ、4技能テスト利用型入試で入ってきた学生の方が、成績が良いことがわかりました。文化構想学部と文学部では英語を英語で教えていますが、その指導法に抵抗を感じていないからだと思われます。

高大接続で、中・高等学校からの英語教育に変化

松本 立川国際中等教育学校の5年生(高校2年生)のTEAPの点数が非常に高いようですが、これは入学時からの積み重ねが大きいのでしょうか。

宮田 中学校段階の英語の標準時間数で学習する学校の生徒に比べれば、本校の生徒が英語に接している時間は多いと思います。1つの文法項目について、それを使って英文を書く、ペアワークで会話する、発表する、ALTと一緒に使ってみる…と、生徒が言語活動に取り組む時間はかなり多いです。

松本 TEAPの受験指導は具体的にどのようなことをされましたか。

宮田 まずは試験の形式や何が問われるのかなどから説明をして、授業との関連性を示します。特にスピーキングは、自分がインタビューするというロールパターンがありますし、ライティングは、ある程度、形式の説明しておく必要はあります。

松本 今回、共通テストでも外部検定試験を利用するという決定については、賛成でしょうか。

宮田 先ほどの安藤先生のお話では、4

技能試験を利用して入学した生徒を、どのように伸ばすかまでお考えいただいているとのことでした。そのような教育をしていらっしゃる大学であれば、生徒に勧めることができる要素になると思います。

安藤 ありがとうございます。入試の形が変わり、今ようやくそのような形ができつつあるところ。入試が終われば英語学習は終わりということではなく、入学後にさらに英語力を伸ばしていこうとする学生を育てていきたいと考えています。

個別試験で大学のオリジナリティーを出す

松本 大学入試改革では共通テストに注目が集まりがちですが、国公立大学の個別試験についてはいかがですか。

山田 どのような入試を行うのかは、各大学の自由です。ただ一方で、個別試験でも英語を課される以上は、4技能試験を活用し、学力試験を課すのであれば記述式の採用を検討してほしいと思います。

松本 金沢大学の個別試験では、英語の試験問題が随分変わったそうですね。

坂本 英語で状況説明をするような問題を課すなど、出題傾向を大きく変えました。ライティング問題については、今後も、受験生の思考力・判断力・表現力を問う出題の工夫をしていきたいと思っています。

2020年度に向けての期待と課題

松本 最後にお一人ずつ、今後に向けての期待やメッセージをお聞かせください。

山田 受験生の負担軽減の問題や、外部検定試験の活用法を示すなど、今後も多くの課題に対応していきます。

坂本 新たな高大接続の基本方針は、入試改革を推し進める本学においても、心強いものでした。今後も全学体制で取り組んでいくことができたらと思います。

安藤 現在の大学入試改革は、英語に限らず、日本の大学教育の目標が大きく転換する象徴的な改革だと思います。最終的には、学生が世界に向けて発信していく力をいかに身に付けさせるかを考えなければいけません。そして、大学はそのような学生をサポートしていく体制を整えなければならないでしょう。

宮田 高大接続改革により、大学入試が変わろうとしています。今後の課題は、小・中・高等学校の先生方が、どのように英語を教えていくかということにかかっていると思います。今まで実践してきた授業のスタイルを変えていく大変さはもちろんあります。しかし、その一方で、英語科教員としては、やりがいのある時期でもあると思います。私もぜひ、現場の先生方と一緒に、高等学校や中等教育学校の英語教育を考えていきたいと思っています。

松本 2020年度に向けて、すでに国、大学、高等学校それぞれの場で、さまざまな検討や取り組みがなされ、実際に大きな変化が始まっているということ、今日は改めて実感いたしました。授業で4技能を指導し、4技能を測る外部検定試験を大学入試に活用することを大きな流れとして、今後、日本の英語教育が改善され、素晴らしい人材が育っていくことを、皆さんとともに願ってきたいと思います。

外部検定試験を導入してから 学習意欲の高い学生がさらに増えた

獨協大学は2016年度の一般入試より、全学部でTEAPなどの「外部検定試験活用型」を導入し、2018年度入試では新たに、外国語学部と国際教養学部の「センター利用入試英語資格」を設けた。入試部長・外国語学部 児嶋一男教授に、TEAPなどの英語資格・検定試験を入試全般に導入した理由や意図をお伺いするとともに、「外部検定試験活用型」を利用して入学した学生の様子や、語学教育に定評のある獨協大学における英語教育の取り組みなどについて伺った。



獨協大学入試部長・外国語学部 児嶋一男 教授

4技能の試験に向けて学び 総合的な英語力が伸びる

獨協大学は、TEAPなどの英語資格・検定試験を採用してから3年目を迎える。2018年度入試では、外国語学部、国際教養学部で「センター利用入試英語資格」を新設し、経済学部と法学部でも引き続き一般入試で活用する。

児嶋一男教授は、「TEAPを利用する受験者は年々増えている」とし、昨年度はTEAPの4技能のスコアで出願する受験者が2技能での出願者数を上回ったという。そして、「4技能型の試験が広まることで、受験生の4技能が高まっていく」と考える。4技能を測る試験に向けて学習することで、リーディングやリスニングの受信型の技能だけでなく、ライティングやスピーキングの発信型の技能を高めることができるからだ。

さらに、児嶋教授はTEAPや英検を採

用することに、意外なメリットもあると述べた。「設問が日本語であることが、英語を母語とする受験生の日本語力を測ることができる」というのだ。

“語学の獨協”で高まる 英語の学習意欲

獨協大学は、学部学科問わず、語学を得意とする学生が多い。「高等学校でも、英語が得意なら獨協大学へ、と指導してくださっているようです」と喜ぶ。

外部検定試験活用型入試の導入以来、語学の課外講座を受ける学生が増え、「英語学習サポートルーム」も活気づいている。児嶋教授は、「学生たちは“語学の獨協”の充実した英語学習環境に刺激され、学習意欲を高めている」と話す。キャンパス内には英語力を磨くのに十分な環境が整う。全学共通カリキュラムの英語の授業や学科独自の授業をはじめ、

留学生と交流できるICZ (International Communication Zone)、英会話のレッスンを受けられるChat Roomなども人気だ。さらに、行動力のある学生たちは自発的に英字新聞を発行したり、東南アジアで現地の人と英語で交渉をして商品開発へ結びつけたりするなど、実践的な場で英語力を磨いている。

在学中から卒業後も 自律学習できる人に

児嶋教授は、このようにして大学時代に培った英語力を、社会人になって維持向上することの重要性を強調する。「私たちはあくまで学生をサポートする立場。最終的には自律学習できる人になってもらうことが目的です」。獨協大学では、自律学習支援に力を入れ、学習の進捗状況を把握できるシステムを整えている。学生は、インターネット環境さえあれば、どこにいてもIDとパスワードを入力するだけで、e-ラーニングを使って学習することができる。また、英語学習サポートルームでは、英語力が伸び悩む学生や、留学に向けて英語力を伸ばしたい学生に、専門スタッフがアドバイスをするなど、自律学習を支える体制も万全だ。

卒業生たちは、高い英語力を武器にグローバルに活躍している。在学中からキャンパス内で外国人留学生やネイティブの先生と接することが多いため、「分からない英語表現などがあれば、ネイティブの先生に聞きに行くなど、英語でコミュニケーションを取ることに抵抗がないからでしょう」と話す。

「入学前の英語の基礎力を測る指標として、TEAPなどの英語資格・検定試験を活用してもらえたら」と期待する児嶋教授。「高校生は大学の授業を受ける準備段階。まずは基礎を磨いて、大学入学後は英語をツールとして大いに活用してほしい」と話した。

語学力と論理的思考力を 評価するAO入試

同志社大学商学部では、2017年度のAO入試から、英語資格・検定試験を活用した独自の入試を行っている。それまでは全学部統一で、「自己アピールできるものを持ち、それを第三者に説明し、説得できる能力を有している学生」を広く求めているが、国際的に活躍できる人物の育成をめざす商学部では、2017年度入試から、従来求めていた能力や資質に、「語学力」をプラスした。辻村元男教授は、「ビジネスの基本は英語。バランスよく能力を磨く意味でも、4技能の試験がふさわしい。TEAPは、高校生の段階で身に付けてほしい能力や、基礎的な英語力を測ることができる」と採用の意図を話した。そして、「高等学校の授業でスピーキングを伸ばすことはなかなか難しいが、論理的思考力を身に付けてきてほしい」と考えているため、TEAPなどの試験は、論理的な文章を英語で書くことができる力を測るうえでも非常に重要である、としている。

商学部のAO入試では、出願資格としてTEAPなど英語資格・検定試験のスコアを提出するほか、小論文と面接、英語による3分間の自己PRの録画資料提出を課すなど、語学力と論理的思考力を測る。

高い語学力と学習意欲のある 学生が入学している

商学部では、「国際社会を舞台に、問題解決できる人間」「自由な発想と高い語学力を備えながらも、ビジネスに興味を抱く学生」を育成するという理念を実現すべく、語学力を重視したカリキュラムを設置している。1年次はまず、基礎的な英語力を身に付け、2年次には演習が

始まり、小規模なクラスでの授業が行われる。3年次以上は専門的なビジネス英語のカリキュラムが生まれ、さらに上のレベルをめざす学生には、授業を全て英語で受けるクラスも用意されている。

2017年4月に入学した新入試制度の

1期生の多くはCEFRのB1レベルを優に超える英語力を持つという。「入学後の成績を見ても、かなり優秀である」と辻村教授は話し、高い能力と志を持って入学した学生が、他の学生にも良い影響を与えることに期待を膨らませた。

高い語学力と広い教養を持ち 国際社会で活躍できる人物を育成

同志社大学では、2017年度の商学部のAO入試から、英語資格・検定試験を出願資格に定めた（TEAPは2018年度入試から）。商学部の辻村元男教授は、「国際社会で活躍できる人物」とする商学部が求める資質を測るうえで、TEAPなどの4技能型の試験で、より効果的に学力を測ることができる」と話す。TEAPを導入した経緯や、新しい入試制度による1期生を迎えての現在、大学での授業の様子などを伺った。



同志社大学 商学部 辻村 元男 教授

基礎を身に付け、教養を学び 世界へ羽ばたいてほしい

めまぐるしいスピードで進むビジネスの世界において、「10年後にはもう、今学んでいる知識は役に立たないかもしれないが、その後も自ら学び続けていく力を学生時代に身に付けてほしい」と辻村教授は望む。

商学部では語学のほか、統計教育にも力を入れており、1年次から簿記と統計が必修科目だ。辻村教授は「ビジネスにおいては統計的な素養が極めて重

要。それに語学力が備われば、鬼に金棒ですね」と話す。そして、在学中の海外協定校への留学も推奨する。

同志社大学は、設立当初から「教養」を重要視してきた。「TEAPは“Test of English for Academic Purposes”の名前が表す通り、大学での学びのための準備。しっかりした基礎と教養があれば、その後も学び続けることができる」と辻村教授。「高等学校の段階でしっかりと基礎を身に付け、大学で広く教養を学んで、大きく巣立ってほしい」と、期待を込めて語った。

2016年度 英検協会 英語教員海外研修

帰国後の取り組み報告

「英語教員の英語力や指導力、資質向上」を目的として、公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は毎年夏期に教員海外研修を実施している。2016年度からは公募選考制となり、小・中・高等学校ともにオーストラリアのニューサウスウェールズ大学（UNSW）への派遣となった。36名の参加者たちは、研修にあたりどのような課題を持ち、16日間にわたる研修で何を学び、その成果を現在どのように生かしているのだろうか。研修の意義や内容と、参加者から寄せられた帰国後の実践報告を連載する。



2018年度 教員海外研修参加者募集 締切迫る！

公益財団法人 日本英語検定協会（英検協会）は、毎夏、小学校・中学校・高等学校で英語を教える先生方を対象とした海外研修を実施し、参加者を公募しております。2018年度も、研修への参加を希望される先生方を公募いたします。本研修は外部の有識者を含む選考委員会で厳正・公平に選考を行い、通過された方にご参加いただけます。参加申し込みの締め切り日が近づいておりますので、ご興味のある方は英検協会ウェブサイトをご確認の上、お早めにご応募くださいませ。

WEBサイト <http://www.eiken.or.jp/eiken/group/info/#case69>

■参加申込締切：2018年2月9日（金）必着

■研修期間：2018年7月28日（土）～8月12日（日）の16日間

※研修参加者の皆様を2つのグループに分けて渡航していただきます。出発日は同じですが出発時刻がグループによって異なる場合がございます。

■渡航先：オーストラリア ニューサウスウェールズ大学
(University of New South Wales)

※研修プログラムの詳細等は渡航前研修時にご説明いたします。

※現地でのカリキュラムは全て英語で行われます。

■宿泊：ホームステイ（1人1家庭、個室あり、平日は朝食・夕食付、休日は家にいる場合は朝食・昼食・夕食付）

※ホームステイ先は大学が手配いたします。手配するにあたり、ご希望をお伺いし、できるだけご希望に沿うよう手配を依頼いたしますが、全てのご希望に添えない場合もございます。予めご了承くださいませよう、お願いいたします。

■お問い合わせ先

〒162-8055 東京都新宿区横寺町55

公益財団法人 日本英語検定協会 CS部 海外研修申込み係
電話番号：03-3266-8019

REPORT

高等学校

より良いアプローチを求めた授業改善

静岡県立浜松北高等学校 教諭 久保田 愛



研修で学んだこと

研修では、今までの自分の思い込みや信じてきたことを覆される、さまざまな話を聞くことができました。帰国後は、研修中の経験を思い出し、「本当にこれで良いのか」「もっと良いアプローチやタスクはないのか」など、自らに問い掛けながら授業に向き合っています。

研修後の取り組み

① 母語を一切使わない、英語のみの授業形態へ転換

「生徒が母語を発することを受け入れる」ことをやめた。

「生徒には伝えたいことがある」という事実を大切に、母語の使用を受け入れてきたが、研修において「一度でも母語の使用を許してしまうと、学習者が母語に頼るようになってしまう」という趣旨の話聞き、納得する部分があった。教師の「英語で」という姿勢によって、生徒は、どうにかして英語で伝える努力をするだけでなく、英語のみの授業を楽しむようになった。

② 文脈から意味を予測する機会を作る

新出単語とその意味（英英）のリスト配付をやめた。

意味を調べる時間を省くこと、英語が苦手な生徒へのサポートを考えて配付していた新出単語リストをやめた。これにより、「全部完璧に分らないと読めないのが不安だ」から、「分らない部分があっても読めるから大丈夫」という意識が変わっていった。

③ 意味や目的のある音読

何のための音読かを丁寧に考える。

「音読は非常に高度な能力を必要とするが、実用場面で音読をすることはほとんどない」という話があり、衝撃を受けた。経験上学習者としても、音読によって身に付くものがあると感じていたし、音読の効果は研究でも認められていると信じていた。研修後は、声に出して英文を読む場合、それが何のためなのかを丁寧に考え、授業に取り入れている。

今後の抱負

授業の取り組み方や内容において、一般に信じられていること、自身が教わってきたこと、大切にしてきたことが必ずしも正解ではないということを再認識しました。今後も、従来のやり方を過信せず、疑うべきところを疑い、迷いながらも生徒の視点に立って、より良い授業を模索していこうと思います。



生徒の表現力を高める活動

新潟県 新潟市立新津第一中学校 教頭 小林 英男 (研修当時: 新潟市立山潟中学校 教諭)

研修で学んだこと 研修では、生徒の発言をうまく引き出し、発展させ、その発言を褒めることで、生徒の学習意欲を高めることが大切であるということを学びました。

研修後の取り組み ① 生徒の表現力を高める帯活動
(1) Guessing Gameで表現力の向上を図る
9枚の食べ物の絵の中から、相手が選んだ1枚の絵を“Are you ... ?” “Do you ... ?”を用いて質問しながら当てる活動をした。食べ物の中身や特徴を自分なりの表現で質問し、また、それらの表現をクラスで共有することで、個々の表現力の向上を図ることができた。

(2) 1 Minute Chatで表現力を身に付ける
先生が提示する“What time do you leave home?”などのトピックについて、授業の初めにペアで1分間会話をする。相手の答えに対して即興で質問をすることで、表現力が身に付いた。また、表現を褒めることで、生徒の学習意欲が向上した。

② 即興での表現力を高めるスピーチ活動
自己紹介のパフォーマンステストで即興での表現力を高める
パフォーマンステストでは、ALTの先生に10分程度の自己紹介をして、先生からの質問に答える。リハーサルとして行ったグループでの発表では、発表に対してコメントをすること、一人1回は必ず質問することを課し、生徒たちのジェスチャーを駆使して伝える姿、スピーチの良さを探す姿などが見られた。本番のテストでは、生徒たちはアイコンタクトやジェスチャーを心掛けて、ALTの先生の質問を正確に聞き取り、的確に答えていた。

今後の抱負 相手の考えに対して、即興で自分の考えを述べたり質問をしたりすることを通して、生徒はコミュニケーションの楽しさを実感していました。また、友達や先生から認められ、褒められることで、学習意欲も高まっています。今後も、達成感や充実感を味わえる授業を実践しながら、生徒の表現力を高めていきたいと思っています。



児童の思考力・判断力・表現力を豊かにする授業

東京都 墨田区立二葉小学校 主任教諭 平澤 卓磨

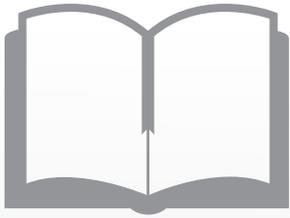
研修で学んだこと 研修では、自身の指導内容や方法について振り返ることができ、大変貴重な経験につながりました。帰国後は、現地で学んだ教授法や指導方法を授業に取り入れたことによって、児童の反応を引き出し、児童が英語の音声に慣れ親しむことのできる活動を実践しています。

研修後の取り組み ① 活動の目的を明確にした指導内容を設定する
「どのような力を付けさせるか」だけでなく、これまでの活動の流れを振り返り、本時の流れを明確にし、ねらいを子供たちから引き出すようにした。

実践授業では、動物に対する意識や考え方が国によってさまざまであることに触れた。単元の最後には、動物を扱った絵本を作って低学年の児童に紹介した。絵本作りの題材につながる、目的意識と相手意識を明確化した授業設定にしたことで、「さらに良いものを作ろう」「より面白く表現したい」という意欲の向上が、自己評価カードや活動の様子から感じられるようになった。

② 思考を引き出す工夫をする
言葉を一方的に教えるのではなく、「引き出す」指導法を取り入れた。
最初の文字の音だけを伝えたり、その単語に関する言葉、表現や場面をショートセンテンスで紹介したりすることによって、考えたり推測したりしながら考える活動場面を設定した。また、自分の気持ちや考えを伝える場面を増やし、子供同士の認め合う時間を充実させることにより、自己肯定感や相手を認める意識を持たせるようにした。

今後の抱負 今後も、研修を通じて学んだ教授法を授業で実践することにより、児童の思考力・判断力・表現力をさらに豊かにするヒントを探りながら、授業に取り入れていきたいと思っています。



わたしのオススメ本

英語教育に携わる皆さんにオススメの書籍をご紹介します。
今回は、CLASS REPORTで取材に訪れた学校の先生方から、
明日からの授業づくりに役立つ書籍をご推薦いただきました。

1 『英語授業のユニバーサルデザイン つまづきを支援する指導&教材アイデア50』

瀧沢 広人 (著)
明治図書出版 定価2,441円(税込) 2013年1月発行



福島県 猪苗代町立東中学校
渡部 真喜子 先生

この本は、個性豊かな生徒たちに対する温かな視点と、がんばりを見逃さず、しっかりと認める姿勢を改めて思い出させてくれた本でした。私が作成したCAN-DOリストの「Students First」と「他者間比較より個人内比較」の基本理念の構築に影響を与えた本のうちの1冊です。内容には共感する点が多く、授業は「楽しく」という点もそのうちの1つです。英語の苦手な生徒や支援が必要な生徒に、教師はどのようにアプローチすればよいのか。クラス全員が分かるようにするためには、どのような指導をすればよいのか。授業における「つまづき」を支援するための授業のアイデアを、ユニバーサルデザインの視点で紹介しています。場面別の支援や指導法のQ&A、つまづきを克服する便利なプリント例も豊富に掲載されています。

2 『実践例で学ぶ第二言語習得研究に 基づく英語指導』

鈴木 渉 (編)
大修館書店 定価:1,944円(税込) 2017年7月発行



福井県立藤島高等学校
三仙 真也 先生

私たち英語教員は理論的な裏付けに基づかず、経験則的な実践をする傾向にあるのではないのでしょうか。目の前の生徒は刻々と成長・変容していくのが常で、その都度、指導法を省察し、改善していくことは必要です。しかし、その改善は経験則や生徒の反応によるものが中心で、理論上、最善のものと言い切れるのでしょうか。「問題なく」教えている(ように見える)ことに満足していないのでしょうか。現場で常に生徒に向かう私たちにとって、理論を学ぶ場は限られています。第二言語習得研究(SLA)に基づいたこの1冊は、学校現場に即し、かつ研究に基づいた内容で非常に示唆的です。なかでもライティングのフィードバックや、プライミングに関する内容は秀逸で、SLAに基づいて実際に教室でどのように英語を指導するのが効果的か、実践例をもとにして解説してあります。教員が多忙を極め、ゆっくりと本を読む時間がなかなか取れない昨今、悩んだときに実践のよりどころとなる1冊であると自信を持ってオススメします。

Present!

本コーナーでご紹介した書籍を読者の皆様へプレゼントいたします。
ご希望の書籍の番号と下記の必要事項をご記入のうえ、P.55のFAX申込用紙またはEメールにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

- ① 氏名 ② 所属(勤務校名)・役職 ③ 連絡先(住所、電話番号、メールアドレス) ④ ご希望の書籍番号
⑤ 今号で興味深かった記事とその理由 ⑥ 今後、本誌で取り上げてほしい内容や意見

抽選で各1名様にご希望の書籍を差し上げます。皆様からのご応募をお待ちしております。

応募締切

2018年3月31日(土)

応募方法



03-5439-6879



eigojoho@morecolor.com

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

わたしのオススメ本プレゼント
FAX 申込用紙

英検 英語情報編集部宛



03-5439-6879

P.54でご紹介した書籍のうち、ご希望の書籍の番号に○をして、下記の必要事項をご記入のうえ、FAXにて、『英語情報』編集部までご応募ください。

ご希望の書籍のいずれかに○印をご記入ください。

1	『英語授業のユニバーサルデザイン つまづきを支援する指導&教材アイデア50』	2	『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』
----------	--	----------	--------------------------

氏名	(氏)フリガナ	(名)フリガナ
所属	勤務校名	役職
連絡先	住所 □□□□-□□□□	
	都道 府県	
	電話番号	

※当選者の発表は商品の発送をもって代えさせていただきます。応募時に記載していただいた個人情報は、本件以外の目的には使用いたしません。

1. 『英語情報 冬号』で興味深かった記事は何ですか？ 該当するものの番号に○をつけてください。(複数回答可)

- | | |
|----------------------------------|--------------------------------|
| 1. NEWS&TOPICS | 9. 海外夏季短期留学報告 |
| 2. 特集「小・中・高等学校における 学習評価のあり方を考える」 | 10. 「学習到達目標と指導、評価の一体化」を目指して |
| 3. 特集事例 CLASS REPORT | 11. 英検4級・5級で広がる英語の世界 |
| 4. 英語で授業7つの鉄則 | 12. 英検2級の「壁」を超えるための授業実践 |
| 5. 新教育課程に向けて | 13. 第8回TEAP連絡協議会レポート |
| 6. 第67回全英連新潟大会レポート | 14. TEAP活用事例「獨協大学」「同志社大学」 |
| 7. 明海大学 高野敬三副学長に聞く | 15. 2016年度英検英語教員海外研修「帰国後の取り組み」 |
| 8. 大阪府立箕面高等学校の教育 | 16. わたしのオススメ本 |

2. 上記の記事が興味深かった理由がありましたら、記事の番号とともにご記入ください。

3. 今後、本誌で取り上げてほしい内容やご意見がございましたらご自由にお書きください。

Cover Photo:

熊本市立楠小学校 教諭 清水 佳代
 猪苗代町立東中学校 教諭 渡部 真喜子
 福井県立藤島高等学校 教諭 三仙 真也
 吉野ヶ里町立三田川中学校 教諭 吉田 喜美子

編集後記

今号は「小・中・高等学校における学習評価のあり方を考える」を特集しました。4技能をバランスよく指導し、児童生徒の言語活動主体の授業へと転換している現在では、評価のあり方も従来通りではないはずです。児童生徒に身に付けさせたい力とそのためへの指導、そして、その力が身に付いたのかを適切な方法で評価する。つまり、学習到達目標と指導、評価は一体でなければなりません。特集記事では、明治大学の尾関直子先生が評価のさまざまな方法をご紹介くださり、CLASS REPORTではCAN-DOリストに基づいた効果的な指導を実践している学校の授業を動画と記事でご紹介していますので、ご一読ください。ほかに全英連新潟大会や、大学入試改革に向けた議論を誌上公開したTEAP連絡協議会などを取材し、レポートしています。『英語情報』はこれからも、2020年度に向けた国の動向をはじめ、地域や各学校の取り組みを取材し、英語教育改革の最新情報を発信してまいります。誌面へのご要望をぜひ、編集部へお寄せください。
 『英語情報』編集部一同

英語情報 2018 冬号

2018年2月1日発行

発行 公益財団法人 日本英語検定協会
 総務部 総務課
 〒162-8055
 東京都新宿区横寺町55

編集統括 株式会社モアカラー
 アートディレクション・制作 株式会社モアカラー
 印刷 日新印刷株式会社
 製本 有限会社穴口製本所

©無断転載、複製を禁じます。
 ©2018 公益財団法人 日本英語検定協会

英検試験問題と解答のウェブサイト公開のご案内

公益財団法人 日本英語検定協会は、より広範な情報公開と、サービスの質的向上を図るべく、一次試験問題を英検ウェブサイトにて公開するサービスを行っております。一次試験日から約1週間後に問題を提供いたします。英検ウェブサイトのURLは、下記の通りです。

英検試験問題 <http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/>

一次試験の「解答速報」は、毎回一次試験日の翌月曜日13時以降に英検ウェブサイトにて公開いたします。

英検解答速報 <http://www.eiken.or.jp/eiken/result/>

本誌について

お問い合わせ先 英検サービスセンター TEL 03-3266-8311

本誌は以下、英検ウェブサイトよりPDFにてダウンロードしていただくことが可能です。
<http://www.eiken.or.jp/eiken/group>

お問い合わせ電話案内

電話番号はお間違えないようお願いいたします。

- 英検申込受付に関すること (出願、検定料など) **英検サービスセンター** (個人) **03-3266-8311**
- 英検受験に関すること (受験票、会場、合格通知など) **英検サービスセンター** (団体) **03-3266-6581**
- 英検 Jr. に関すること **英検サービスセンター** (英検 Jr.) **03-3266-6463**
- 研究助成に関すること **英語教育研究センター** **03-3266-6706**
- BULATS に関すること **BULATS 事務局** **03-3266-6366**
- IELTS に関すること **IELTS 事務局** **03-3266-6852**
- TEAP に関すること **TEAP 運営事務局** **03-3266-6556**
- 英検留学に関すること **英検留学情報センター** **03-3266-6839**
- 通信講座に関すること **通信教育課** **03-3266-6521**
- その他のお問い合わせ **英検サービスセンター** **03-3266-8311**

※全国の英語教育に関する研究会、セミナーなどのウェブへの情報掲載については、英検のウェブサイトのフォームよりお申し込みください。

2018年度 実用英語技能検定 試験日程

第1回検定	第2回検定	第3回検定
申込受付 協会必着 3/9金~5/11金 【書店締切：5/7日】	申込受付 協会必着 8/1水~9/14金 【書店締切：9/7日】	申込受付 協会必着 11/30金~12/26水 【書店締切：12/19水】
一次試験 6/3日 (筆記・リスニング)	一次試験 10/7日 (筆記・リスニング)	一次試験 2019/1/27日 (筆記・リスニング)
準会場 すべての団体 6/2日・3日 中学・高校のみ 6/1日	準会場 すべての団体 10/6日・7日 中学・高校のみ 10/5日	準会場 すべての団体 1/26日・27日 中学・高校のみ 1/25日
二次試験 (面接形式のスピーキング) A日程 7/1日 B日程 7/8日	二次試験 (面接形式のスピーキング) A日程 11/4日 B日程 11/11日	二次試験 (面接形式のスピーキング) A日程 2019/2/24日 B日程 2019/3/3日

※4級・5級のスピーキングテストの受験日は、申し込まれた各回次の一次試験合格発表日から受験が可能です。各回次の二次試験日(1級~3級)から約1年間ご受験いただけます。詳しくは英検ウェブサイト内4級・5級スピーキングテスト特設サイト (<http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/4s5s/>)をご覧ください。

お知らせ

「英検」研究助成制度のご案内

～第31回(2018年度)研究テーマ募集～

「英検」研究助成制度とは

公益財団法人 日本英語検定協会(英検協会)の「英検」研究助成制度は、全国の小学校・中学校・高等学校・高等専門学校
の先生方、大学院の方から研究テーマを募集し、英語教育やテストの専門家による選考を経て、入選者に助成金を交付して、研究を支援する事業です。

実用英語の普及・発展と英語能力検定試験の質的向上を目的に1987年に発足し、今回で31回目を迎えます。

「英検」研究助成制度の応募総数は、累計で1,400点を超えました

これまでの応募総数は1,400点を超え、そのうち360点以上が選考されました。入選して研究期間後に提出された論文は、英検協会発行の研究報告書「EIKEN BULLETIN」および英検ウェブサイト等で広く公表され、教育現場をはじめ、関係者の間で活用されています。

第31回(2018年度)研究テーマ募集要項

募集テーマ

- A 研究部門…英語能力テストに関する研究
- B 実践部門…英語能力向上を目指す教育実践
- C 調査部門…英語教育関連の調査・アンケートの実施と分析

応募資格

- 小学校・中学校・高等学校・高等専門学校で英語教育に携わる先生(共同研究も認めます)
- 英語教育に関わる研究を専攻する大学院に在籍する方

ただし、以下のいずれかの条件に該当する方は応募できません。

- ・「研究」を主たる生業としている方(共同研究者の方も含む)
- ・第29回および第30回の研究助成制度に入選された方
- ・研究テーマ(企画内容)が、過去に発表したことがあるもの、または発表する予定のもの(ともに大学院等での修士論文も含みます)
- ・他の団体等から委託されたもの、または委託される予定のもの

応募期間

2018年2月1日～4月6日

(詳細は英検ウェブサイト上で公表)

研究助成金交付額

全部門で30万円以内

詳細、お問い合わせにつきましては、英検ウェブサイトまたは「英検研究助成」でご検索ください。

http://www.eiken.or.jp/center_for_research/

英検研究助成

検索

「英検」研究助成制度に関するお問い合わせ

公益財団法人 日本英語検定協会 英語教育研究センター「英検研究助成」担当

Email : center@eiken.or.jp

英語教育や英語能力テストに関わる多くの皆様からの独創的かつ有用な企画のご応募をお待ちしております!

